行四段一格」と云ふ、(形容詞は、くしき形容詞、しくしき形容詞を云ふ、委しくは形容詞の條下を見るべし、)是も良行四段一格とはたらきは同じけれど、受くる助詞すこし異なり、然る故に、良行四段一格の一種と云ふ、「淺く」「戀しく」(いづれも形容詞なり、)等の詞に「あり」といふ詞添はりて、「淺くあり」「戀しくあり」となる、其「くあ」つゞまりて「か」となりて、ここにうつり來てはたらく例なれば、此の段に活動く詞多し、

第二節　兩種活用

動詞は數おほし、然れども、此の十種にもるゝはなし、さてまた、心得べきことは、四段にはたらく詞の中二段にもはたらくあり、「しのぶ」「しのぶる」「まなぶ」「まなぶる」の類なり、(「しのぶ」は四段なり、「しのぶる」は中二段なり、)しかれども、意はいづれもかはることなし、此の類多し、委しくは大文典を見るべし、

第三節　自動詞　他動詞

動詞は、おの〳〵うまれながらに自他あり、是を自動詞他動詞と云ふ、その例を示さむに、「みゆる」「きこゆ」は自動詞なり、「みる」「きく」は他動詞なり、此の自動詞他動詞を速に知らむには、自動詞は「に」と云ふ助詞の下に起るものなれば、それを標準とすべし、他動詞は「を」と云ふ助詞の下に起るものなれば、それを標準とすべし、

自動詞　こゝに見ゆ
　　自動詞　かしこにきこゆ
　　他動詞　ものを見る
　　他動詞　おとをきく

此の例にていづれの詞も同じさだめなり、但「浪の音きこゆ」と云ひては「に」より起らずしていづれ共定めがたきやうなれど、しからず、「浪の音こゝにきこゆ」と云ふ意にて、自動詞なり、また「よそに見る」と云ひては「見る」と云ふ詞「に」より起りて自動詞のやうなれど、しからず、「よそにものを見る」と云ふ意にて、他動詞なり、さて亦心得べき事は、自動詞も他動詞に通ふことあり、「わらふ」と云ふ詞は自動詞なれど、「人をわらふ」と云へば、他にうつりゆく意となりて、他動詞になるなり、(「人をわらふ」とをより起れり)是を自動他動相通ふと云ふ、「わらふ」と云ふ詞は原自動詞にして、他動詞にも通ふと知るべし)かく通ふ故は、「あざける」など云ふ詞にかへて用ゐる故なり「あざける」は他動詞なり、)「おつる」と云ふ詞は自動詞なれど「城をおつ」と云へば、他へうつりゆく意となりて他動詞になるなり、是も亦相通ふ例なり、かく通ふ故は、「にぐる」など云ふ詞に代へて用ゐる故なり(「にぐる」は他動詞なり、此の類あり、心得おくべし、尙、この意を示さむに、自動詞は、その物にかざり、その事にとゞまるなり、「ねぶる」と云ふ詞は、我が身の「ねぶる」にて他へはうつらず、是を自動詞と知るべし、「うつ」と云ふ詞は、物を持ちて物をうつにて、此方のものゝ彼方の物にわたるを「うつ」と云ふ、是を他動詞と知るべし、かくてもなほ、初學の輩はまどふべければ、上文に擧げたる動詞の標準の詞に、自動他動をしるして示す、(但、自としるすは、自動詞の省略、他としるすは、他動詞の省略なり、)

動詞自他標準

〔四段〕　他自　押他　立自　逢自　住自　降自
〔一段〕　着他　似自　干自　見他　射他　居自
〔中二段〕　起自　落自　戀他　恨他　老自　下自
〔下二段〕　得他　受他　痩自　捨他　寢自　經他
　　譽他　消自　枯自　植他
〔加行變格〕　來自
〔佐行變格〕　爲自
〔奈行變格〕　往自
〔良行四段一格〕　有自
〔四段五階轉成良行四段一格〕　他有自
〔形容詞二階轉成良行四段一格〕　淺有自

これらの例にならひて自動詞他動詞を知りわくべし、

第四節　動詞轉用

動詞には、おの〳〵原言ありて、(原言とは、上文に自動他動をしるして擧げたる言ども皆これなり、)その原言に、「使令言」「爲所言」あり、(使令言は、佐行下二段、麻行下二段に活動き、「爲所言」は良行下二段に活動く定なり、)「他」と云ふ詞にて云はば、「あく」は原言(我が他くなり、)「あかする」「あかしむる」は使令言、(他をして他かしむるなり、)「あかるゝ」「あかせらるゝ」は爲所言(他に他かるゝ他に他かせらるゝなり、)なり、その例を示さむに、「清盛重衡をして東

大寺をやかす」と云へば、清盛わが子重衡に命して東大寺をやかしむるにて、これ使令言なり、然るを、「東大寺やかる」と云へば、爲所言となりて、重衡にやかるゝことゝなるなり、然るをまた、「東大寺やくる」と云へば、原言にして、使令爲所にかゝはらず、たゞ、やくることなり、いづれの動詞も皆此さだめなりと知るべし、辨ずるうへはまどふことなかるべけれど、初學の輩のために、圖をあらはして示す、

動詞轉用表

自動詞混收	他動詞	佐行下二段	四段	他	あく
				自	あかする あかしむる
				他	おす
				自	おさする おさしむる
				自	たつ
				他	たゝする たゝしむる
				自	あふ
				他	あはする あはしむる
				自	すむ
				他	すまする すましむる
				自	ふる
				他	ふらする ふらしむる
		麻行下二段		他	あかるゝ あかせらるゝ
				他	おさるゝ おさせらるゝ
				他	たゝるゝ たゝせらるゝ
				他	あはるゝ あはせらるゝ
				他	すまるゝ すませらるゝ
				他	ふらるゝ ふらせらるゝ
	自動詞	良行下二段		自	あかるゝ あかせらるゝ
				自	おさるゝ おさせらるゝ
				自	たゝるゝ たゝせらるゝ
				自	あはるゝ あはせらるゝ
				自	すまるゝ すませらるゝ
				自	ふらるゝ ふらせらるゝ

一段				他	きる
				自	きさする きしむる
				自	にる
				他	にさする にしむる
				自	ひる
				他	ひさする ひしむる
				他	みる
				他	みさする みしむる
				他	いる
				他	いさする いしむる
				自	ゐる
				他	ゐさする ゐしむる
				他	きらるゝ
				他	(にらるゝ)
				他	(ひらるゝ)
				他	みらるゝ
				他	いらるゝ
				他	ゐらるゝ
二段	中二段			自	おくる
				自	おきさする おきしむる
				自	おつる
				他	おちさする おちしむる
				他	こふる
				他	こひさする こひしむる
				他	うらむる
				他	うらみさする うらみしむる
				自	おゆる
				他	おいさする おいしむる
				自	おる
				他	おりさする おりしむる
				他	おきらるゝ
				他	おちらるゝ
				他	こひらるゝ
				他	うらみらるゝ
				他	(おいらるゝ)
				他	おりらるゝ
	下二段			他	うる
				他	えさする えしむる
				他	うくる
				他	うけさする うけしむる
				自	やする
				他	やさする やしむる
				他	すつる
				他	すてさする すてしむる
				自	ぬる
				他	ぬさする ぬしむる
				他	えらるゝ
				他	うけらるゝ
				他	(やせらるゝ)
				他	すてらるゝ
				他	ぬらるゝ
				他	(へらるゝ)

三段				他	ほむる
				他	ほめさする ほめしむる
				他	ほめらるゝ
				自	きゆる
				他	きえさする きえしむる
				他	きえらるゝ
				自	かるゝ
				他	かれさする かれしむる
				他	かれらるゝ
				他	うゑる
				他	うゑさする うゑしむる
				他	うゑらるゝ
變格				自	くる
				他	こさする
				他	こらるゝ
				他	する
				他	せさする せしむる
				他	せらるゝ
				自	いぬる
				自	いなする いなしむる
				自	いなるゝ いなせらるゝ
瓦行四段一格				自	ある
				自	あらする あらしむる
				自	あらるゝ あらせらるゝ
				自	あける
				自	あさかる

此の例を見て原言使令言爲所言を知るべし、また、「あける」「あさかる」などは使令言爲所言はなし、されば、圖を空しくして是を知らしむ、また爲所言の中に圖をしたる詞どもは用ゐずても事たる詞なる事を知らしめたるなり、

第五節　動詞時限

動詞の時限とは、動詞に「未來」「過去」「現在」の三世あるを云ふ、一階は未來なり、二階は過去なり、三階は現在なり、四階も亦現在なり、五階は過去を含める現在なり、(但、五階も命令法に用ゐれば常の現在なり)十種共に皆然り、(三階四階共に現在なれど、三階は意輕し、四階は意重し、是は係詞に應じて結詞となるときの心得なれど、こゝにいさゝか辨ず、委しくは係詞の條下に云ふを見るべし、)

動詞を受くる助詞は、詞ごとにさだまりあり、三詞畧圖を見て知るべし、

第十四章　助詞

此の詞の助詞と云ふゆゑは如何なるゆゑぞと云ふに、よろづの詞を助けてその意をとゝのふるものなれば、かく云ふ、(てにをはと云ふは即これなり、)

此の助詞に「名詞を受くる助詞」「動詞を受くる助詞」「名詞動詞を兼ねて受くる助詞」の三種あり、その中に活動くあり、活動かぬありいち〳〵示す、

第一節　名詞の助詞

ながら　　がてら
たり　　せり
へ　　など

これらは名詞を受くる助詞なり、

(イ) ながら と云ふ言は、「しか〳〵のまゝにて」また「しかしかのまゝなれど」と云ふ意なり、

海山はむかしにかはらずありながら

我がおほぎみは神ながら

ごゝに心うべき事あり、ありと云ふ詞は、動詞なれども、ながらと云ふ助詞へ云ひつゞくれば詞名となるさだまりなり、(ありは云ひすわれる名詞なり、)「見ながら」「聞きながら」「云ひながら」など云へば、見聞云も名詞なり、是らを標準として知るべし、然るゆゑに名詞を受くる助詞と云ふ、以下皆此のさだめなり、

(ロ) がてら と云ふ言はわざとはせずして「ものゝついで」の意なり、

花見がてらに人を訪ふ

採薬がてら山にあそぶ

こゝにこゝろ得べき事あり、「花見がてら」の見は動詞なれど、「がてら」へつゞけば名詞なり、「ゆきがてら」「とひがてら」「ぬぎかへがてら」などの行、訪、脱替も名詞なり、(こゝの見、行、訪、脱替また上文の「ながら」の條下に擧げたる有、見、聞、云などは動詞二階のなれる名詞なり、名詞の條下見あはすべし、)

(ハ) たり と云ふ言は、「しか〳〵とあり」と云へる「とあり」のつゞまりて「たり」となれるにて、「しかじかとしてあり」と云ふ意なり、

頼義は鎮守府將軍たり

海水渺々たり

此の言に活動あり、たら、たり、たる、たれ、とはたらくなり(はたらきの規則は、三詞器圖に示す、)

(ニ) せり と云ふ言は、「しか〳〵したり」と云ふ意なり、

道すがら克く案内せり

彼と是と符合せり

此の言に活動あり、せら、せり、せる、せれ、とはたらくなり、

(ホ) へ と云ふ言は方角を指す言なれど、たしかには指さず、大かたを指すなり、

京へのぼる

田舎へゆく

此の言は活動なし、

(ヘ) など と云ふ言は數多のものを何や彼やとひき統べてうけもつ意なり、

さま〳〵の物がたりなどす

いろ〳〵の花などさけり

此の言に活動なし、(などは名詞を受くる助詞なること勿論なれど、係詞を結びてきれたる動詞助詞をも受けてつゞくることあり、(此の六種を「名詞を受くる助詞」と云ふ、さてまた心うべきことは、六種の中「ながら」「がてら」「へ」「など」等の四種は、副詞ともなるなり、(副詞の條下を見るべし、)たり、せり等の二種はたる、せる、と活動けば形容詞ともなるなり、(形容詞の條下を見るべし、)

第二節　動詞の助詞

動詞を受くる助詞に五種あり、その五種は、一階を受くる助詞、二階を受くる助詞、三階を受くる助詞、四階を受くる助詞、五階を受くる助詞等の五種なり、動詞を受くる助詞は、いづれも法に係はるものにして、言の意を善く味ひ知らずてはあるべからざらものなればいち〳〵示す、

第一　動詞一階助詞

ず　ざり

じ　で

む　まし

なむ　ば

これらを一階を受くる助詞と云ふ、

(イ) ず と云ふ言は「しかせぬ」意あり、

ものをいはず　きるゝずなり

聲もきこえず　きるゝずなり

他かず見る　つゞくずなり

たえずおこなふ　つゞくずなり

此の言に活動あり、ずぬねとはたらくなり、(ずにきるゝと、つゞくとあり、例を見て味ひ知るべし、

(ロ) ざり と云ふ言は、ずありのつゞまりてざりとなれるにて、「しか〳〵せずあり」と云ふ意なり、

いまだしらざりけり

遠くはゆかざりけり

此の言に活動あり、ざら、ざり、ざる、ざれ、とはたらくなり、

(ハ) じ と云ふ言は、ずの轉じたるものなり、轉ずるにしたがひて意も亦轉ず、その意を云はば「しかすまじ」或は「しかあるまじ」と云ふ意にて、力をいるゝおもむきなり、

さやうの所へ我はゆかじ
彼の人に我はあはじ

此の言に活動なし、

(ニ) て　と云ふ言は「しかせずして」と云ふ意也、ずてと云ふも同じ、
道もしらでゆく
人にあはてかへる

此の言に活動なし、

(ホ) む　と云ふ言は、「しかあらむ」と云ふ意なり、
今日は花を見む　　きるゝむなり
共にゆかむ人もがな　　つゞくむなり

此の言に活動あり、むめとはたらくなり、(むにきるるとつゞくとあり、例を見て味ひ知るべし、)

(ヘ) まし　と云ふ言は「しかせむと意に欲する」といふ意なり、
今日は花を見まし　　きるゝましなり
共にゆかましものを　　つゞくましなり

此の言に活動あり、まし、ましか、とはたらくなり、(ましにきるゝと、つゞくとあり、例を見て味ひ知るべし、)また、こゝろ得べきことは、ましとまじと意遠く隔りて音はなはだ近し、混ずべからず、(まじは、動詞一階を受け、まじは動詞三階を受くる定なれば、是を標準とすべし、)

(ト) なむ　と云ふ言は「しかゝの事はかくありたしとおもふ」と云ふ意なり、(是を「願のなむ」また、「誂のなむ」とも云ふ、)此のなむを一階のなむと云ふ、(二階のなむにわくる名なり、此のなむは、動詞一階を受くるを標準とすべし、)
あまり暑きに風もふかなむ
人のこゝろはははやくとけなむ

此の言に活動なし、

(チ) ば　と云ふ言は「しかあらば」と云ふ意なり、
風ふかば花はちらむ
花を見てあかばかへらむ

此の言に活動なし、さて、是までの八種を「一階を受くる助詞」と云ふ、

第二　動詞二階助詞

て　　たり
つ　　つゝ
けり　　けむ

なむ　に
ぬ　き
そ

これらを二階を受くる助詞と云ふ、

(イ) て　と云ふ言は釋せずとも意あきらけし、但、ものを云ひつゞくるための言なり、
ものを見てたのしむ
人づてを聞きてよろこぶ

此の言に活動なし、

(ロ) たり　と云ふ言はてありのつゞまりてたりとなれるなり、
里離れて住みたり
池の水あせたり

此の言に活動あり、たら、たり、たる、たれ、とはたらくなり、

(ハ) つ　と云ふ言は「しかゝのこと終りたり」と云ふ意にて、何事にても一度云ひとぢむる言なり、
よき人にあひつ
骨をりて事をしはてつ

此の言に活動あり、つ、つる、つれ、とはたらくなり、

(ニ) つゝ　と云ふ言は、何事にても、一きりゝゝに云ふことをつゞめて云ふなり、原はつと云ふ助詞にて、それが重なりてつゝとなりて一種の助詞となれるものなり、然れば「見つゝゆく」といふは、見つ見つゆく意なり、
我がこころもでに雪はふりつゝ(きるゝつゝなり)
月を見つゝよるゆく　(つゞくつゝなり)

此の言に活動はなけれど用ゐやうによりてきれもしつゞきもするなり、(つゝにきるるとつゞくとあり、例を見て味ひ知るべし、)

(ホ) けり　と云ふ言は、何事にても、「しかゝなりて來たり」と云ふ意なり、
花はさきけり
手習をしけり

此の言に活動あり、けり、ける、けれとはたらくなり、

(ヘ) けむ　と云ふ言は何事にても「しかゝなり來たりしことにてあらむ」と云ふ意なり、
吉野の山の花は咲きけむ　　きるゝけむなり
さきけむ花の面かげもなし　　つゞくけむなり

此の言に活動あり、けむ、けめとはたらくなり、(けむ

にきるゝと、つゞくとあり、例を見て味ひ知るべし、）

（ト）なむ　と云ふ言は、「しか〳〵して往なむ」また「云々ありて往なむ」と云ふ意なり、然れば、「花は咲きなむ」と云ふは、「花は咲きて往なむ」の意なり、

あの山に我はのぼりなむ　（きるゝなむなり）

發ちなむ人をいかでとゞめむ（つゞくなむなり）

此の言に活動あり、なむ、なめとはたらくなり、こゝに心得べきことあり、一階のなむには、活動なし、此のなむには活動あり、これを「二階のなむ」と云ふ、

（チ）に　と云ふ言は「しか〳〵也、往にたり」など云ふ意にて、には往なり、また、此の言はかならずけり、にき、にし、などゝ連なりて用をなすなり、

花はちりにけり

花はさきにけり

此の言につぎて心得べき事あり、上文に擧げたるなむも、こゝのにも、下文のぬも、往なむ、往に、往ぬ、の省かりたるものなれば、原はひとつ言なりと知るべし、また、係詞のには、けり、きなどへはつゞかず、然るを、こゝのにはけり、きなどへかならずつゞきて、用をなすなり、これを標準に見わくべし、さてまた此のには、けり、きなどへかならず連なりて、用をなす言なるゆゑ、三詞略圖にはにけり、にきとして出せり、

（リ）ぬ　と云ふ言は、「しか〳〵なり往ぬ」と云ふ意にてぬは往なり、（委しくは、上文のにの條下に云へり、）

物がたりもせずなりぬ

正月元日になりぬ

花はちりぬ

此の言に活動あり、ぬ、ぬる、ぬれとはたらくなり、

（ヌ）き　と云ふ言は何事にても、「しか〳〵して過ぎさりたり」と云ふ意なり、

さきの年彼の人に逢ひき

別れしときはいと悲しかりき

此の言に活動あり、き、し、しかとはたらくなり、

（ル）そ　と云ふ言は、「しかすることなかれ」と制する意なり、（實は、そと云ふ言に制する意あるにはあらざれども、かくこゝろ得て遣ふことなし、）

ものなおもひそ

それをばなすてそ

此の言に活動なし、さてまた心うべき事あり、その上にはかならず「な」と云ふ言を置きて云ふが規則なり、こゝに擧げたる例を見て知るべし、是までの十一種を二階を受くる助詞と云ふ、

第三　動詞三階助詞

らむ　　らし

べし　　めり

まじ　　かし

や　　な

な　　よ

なり　　と

とは　　とも

これらを三階の助詞と云ふ、

（イ）らむ　と云ふ言は「しか〳〵にてあらむ」と云ふ意なり、

駒を並べていづこ行くらむ　（きるゝらむなり）

ちるらむ花はせむかたもなし（つゞくらむなり）

此の言に活動あり、らむ、らめとはたらくなり、

（ロ）らし　と云ふ言は、「しかあらむとおしはかる」と云ふ意なり、

みやまにはあらし吹くらし

昔の人もかくやあるらし

此の言に活動はなけれど、用ゐやうにて意かはるなり、（用ゐやうにて意のかはるとは、上にあゞ係詞に應ずるにしたがひて意のかはるを云ふ、こゝに擧げたる例にて云はば、はと係りてふくらしと結べるは吹くさうなと云ふ意なり、やと係りて吹くらしゝ結べるは吹くであらうと云ふ意なり、）

（ハ）べし　と云ふ言は「しか〳〵あらむことをおしきはめらる」と云ふ意なり、べしとらしと同じやうにていさゝかの違あり、見合せて知るべし、

明日は約束の所にゆくべし

彼の人は今日かならず來べし、

此の言に活動あり、べく、べし、べき、べけれと活動くなり、また、此のべしを「しかせよ」と命令する言にも用ゐるなり、

その例をも示すべし、

早くもゆくべし

速にきたるべし

此の例を見て知るべし、(但、此の命令のべしは、べしとのみ云ひて、べく、べき、べけれなどと活動ず、委しくは、命令法の條下に云ふべし、

(ニ) めり と云ふ言は、「彼のものは我が眼にはしかじかと見ゆるなり」とおしはかる意なり、

口さがなさにさまざまと云ふめり

龍田川もみぢ亂れてながるめり

此の言に活動あり、めり、めるめれとはたらくなり、

(ホ) まじ と云ふ言は「しかすまじ」と云ふ意なり、

そのことは我はきくまじ

此のことは人に云ふまじ

此の言に活動あり、まじく、まじ、まじき、まじけれ、と活動くなり、

(ヘ) かし と云ふ言は、凡べてきるゝ詞の末に添へて勢を見する言なり、(俗に往さささすさ、還ますさと云ふさの意なり、)

我は京にかへるかし

もとのまゝにてあれかし

我が友たちよ訪ひ來かし

此の言に活動なし、

(ト) や と云ふ言は、凡べてきるゝ詞の末に添へて歎ずる言なり、但、此のやは疑ひて歎ずるやなれば疑歎のやと云ふ、

君は此の事を知るや知ずや

我が思ふ人はありやなしや

此のやの意をなほよく示さむに、「富士の山見ゆ」と云へば、富士の山の見ゆるを云ふ、それにやを添へて「見ゆや」と云へば、「見ゆるか」「見えぬか」と問ふ意となるなり、(やを添へて疑ふ意となる故に、疑の意やにありと知るべし、此の言に活動なし、また心うべき事あり、形容詞(くしさ、しくししき)三階を受くる助詞に歎ずるやあり、(是は疑歎にあらず、)これをよに通ふやとも云ふ、例を示すべし、

われはいと寒しや

世にもめづらしや

汝は寒しやと云へば疑歎のやとなるなり、されば形容詞(くしき、しくしゝき)三階には疑歎のやと歎ずるやと二つあり三詞略圖を見合すべし、

但此のやは動詞をば受けざるなり、

これらを見て知るべし、

(チ) な と云ふ言は、凡べてきるゝ詞の末に添へて歎ずる言なり、然るゆゑに歎ずるなと云ふ、

あの人はいづこへゆくな

忘るゝまなく人の戀ひしな

此の言に活動なし、

(リ) な と云ふ言は凡べてきるゝ詞の末に添へて歎ずる言にて、「しかく〳〵することなかれ」と云ふ意なり、これを制するなと云ふ、(三階には歎ずるなと制するなと二つあり、混ずることなかれ、)

この書をば猥に見るな

こゝろなくもの云ふな

此の言に活動なし、

(ヌ) なり と云ふ言はなと歎ずる言にりるれの言添はりてなり、なる、なれと活動くなり、意はこれにて悟るべし、

風ふきて木の葉おつなり

おもふ事は夢に見ゆなり

これを三階のなりと云ふ、こゝに心うべきことあり、こゝのなりと四階のなりと二種あり、四階のなりは、にありのつゞまりたるにて なら、なり、なる、なれ、と活動くがうへに意もまた重し、こゝのなりは、なり、なる、なれと活動て、ならといふ活動なし、意も亦四階のなりより輕けれど歎ずるかたは深し、

(ル) よ と云ふ言は、凡べてきるゝ詞の末に添へて歎ずる言なり、

我は今ふみを見るよ

君はいづこにゆくよ

此の言に活動なし、

(ヲ) と と云ふ言は、名詞動詞を兼ね受くる助詞なり、此の言は係詞なくておのづからきれたる詞(これを第一直說法と云ふ)を受けて、ひきおこし、また上なる係詞を結びてとまりたる詞、これを第二直說法と云ふ、)を受けてひきおこし、また云ひつめてきれたる名詞助詞をも受けて、ひきおこして次へつゞくる言なり、(然れば、四階の詞にても、きれたるをひきおこさむとするときは用ゐるなり、)

かへるときけば心ばそし

まつときかば早くかへり來む

此の言に活動なし、

(ワ) とは　と云ふ言は、上文に舉げたるとには（係詞のはなり、）を添へたるものなれど、とはと云ひつゞくれば、一種の助詞となるなり、

我をすてゝゆくとは
天地とはあめつちを云ふ

此の言に活動なし、

(カ) とも　と云ふ言も、上文に舉げたるともに（係詞のもなり、）を添へたるものなれど、ともと云ひつゞくれば、一種の助詞となるなり、（動詞を受くるともと、名詞を受くるともとに心得あり、大文典に辨ず、）

我をすてゝゆくとも
あめつちとも天地とも云ふ

此の言に活動なし、（四階の助詞は、悉く名詞動詞を兼ね受くる例なること、勿論なれど、三階にてもと、は、とも、は、名詞動詞を兼ね受くること、こゝに例を擧げて示すがごとし、）是までの十四種を三階を受くる動詞と云ふ、

第四　動詞四階助詞

是は名詞動詞を兼ね受くる助詞なり、されば、別に出すべきなれども、一階二階三階四階の順序によりてこゝに擧ぐ、

かな　より
から　まで
のみ　ばかり
だに　すら
さへ　なり
ごとし

これら名詞動詞を兼ね受くる助詞なり、

(イ) かな　と云ふ言は歎ずる意なり、

よき事をきくかな
盛なる山の櫻かな

此の言に活動なし、さて、なほ心得しめむに、動詞の聞をも受け、名詞の櫻をも受けて、かなと歎ずるゆゑに名詞をも兼ね受くる助詞と云ふなり、此の餘も名詞動詞を兼ね受くると云へるは、みな此のさだめなり、

(ロ) より　と云ふ言は、その物その事よりいづれへもおよぶ意なり、（比較副詞のよりもこゝにつくことあり、「いふよりいはぬかまされり」といへば、比較副詞なり、）

きくより涙こぼる
山より猿いて來

此の言に活動なし、

(ハ) から　と云ふ言は、その事その所よりおよび來る意なり、（動詞を受くるからと、名詞を受くるからとにこゝろ得あり大文典に辨ず、）

風ふくからに草木しをるゝ
遠き國からかへる

此の言に活動なし、（名詞を受くるからはからにとは云ず、是も亦こゝろ得おくべし、）

(ニ) まで　と云ふ言は、その事、その所にいたりおよぶ意なり、

云ふまでもなし
長崎までいたる

此の言に活動なし、

(ホ) のみ　と云ふ言は此のほかはなしと云ふ意なり、

きくのみにしていまだ逢はず
行さきは山のみなり

此の言に活動なし、

(ヘ) ばかり　と云ふ言は、ものゝ體をはかりて云ふ言なり、それが中に、大體をもはかり、また是ほどゝ云ひ限る事もあるなり、

ながるゝばかり汗いづ　（大體を云ふなり）
はるゝばかりにて　（云ひかぎるなり）

此の言に活動なし、

(ト) だに　と云ふ言は、そのもの一つを云ひあきらめて、のこりを顯はす言なり、また、そのものを知りて、その餘を悟る意にも云ふなり、

見るだにきたなし
春と云へど雪だに消ず

此の言に活動なし、

(チ) すら　と云ふ言は、だにと大かたかはらず、だにはその物その事を直に云ひあきらむるなり、すらは種々に思ひせめてのうへ云ひあきらめてそのあまりを顯はす言なり、（だには廣く云ひ顯はすゆゑ、言のいきほひ寛くきこゆ、すらは狹く云ひ顯はすゆゑに言のいきほひつよく聞ゆ、）

きくすらあはれなる物語なり
それすら百年の昔となりぬ

此の言に活動なし、

(リ) さへ　と云ふ言は、物一つを云ひあきらめて、二つも三つもそれにとり添ふる意なり、

行くさへ遠きみちのおく

世さへくらき山のかげ

此の言に活動なし、

(ヌ) なり　と云ふ言は、「しか〳〵にあり」と云ふにありのつゞまりてなりとなれるなり、

山見ゆるなり

よき人なり

此の言に活動あり、なら、なり、なる、なれと活動くなり、これを四階のなりと云ふ、三階のなりと混ずべからず、

(ル) ごとし　と云ふ言は物や事に比べ見てそのやうなり此のやうなりと云ふ意なり、

君が云ふごとし

君がことばのごとし

此の言に活動あり、ごとく、ごとし、ごとき、とはたらくなり、さて亦心うべき事あり、此の言は名詞をも受くと云へど、がの〻助詞を中にはさめり、例を見て知るべし、動詞を受くるものを中にはさみて受くるが多し、是までの十一種を、四階を受くる助詞と云ふ、

第五　動詞五階助詞

ば　ども　や　どし　かし　な

これら五階の助詞なり、

(イ) ば　と云ふ言は「しか〳〵ゆゑに」と云ふ意なり、

風ふけばはだ寒し

花を見れば心うかれぬ

此の言に活動なし、

(ロ) ど　と云ふ言は、「しか〳〵なれど」と云ふ意なり、

ゆけど行きつかず

もの云へどかひなし

此の言に活動なし、

(ハ) ども　と云ふ言は、「しか〳〵なれども」と云ふ意なり、

見れども見えず

きけどもきこえず

此の言に活動なし、

(ニ) かし　と云ふ言はいきほひを見せる言なり、(三階のかしに同じ意なれど、命令する詞の末に添はゆゑに、おのづから命令の意を含めり、下文のやなもまたおなじ、)

いと暑きに風もふけかし

いと寒きに火をおこせかし

此の言に活動なし、

(ホ) や　と云ふ言は、形容詞三階を受くるやに同じ、これをよに通ふやとも云ふ、(動詞三階を受くる助詞の條下に辨ぜり、見合すべし、)

はやくゆけや

魚をつれや

此の言に活動なし、

(ヘ) な　と云ふ言は動詞三階を受くるな(欺するななり)に同じ、

いと貴くこそあれな

はやくかへれな

此の言に活動なし、さてまた示すことあり、こゝのかし、や、な、と三階のかし、や、な、と意かはることなし、唯、二ところにて受くるなりと心うべし、是までの六種を、五階を受くる助詞と云ふ、

第六　動詞一階及五階助詞

(イ) よ　此の助詞を一階と五階とを受くる助詞と云ふ、

よと云ふ言は何事をもこひ願ひ、または下知する意なり、上文に擧げたる三階のよとは意も大に異なれば混ずべからず、(三階のよは欺するよなり、)

いそぎてゆけよ　(五階動詞を受けたり)

是をよく見よ　(一階動詞を受けたり)

此の言に活動なし、是までのところ助詞の大略なり、此の種類の名を、一覽に知らしめむがため、圖をあらはして示す、

助詞表

第一名詞受助詞　ながら　がてら　たり　など

第二動詞受助詞　せり　へ

第三動詞受助詞　ず　ざり　じ

一階	で	む	まし	
二階	なむ	ば		
	て	たり	つ	
	つゝ	けり	けむ	
	なむ	に	ぬ	
	き	そ		
三階	らむ	らし	べし	
	めり	まじ	かし	
	や	な	な	
	なり	よ	と	
	とは	とも	ども	
五階	ば	ど	な	
	かし	や		
一階五階	よ			
四階	かな	から		
	まで	のみ	ばかり	
	だに	すら	さへ	

第三　名詞動詞兼文助詞

一階	なり　ごとし

此の圖の中なと二つあるは歎ずるなと、制するなとなり、その餘まどはしき事あらば、上文に云へるところと引合せ、また三詞略圖をも照し合せて悟るべし、

動詞の助詞表

一階	二階	三階	四階	五階
ず	て	らむ	かな	ば
ざり	たり	らし	より	ど
じ	づ	べし	から	ども
で	つゝ	めり	まで	かし
む	けり	まじ	のみ	や
まし	けむ	かし	ばかり	な
なむ	なむ	や	だに	
ば	にけり	な歎	すら	
	ぬ	な制	さへ	
	き	なり	なり	
	そ	よ	ごとし	
		と		

よ命令		とは とも	よ命令

かくのごとく分配したるは、動詞を受くる助詞にて、それが中に三階のとと、四階の助詞とは名詞動詞を兼ね受くるものなること、上文にもことわりおけるがごとし、また名詞をのみ受くる助詞は、此の分配に入らず、

第十五章　係詞

此の詞を係詞と云ふゆゑは、何事も此の詞に係り來るゆゑなり、ものを定めて云はむとすれば、定むる係詞を用ゐ、疑ひて云はひとすれば疑ふ係詞を用ゐてそれを下にて結びとむるを結詞と云ふ、(動詞にても助詞にても係詞を結ぶときは結詞と云ふなり、)さて此の係詞は、「右の條」「中の條」「左の條」と三條あり、されば、それを結ぶ結詞も亦三つにわかれて定まりあり、(結詞の定例は三詞略圖を見るべし、こゝには係詞の大意を示す、

第一節　右條係詞

「は」「も」「が」「の」「に」「を」

(一)　は　と云ふ言は、物を二つにさしわけて、その一つをとり出す意なり、

人「は」訪ひ來ず。

よきあきなひ「は」なし。

花「は」ちりぬ。

夏「は」來にけり。

圖を圖の中にある言は結詞なり以下みなこの定なり

これらの類なり、是をさとさば「人はとひ來ず」と云へば、風などは音信すれど人は訪來ずと採り出す意なり、「よきあきなひはなし」と云へば、德なきあきなひはあれどもよきあきなひはなしゝ採り出すなり、「花は散りぬ」と云へば愛する心は他かぬに花はちりぬと採り出すなり、「夏は來にけり」と云へば春は過ぎて夏は來にけりと採り出すなり、

(二)　も　と云ふ言は、かしこの物をこゝに並べあはする意、また採り添ふる意なり、

人「も」訪ひ來ず。

よきあきなひ「も」なし。

花「も」ちりぬ。

今宵「も」寒し。

これらの類なり、これをさとさば「人もとひ來ず」と

云へば、風の音信もなく人も來ずと云ひて風の音などをこゝに並べ合するなり、「よきあきなひもなし」と云へば德なきあきなひもなく、よきあきなひもなしと云ひてわろきあきなひなどをこゝに採り添ふるなり、「花もちりぬ」と云へば、見し人もかへり、花もちりぬと云ひて、見し人などをもこゝに採り添ふるなり、「今宵もさむし」と云へば、昨日の夜も寒かりしに今宵もさむしと云ひて、昨日の夜のさむかりしをもこゝに並べ合するなり、

○「は」「も」の意をなほよく示さむに、「是は人にくる物なり」と云へばその餘にくれぬ物あることの知らるゝなり、「是も人にくるゝ物なり」と云へば前にもくれたりし物あることの知らるゝなり能く味ふべし、

(三) が　と云ふ言は、意あきらけし、但、結詞によりて重くも輕くもなるなり、輕きを右の條のがと心うべし、

鶴「が」なくなり
我「が」なげくかな
朋友だちも今はなき「が」多し

(四) の　と云ふ言は意あきらけし、また輕重あることも上文の「が」に同じ、

雨「の」ふるなり
人「の」さわぐかな
朋友だちも今はなき人「の」多し

○「が」「の」の係詞を右の條の結詞にて結べば、輕き「が」「の」となり、中の條の結詞にて結べば重き「が」「の」となるさだまりなり、三詞略圖を見合せて知るべし、

(五) に　と云ふ言は、その物のその事にさしあつる意なり、(「に」と「を」とは賓格にして主格にあらねば、「は」「も」「が」「の」よりも輕し、三格の條下見るべし、)

君「に」ものまうす
富士の「山」にのぼる
東京「に」すむ
田舍「に」かへる

これらの類にて「君に」とさし「富士の山に」とさし、「東京に」とさし「田舍に」とさす意なり、

(六) を　と云ふ言は、その物その事をさす言なり、

「に」「を」は、いづれも物をさし、事をさす言なれど、「に」は然あるものをさし「を」は然するものをさすなり、されば自動詞は「に」より起り、他動詞は「を」より起るも此の理なりと知るべし、

海「を」わたる
山「を」こゆる
人「を」こひしくおもふ
花「を」あかずみる

是らの類にて海山人花を然する物としてさすなり、

第二節　中條係詞

「が」「の」「ぞ」「や」「か」

(一) が　と云ふ言は意あきらけし、但、結詞によりて重くも輕くもなること、上文に云へるがごとし、この「が」は重き「が」なり、

花見にだにも君「が」來まさぬ
曉露に我「が」たちぬれし
寒き霜夜を我「が」ひとりぬる
思のほかに君「が」來ませる

これらの類にて結詞重きゆゑに、それに應ずる係詞も重くなれるなり、下文に擧ぐる「の」も同じ例なれば、こゝに示す、

(二) の　と云ふ言は、意あきらけし、

花見にだにも君「の」來まさぬ
思のほかに人「の」とひける
云ひあはする人「の」なき
うつろふこと「の」うき

これらの類なり、

○「が」「の」のこと委しくは、上文(右の條の「が」「の」の條下に云へり、見合すべし)に云へり、

(三) ぞ　と云ふ言は、物や事を一すぢに定め、或は疑はしきをさりて、是は相違なしと定むる言なり、たとへば石と玉とまじりたるを一つゆびさして是ぞ玉なると云ふ意なり、

我は論語を「ぞ」よむ
人「ぞ」かくのごとくいふ
花「ぞ」さく
我「ぞ」八幡太郎なる

これらの類なり、これをさとさば、「我は論語をぞよむ」と云へば、論語を一すぢによむと云ふなり、「人ぞかくのごとくいふ」と云へば、世の人の一すぢにかく

云ふといふ意なり、「花ぞさく」と云へば花の一すぢにさくと云ふ意なり、「我ぞ八幡太郎なる」と云へば、我相違なく八幡太郎なると云ふ意なり、

(四) や　と云ふ言は何事にても疑ふ言なり、

論語を「や」見む

人「や」かくのごとくいはむ

花「や」咲くらむ

彼「や」八幡太郎ならむ

これらの類なり、これをさとさば「論語をや見む」と云へば論語を一すぢに見むと云ふほどにはあらで大よそに云ふなり、「人やかくのごとく云む」と云へば、相違なくと云ふほどにはあらで大よそは云はむと云ふなり、「花や咲くらむ」と云へば、相違なく花のさくと云ふほどにはあらで大よそに咲くらむと云ふなり、「彼や八幡太郎ならむ」と云へば、相違なく八幡太郎ぞよと云ふほどにはあらで、彼は八幡太郎ならむと云ふなり、

○「や」の意をかく喩すにつきて、「や」に別種あることをも示すべし、此の係詞の「や」の外に問投詞のやあり、さてその間投詞の中にも亦種類あり、

おほ原や小鹽の山

なには津にさくや木の花

杜鵑なくや五月の菖蒲ぐさ

これらの類は、補闕問投詞のやなり、

あなおもしろや

今年はいと寒しや

はやくゆけや

これらの類は、詞のきれたる末に添ふる助詞にて、助詞ながら問投詞となるやなり、(さむしやのやは三階を受くる助詞の條下に辨せり、ゆけやのやは五階を受くる助詞の條下に辨ぜり、)此のやはよに通ふやとも云ひて、呼び出す意あるなり、

君は上野にゆくや

我がおもふ人はありやなしや

これらも助詞ながら問投詞となるやなり、(ゆくや、ありやなしやなどのやは、三階を受くる助詞の條下に辨ぜり、疑歎のや即是なり、)かやうに、種類ありと云へども、皆問投詞のやなり、

(五) か　と云ふ言は、せめて疑ふ言なり、上文の「や」もうたがふ意なれど、疑ふ意寛く廣し、「か」は疑ふ意

小く狹し、またこゝろ得べきことあり、此の「か」はおほくは疑問代名詞の下にあるなり、(係詞の「や」は疑問代名詞の下にあることなし、疑問代名詞はたれ、いくなどの類なり、

たれ「か」我をまつ

今「か」花のさくらむ

さやうにちぎりて「か」おきし

五月雨はいく日に「か」なる

是らのるゐなり、これをさとさば「たれか我をまつ」と云へば誰人か我を待つとかんがへつめて疑ふなり、「今か花の咲らむ」と云へば、今頃は花咲むとかんがへつめて疑ふなり、「さやうにちぎりてかおきし」と云へば、然やうに約束しておきしとかんがへつめて疑ふなり、「五月雨はいく日にかなる」と云へば、五月雨は幾日ぞとかんがへつめて疑ふなり、されば「かと云ふ係詞は、かんがへつめて疑ふ言なりと知るべし、

第三節　係詞結法

是は結詞を言外に聞かしむる用ゐやうのあるなり、その例を示す、

君はいづこへゆくぞ

遠く見ゆるは何の山ぞ

かやうに云ひつゞめてきるゝぞはかならず疑問代名詞のいづこ、なになどの詞上にある定例なり、是をつづめずして云はば、「君はいづこに行くにぞあらむ」と云ふを省きて「君はいづこに行くぞ」と云ひ、「遠く見ゆるは何と云ふ山にぞあらむ」と云ふを省きて遠く見ゆるは何の山ぞと云ふなり、

消えあへぬ雪の花と見ゆる「か」

白く見ゆるは雲「か」花「か」

此のかもぞと同じ例にて花と見ゆるにかあらむ雲にかあらむ花にかあらむと云ふを省けるなり、但やと少し異なるところありて、いつご、いかになどの詞かならず上にありとは限らず、あることなきこと限らぬなり、や、こそ、にも此の例あれども、亦少し異なり、それはいかにと云ふに、動詞より直につゞきて「見ゆるや」「きこゆるや」「見ゆるこそ」「きこゆるこそ」と云ひつゞむる例はなし、

見ゆるに「や」

聞ゆるに「や」

殊更に「こそ」
うれしく「こそ」
かやうに云ひつゞめてきるゝが定例なり、されば、やこそにて云ひつゞむるは動詞よりは直につゞかぬを標準とせよ、（こそは左の條の係詞の條下に云ふべきなれども云ひつゞむる例を並べて知らしめむがため、こゝに擧げたるなり、）

第四節　左條係詞

「こそ」「は」「も」「に」「を」

（一）こそ　と云ふ言は、物多き中にて一つ採り出す言なり、たとへば、石と玉とまじれるそれが中より玉を拾ひとりて、是こそ玉にてありけれと云ふ意、その餘の石をばさしおく言なり、（「ぞ」と「こそ」とに同じやうにて意いさゝか異なり、見合せて了知るべし、）

論語を「こそ」讀め
人「こそ」かくは云へ
花「こそ」さきけれ
我「こそ」八幡太郎なれ

これらの類なり、これをさとさば「論語をこそ讀め」と云へば、我は論語をこそ讀め餘の書はともあれと云ふ意なり、「人こそかくは云へ」と云へば、此の事は人こそかくは云へ、餘の事はともあれと云ふ意なり、「花こそさきけれ」と云へば、此の花こそ咲きけれ、餘の樹はともあれと云ふ意なり、「我こそ八幡太郎なれ」と云へば、我こそ義家なれ、餘のものはともあれと云ふ意なり、さてまた「我こそ八幡太郎」（是は云ひつゞむるなり）とも云ふなり、是はなれと云ふ助詞を省けるにて、我こそ八幡太郎なれと云ふに同じ、（云ひつゞむる係詞のことは上文に委しく云へり、見合すべし、）

「は」「も」「に」「を」は右の條の「は」「も」「に」「を」に同じ、然れども、此の條は、命令の係詞となるなり、（右の條は輕し、左の條は重し、）

汝「は」ゆけ
汝「も」たて
こゝ「に」きたれ
犬「を」おへ

これらの類にて、ゆけ、たて、きたれ、おへ、などはみな命令する詞なり、こゝに命令法の規則を云ふべきにはあらねど、此の係詞はかならず命令する詞にて

結ぶゆゑに、いさゝかこゝに辨ずるなり、（委しくは、命令法の條下を見よ、）然るゆゑに、此の「は」「も」「に」「を」は、左の條おしなべては係らず、命令詞へのみ係るなり、三詞畧圖を見合すべし、是までのところ係詞の大意なり、此の種類の名を一覽に知らしめむがため、圖を顯はして示す、（主賓としるしたることは、次に辨ず、）

係詞

（一）右「は」主　「も」主　「が」主　「の」主　「に」賓　「を」賓
（二）中「が」主　「の」主　「ぞ」主　「や」主　「か」主
（三）左「こそ」主　「は」主　「も」主　「に」賓　「を」賓

第十六章　文章格

三格とは格に三つの種類あるを云ふ三つの種類は、「主」「賓」「中」の三種なり、

第一節　主格

此の格は主としてつかさどるものを云ひあらはす係詞にて、上の圖に主としるして擧げたる言どもみな是なり、

義家「は」責任を攻む
義家「も」責任を攻む
義家「が」責任を攻むること急なり
義家「の」責任を攻むること急なり

これら右の條の主格なり、

義家「が」責任を攻むること急なりける
義家「の」責任を攻むること急なりける
義家「ぞ」責任を攻めける
義家「や」責任を攻むらむ
義家「か」責任を攻むらむ

これら中の條の主格なり、

義家「こそ」責任を攻めけれ
義家「は」責任を攻めよ
義家「も」責任を攻めよ

これら左の條の主格なり、主格は主たるものを云ひあらはす係詞なるゆゑ、かく云へば、義家と云ふこと主なること例を見て知るべし、

第二節　複主格

一文章のうち主格一つなるあり或は二つ三つありて一文章をなすことあり、

責任「が」にぐるを追ひて賴義「も」義家「も」厨川

の柵「にぞ」よせたりける

かくのごとく一文章の中に主格の係詞多くあるは、いづれも主たるものを顯はすにて、貞任頼義義家みな主なり、また「にぞ」とある「ぞ」は「に」よりつゞける「ぞ」なるゆゑ賓格なり、凡べて「にぞ」「にや」「にか」「をぞ」「をや」「をか」と云へば、「ぞ」「や」「か」も賓格となるさだまりなり、（柵は頼義義家に對へる賓なり、）

山里「は」冬ぞさびしさまさりける人め「も」草

「も」かれぬとおもへば

「山里」は所の主なり、「冬」は時節の主なり、「人め」と「草」とはさびしさの主なり、準へて知るべし、

第三節　賓格

此の格は主とあるものに對ふものを云ひあらはす係詞なり、上の圖に賓としるして擧げたる言どもみな是なり、

義家「に」貞任「を」攻めさす

貞任「を」義家「に」討たす

これら右の條の賓格なり、

義家「に」祿をたまへ

義家「を」伊豫守とせよ

これら左の條の賓格なり、これをさとさば、主たるものありて、それが令してせめうたせ、或は祿を給へと云ひ、或は伊豫守とせよと云ふにて、みな主に對ふことなり、

桃太郎は鬼が島へ寶物とり「に」ゆく

是は桃太郎が主にて（「は」とあるを標準とすべし）鬼が島も賓とりもみな賓なり、（鬼が島の方にと云ふ意なれば、鬼が島も賓なりと知るべし、）

第四節　中格

此の格は主と賓との間なれば中格と云ふ、

が　の

此の言は中にありて上下を持ちあふ言なり、是は係詞にあらず、接續詞なり、されど三格の一つなれば、こゝに辨ず、）

義家を伊豫の守とす

義家厨川の柵をやぶる

營が岡に來會す

此の餘「松が枝」「吉野の山」「甲斐が嶺」などのが、みな是なり、

第十七章　形容詞

此の詞を「形容言」とも云ふ、形容詞と云ふゆゑは、凡べて、物や事のありさまを云ふ詞なればなり、此の詞に「良行四段一格形容詞」「くしき形容詞」「しくしき形容詞」「助詞擬體形容詞」の五種あり、また「副詞轉成形容詞」「動詞轉成形容詞」「助詞轉成形容詞」の三種ありて統べては八種あり、

第一節　良行四段一格形容詞

ある　さける　動詞五階よりうつる良行四段一格

深かる　形容詞二階よりうつる良行四段一格

是は動詞にして、形容詞なるものなり、此の詞に、三世あり、法あり、委しくは助詞の條下に云へり、三詞略圖をもこゝにてらし合せて見るべし、

第二節　くしき形容詞

「く、し、き」と云ふは、くしきと活動く詞なればなり、ふかきと云ふ詞にて、云はゞ、深く、深し、深きと活動くゆゑに、そのくしきをとりて名に云ふなり、「しくししき」も是に同じ、

ふかき　かたき

くろき　しろき

うまき　よき

わろき

是らの類なり、これを示さば、ふかきは、山にて云はばその奥のはかりなきさまを云ふ、たかきは、その山をはかるに、見あぐるさまを云ふ、くろき、しろきは色のさまを云ふ、うまきは味のよきさまを云ふ、また、物や事の意に善しとおもふさまをも云ふ、よきは、物や事のこゝろにかなへるさまを云ふ、わろきは、こゝろにかなはぬさまを云ふ、

第三節　しくししき形容詞

こひしき　かなしき

うれしき　くるしき

これらの類なり、これを示さば、こひしきは、他かずおもふさまを云ふ、かなしきはこゝろに感ずるさまを云ふ、うれしきはこゝろによろこぶさまを云ふ、くるしきは、痛にこらへかぬるさまを云ふ、此の餘も、みな此の意なり、準へて知るべし、（くしき形容詞、しくししき形容詞に、おの〳〵一格あり、されど、方今は用ゐぬ詞なれば省けり、それを知らむとおもはば、大文典を見るべし、）

○くしき形容詞、しくししき形容詞に活動あり、その圖をこゝに顯はして示すべきなれど、良行四段一格形容詞、助詞形容詞の圖をも合せて後に示す、

第四節　形容詞の法

此の形容詞（くしき、しくししき、）に法あり、然れども、動詞の法に異ならず、三詞畧圖に詳にす、

第五節　助詞形容詞

是は四階の助詞なれど、（動詞四階を受くる助詞なり）形容詞の一種なり、

ごとし

此のことばの意は、助詞の條下に云へり、こゝには唯例を示す、

墨のごとく黑し

うつくしきこと花のごとし

山のごときの鯨浮べり

此のことばの活動は、助詞の條下にも辨せり、

形容詞活動圖

（良行四段一格形容詞は動詞の條下にも擧げたれども、動詞にして形容詞なるものなれば、またこゝに擧ぐ、）

良行四段一格形容詞	動詞五階より良行四段一格形容詞	形容詞二階よりうつる良行四段一格形容詞	く　し　き形容詞	しくししき形容詞	助詞形容詞
有	咲有	深有	深	戀	如
ら	ら	ら	く	しく	
り	り	り	く	しく	ごとく
る	る	る	し　さ　し	しさ	ごとし
る	る	る	き	しき	ごとき
れ	れ	れ	けれ	しけれ	

未	過現	現	現在	過去に見る現在
來	去在	在	輕	重

（現行四段一格動詞を見て知るべし、）

こゝに示せるは形容詞の活動の規則なり、（階ごとに受くる助詞のさだまりあり、三詞畧圖を見て知るべし、）

第六節　擬體形容詞

此の詞は、物の動く體或は音をまなぶ詞なり、

くる〳〵　　こほ〳〵

さ　　は

これらの類なり、これを示さば、車のくる〳〵とめぐる、かち臼の音のこぼ〳〵と鳴る、木の葉のさと散る、（亦さつとちる、）人々はと笑ふ、（亦はつとわらふ、）の類なり、

第七節　副詞轉成形容詞

きよらかなり　　たひらかなり

渺々たり　　欣然たり

これらの類なり、これを示さば、きよらかにといへば、副詞なれども、きよらかなりと云ひきれば、形容詞なり、（きよらかなると云ふとも形容詞なり、）たひらかにと云へば副詞なれども、たひらかなりと云ひきれば、形容詞なり、（たひらかなると云ふとも形容詞なり、）渺々とと云へば副詞なれども、渺々たりと云へば形容詞なり、（渺々たると云ふとも形容詞なり、）欣然とと云へば、副詞なれども、欣然たりと云へば形容詞なり、（欣然たると云ふとも形容詞なり、）推して知るべし、

第八節　動詞轉成形容詞

此の詞を連體言とも云ふ、これは名詞へつとくゆるなり、

四段　　さく花

一段　　きる衣

中二段　　おくる人

下二段　　とくる雪

加行變格　くる人
佐行變格　する業
奈行變格　いぬる人

かくのごとく名詞へつゞく動詞は、みな形容詞なり、

第九節　助詞轉成形容詞

さかぬ花　さかざる花
さかむ花　さきたる花
さきける花　さきけむ花
さきなむ花　さきにける花
さきし花　さくらむ花
さくべき花　さくめる花
さくまじき花　さくなる花

かくのごとく名詞へつゞく助詞は、みな形容詞なり、

第十節　形容詞の級

級とは、詞に級あるを云ふ其級はいくつあるぞと云ふに、「定級」「比較級」「上級」「最上級」の四級あり、圖を顯はして示すべし、定級とはものゝ事のありさまを一すぢに云ふなり、比較とは、物や事にくらべて、まさりおとり、善さ惡さなど云ふなり、上級とは、尋常のありさまをまた一層云ひすなり、最上級とは、上級をまた一層云ひますなり、

形容詞の級表

定級	比較級	上級	最上級
深き	山より深き	なほ深き	いと深き
高き	海より高き	また高き	いと〳〵高き
ある	思しよりある	なほある	はなはだある
咲ける	昨日より咲ける	また咲ける	いよ〳〵咲ける
深かる	昨日より深かる	なほ深かる	いとゞ深かる

かくのごとく、副詞を形容詞の上に添ふれば級となる、よりは、比較副詞なり、なほ、またなどは上級副詞なりいと、いと〳〵、はなはだ、いよ〳〵、いとゞは最上級副詞なり（副詞の條下見あはすべし）然れば、比較副詞を添ふれば比較級となり、上級副詞を添ふれば上級となり、最上級副詞を添ふれば最上級となるなり、準へて知るべし、是までのところ形容詞の大略なり、此の種類の名を一覽に知らしめむがため、圖を顯はして示す、

形容詞一覽表

一　良行四段一格形容詞
二　くしき形容詞
三　しくしき形容詞
四　助詞形容詞
五　擬體形容詞
六　副詞轉成形容詞
七　動詞轉成形容詞
八　助詞轉成形容詞

第十八章　副詞

此の詞は、動詞形容詞に添へて云ふが定例なれば、かく云ふ、此の副詞に、尋常副詞、承上副詞、未來副詞、不定副詞、附說副詞、比較副詞、上級副詞、最上級副詞、の八種あり、また動詞轉成副詞、形容詞轉成副詞、助詞轉成副詞の三種ありて、統べては十一種なり、

第一節　尋常副詞

〔例詞の一〕

おのづから　かならず
たゞ　なか〳〵
はや　ひたすら
またき　みな
みながら　もはら
やう〳〵　やゝ
やがて　よし
とかく　ゆめ〳〵

是が中には、おのづからと云ひて副詞なれど、おのづからにとにを添へても云ふなり、（此のには係詞の「に」にあらず、副詞にそはるにと云ふ、）詞によりて、副詞には、にの添ふあり、添はざるあり、さやうにところ得べし、

〔用例〕

おのづから……きよし
かならず……たがはじ
たゞ……ゆきてかへるのみ
なか〳〵……ちかし
はや……かへりませ
ひたすら……まちわたる
またき……かへる
みな……よろこぶ
みながら……かはる事なし

もはら……うけひかず
やう〳〵……暮ゆく
やゝ……くらし
やがて……あけゆく
よし……わらふとも
とかく……いきどほるまじ
ゆめ〳〵……つゝしめ

これらの類なり、またかならずにを添へて云ふ副詞あり、

〔例詞の二〕

いたづらに　つひに
ともに　とにかくに
ひたぶるに　さらに
うちつけに

これらの類なり、例を示す、

〔用例〕

いたづらに……寢てあかす
つひに……あひ馴れぬ
ともに……かたらひて日暮れぬ
とにかくに……わづらはし
ひたぶるに……うかれて
さらに……とどまらず
うちつけに……訪ふ

これらの類なり、此の外こと、さはなど云ふ詞も、にを添へてことにさはにと云へば、副詞となるなり、（副詞のには係詞の「に」と異なること、上文にも云へり、されど、初學の徒の惑ふこともあらむかと、またこゝにことわりおくなり、）又かにを添へて云ふ副詞あり、

〔例詞の三〕

すみやかに　たひらかに
のどやかに　きよらかに

これらの類なり、例を示す、

〔用例〕

すみやかに……おこなふ
たひらかに……おはします
のどやかに……空はれたり
きよらかに……水ながる

是らの類なり、然るを、また、たひらに、のどに、きよらにと云ふとも副詞なり、是までの三種を、引統べて

「尋常の副詞」と云ふ、

第二節　承上副詞

〔例詞〕

へ　など

これは、名詞を受くる助詞ながら副詞なり、（へ、などの意は助詞の條下に云へり、）例を示す、

〔用例〕

京へ……のぼる
花など……さけり

これらの類なり、

第三節　未來副詞

是は然ならぬ事を云ふ副詞なり、

〔例詞〕

いまだ　いまだに
まだ　もし

これらの類なり、例を示す、

〔用例〕

いまだ……逢はず
いまだに……來らず
まだ……知らず
もし……逢はれぬにや

未來副詞のつゞけざまかくのごとし、

第四節　不定副詞

〔例詞〕

おほかた　おほよそ
おほく

是らを不定副詞と云ふ、そのゆゑは、定まらぬ意なれば不定と云ふなり、例を示す、

〔用例〕

物事おほかた。「に」。とりしたゝむ
此の數おほよそ。百。あるべし
知れる人おほく。「は」。死き

不定副詞のつゞけざまかくのごとし、また心うべきことあり、不定副詞の「おほかたに」「おほよそに」などの「に」は副詞のにはあらで、係詞のになり、凡べて、此の不定副詞は、直に動詞形容詞へつゞくは稀にて、或は、係詞或は名詞を中に置くなり、

第五節　附說副詞

〔例詞〕

しかすがに　さすがに

しかしながら　　さりながら

是らの類は、附説を兼ねたる副詞なれば、かく云ふ、例を示すべし、

〔用例〕

しかすがに……春めきにけり

さすがに……たけきものゝふなり

しかしながら……春めきたり

さりながら……たけきものゝふなれば

これらの類にて、上に云へることを轉じて、また説きあかすに用ゐる副詞なれば、その心得あるべし、

第六節　比較副詞

是は物に比べて、彼よりは是ぞまさる、是よりは、彼が劣るなどにて、比べあはするときの副詞なり、

〔例詞〕

より

此の一言のみなり、例を示す、

〔用例〕

鳥よりもすみやかに行く

春よりものどやかなり

山よりたかく

山よりもたかし

海よりふかく

海よりもふかし

これらの類なり、こゝにまたこゝろ得べき事あり、よりと云ふ詞は、助詞のよりと此のよりと二つあり、されど、比較のよりは、物と物とを比べて彼此勝劣などを比ぶるよりなり、助詞のよりは本をさして末をも顯はすよりなり、混ずべからず、（助詞のよりは、俗言にからと云ふ意なり、「きくより涙こぼる」と云へば「聞くから涙こぼる」といふこゝろなり、「東京よりかへる」と云へば、「東京からかへる」と云ふこゝろなり、此のよりは、「から」の意にあらず味ふべし）

第七節　上級副詞

是は尋常に勝ること劣ること、善きこと惡しきこと、多きこと寡きこと、何事につけても、常に殊なることを云ふときの副詞なり、

〔例詞〕

なほ　　また

これらのるゐなり、例を示す、

〔用例〕

松竹はなほみどりなり

今日はなほ雨ふる

今日はまた雪ふる

水かさまたまされり

これらの類なり、（なほ、または用ゐやうによりて接續詞となるなり、「いつまためぐりあはむ」「あすもまた花を見む」これらのるゐは、接續詞にて、級をもたざるまたなり、上級のまたは、必上によりと云ふ意あり、「今日はまた雪ふる」と云へば、昨日よりと云ふ意、上にあるなり、なほと云ふ詞も、準へて知るべし、）此の副詞を重ぬとも同じく上級に用ゐる副詞なり、

〔重用例〕

なほまたうれしく

なほまたかなし

これらの類なり、準へて知るべし、

第八節　最上級副詞

是は上級よりも、亦一層まされることを云ふときの副詞なり、

〔例詞〕

いと　　いとと

いと〳〵　　もとも

はなはだ　　いよ〳〵

こゝら　　うたて

これらの類なり、例を示す、

〔用例〕

いとうれし

いとともの思ふ

いと〳〵貴し

もともよろし

はなはだ美麗し

いよ〳〵とほし

こゝら啼く

うたてにほふ

是らの類なり、準へて知るべし、

○比較副詞上級副詞最上級副詞は、尋常の副詞に添はりて級を顯はす詞なり、（形容詞に添はるゝとも、級を顯はすさだまりなること、形容詞の條下に云へり、）圖を顯はして示す、

副詞類別表

定級	比較級	上級	最上級
速に	より速に	なほ速に	いと速に
平に	より平に	また平に	いと〳〵平に
のどかに	より のどかに	なほ のどかに	はなはだのどかに
清に	より清に	また清に	いよ〳〵清に
高く	より高く	なほ高く	いと〻高く

級の事は形容詞の級の條下にも云へり、見合せて知るべし、

第九節　動詞轉成副詞

これを連用言とも云ふ、かならず動詞へつゞくゆゑなり、

四段　さき……にほふ
一段　き……ならす
中二段　おき……いづる
下二段　うけ……とる
加行變格　來……わづらふ
佐行變格　爲……はつる
奈行變格　往……わぶる
良行變格　あり……つく

これはいづれも、動詞二階のことばなり、三詞畧圖を見合せて知るべし、

第十節　形容詞轉成副詞

これを形狀言の連用とも云ふ、かならず、動詞形容詞へつゞくゆゑなり、

〔用例〕
くしき　ふかく○——○おもふ
しくししき　こひしく○—○ある

これは、いづれも形容詞二階のことばなり、三詞略圖を見合せて知るべし、

第十一節　助詞轉成副詞

これを連用の助詞とも云ふ、かならず、動詞形容詞へつゞくゆゑなり、

〔用例〕
うかびながら……流る
花見がてら……訪ふ
あかず……思ふ
道しらで……行く
花さきて……散る

月を見つゝ……行く
花ちるべく……見ゆ
いまだ花咲まじく……見ゆ
浪は山のごとく……高し
西京より……歸る
往古から……變ず
横濱まで……行く
賣る事をのみ……爲て買ず
にほひばかり……殘れり
にほひだに……殘ず
にほひさへ……ただならず

これらの類なり、（此の中に、つゝと云ふことばにつきて心得べき事あり、つゝには、きるゝつゝあり、つづくつゝあり、副詞のつゝは、つゞくつゝなり、）さて、是までは、副詞の大略なり、此の種類の名を、一覽に知らしめむがため、圖を顯はして示す、（副詞は、種類多ければ、標準をしるして示す、）

副詞表

(一)　尋常副詞
おのづから　かならず　たゞ
なか〳〵　はや　ひたすら
またき　みな　みながら
もはら　やう〳〵　やゝ
やがて　よし　とかく
ゆめ〳〵
いたづらに　つひに　ともに
とにかくに　ひたぶるに　さらに
うちつけに
すみやかに　たひらかに
のどやかに　きよらかに

(二)　承上副詞
へ　など

(三)　未來副詞
いまだ　いまだに
まだ　もし

(四)　不定副詞
おほかた　おほよそ
おほく

(五)　附說副詞
しかすがに　さすがに

(六) 比較副詞　しかしながら　さりながら
より
(七) 上級副詞　また
なほ
(八) 最上級副詞　いと　いと〳〵
もとも　はだはだ　いよ〳〵
こゝら　うたて
(九) 動詞轉成副詞　著ならす　おさいづる
さきにほふ　ふるす
かれゆく　ありつく
此の類はなはだ多し、
(十) 形容詞轉成副詞　ふかく　おもふ　おそく　おゆむ
ありつふる
こひしく　おもふ　かなしく　おもふ
(十一) 助詞轉成副詞　ながら　がてら　ず
で　て　つゝ
べく　まじく　ごとく

より　から　まで
のみ　ばかり　だに
さへ

第十九章　接續詞

此の詞は、詞の間にありて、上下の詞をつらねて意をとゝのふるものなれば、かく云ふ、此の詞に、「承上接續詞」「中格接續詞」「承下接續詞」あり、また、「承上接續詞」の中に、「代名詞助詞成熟接續詞」「助詞轉成接續詞」の二種ありて、統べては五種あり、

第一節　承上接續詞

すなはち　そも〳〵
さて　かく
しか　なほ
はた　また

これらの類は、上の詞を承けて、下へつゝくる接續詞なり、例は擧げずとも知らるべし、さて、こゝに心うべきこと、あり、「すなはち」「そも〳〵」「さて」「かく」「しか」等は、接續詞にして副詞に通ず、「なほ」「はた」「また」等は副詞にして接續詞に通ず、

第二節　代名詞助詞成熟接續詞

さらば　されば
されど　されども
かゝらば　かゝれば
かゝれど　かゝれども
しからば　しかれば
しかれど　しかれども

是を委しく云はば、「代名詞動詞助詞成熟接續詞」と云ふべきなれど、略してかく云ふなり「さかし」は代名詞にてそれに「あれ」と云ふ動詞の熟して、「されば」「かゝれば」「しかれば」となれるなり、(さは指示代名詞の標準に、そと擧げたるに同じ意なり、かも亦しかり、然るを「かく」と云へば、接續詞となりて、副詞にも通ずること、上文に云へるがごとし、)是らも上を承けて下へつゞくる接續詞なり、例に擧げずとも知らるべし、

第三節　助詞轉成接續詞

〔例詞〕
へなど　ず
て　ば　一階のばなり
で　ば　五階のばなり
ど　ども

是らの類なり、例を示す、

〔用例〕
米國　へ　ゆく
種々の花　など　さけり
花をあか　ず　見る
花ちら　ば　さびしからむ
花を見　て　あそぶ
花ちれ　ば　ものさびし
花さけ　ど　風さむし
花さけ　ども　風さむし

是も上を承くる接續詞なり、例に擧げたることはいづれも副詞の意あり、接續詞と副詞とは意はなはだ近ければ、詞によりて相通ふこと上文にも云へるがごとし、)また、助詞より助詞へつゞきて、「ざらば」「すして」「ずば」など云ふとも同じく、接續詞なり、その例を示す、

〔複用例〕
他か……ざらば……かへらじ
他か……ずして……長ゐす

他か……ずば……やまじ
雪降り……たれば……道たえぬ
風吹き……たれど……寒からず
霜置き……たれども……草いまだ枯ず

是も上を承くる接續詞なり、推して知るべし、

第四節　中格接續詞

〔例詞〕
が　の

是は中格の「が」「の」なり、例を示す、

〔用例〕
松が枝　賤が嶽
梅が枝　鐘が淵
鳥の羽　大和の守
秋の田　武藏の國

これらの類なり、中格のところをも見合すべし、

第五節　承下接續詞

是は助詞ながら接續詞となるものなり、

〔例詞〕
と

此の一種のみなり、例を示す、

〔用例〕
誰いふ　となく云ひさわぐ
花　と見えて花にはあらず

これらの類なり、また、さる丶助詞を受くともおなじさだめなり、

〔用例の二〕
いまだ聞かず　といふ
速にせめよ　といふ

是らの例を見て知るべし、（とも副詞の意あり、接續詞と副詞と相通ふこと、上文に云へるがごとし）是までのところ接續詞の大略なり、此の種類の名を一覽に知らしめむがために、圖を顯はして示す、

接續詞類別表

(一) 承上接續詞
すなはち　そも〳〵　さて
かく　しか　なほ
はた　また

(イ) 代名詞助詞轉成接續詞
さらば　されば
されど　されども

(ロ) 助詞轉成接續詞
へなど　ず　て
ば　て　ば
ど　ども

(二) 中格接續詞
が　の

(三) 承下接續詞
と

第二十章　問投詞

此の詞は、悅喜、憤怒、快樂、哀傷いづれにつけても云はるることは、或はこゝにて文章のはじめにも、なかばにも、するにも用ゐる故に、問投詞と云ふ、問投とはものゝあひだにうちいるゝ意なり、此の詞に、統稱問投詞、賤惡問投詞、困倦問投詞、召呼問投詞、應答問投詞、驅逐問投詞、補闕問投詞、助詞問投詞、疑問問投詞の九種あり、

第一節　統稱問投詞

是は何事にも云ふ問投詞にて、よろこび、かなしみなど凡べてにわたるなり、

〔例詞〕
あ　や
わ　あな
あはれ　あら

これらの類なり、例を示す、

〔用例〕
あとさけぶ
やと聲をかくる
わとおどろく
あなうれし
あはれものゝ上手や
あら不思議や

此の類なり、此の中、あ、や、わ、は聲なれども問投詞に加へて示す、以下に聲と云ふは皆是なり、

第二節　賤惡問投詞

是は物や事をいやしみもし、さらひもする詞なり、

〔例詞〕
え丶　いな

これらの類なり、例を示す、

〔用例〕
え丶しや

えゝにくや
いなゆかじ
いなおもはじ
此の類なり、なずらへて知るべし、

第三節　困倦問投詞

是はくるしみ、或はうめるときに云はるゝ聲なり、

〔例詞〕　う　うゝ

これらの類なり、例を示す、

〔用例〕

うとうめく
うゝといひてたふれ伏す

此の類なり、なずらへて知るべし、

第四節　召呼問投詞

是は物を召し、或は呼ぶときの問投詞なり、

〔例詞〕　やよ　やよや
これ　これや

これらの類なり、例を示す、

〔用例〕

やよ旅人よ
やよやまて
これこち來よ
これや酒もて來よ

此の類なり、此の中に、「これ」は指示代名詞なれど、轉じて問投詞にも用ゐるなり、その故は「これなる人」「これなる人や」と云ふ詞を省きて、「これ」「これや」と云ふなり、（「こや」と云ふも省きたる詞にて同じ意なり、）味ひて知るべし、

第五節　應答問投詞

是は人に答ふる聲なり、

〔例詞〕　あ　おゝ

これらの類なり、例を示す、

〔用例〕

あといらふ
おゝと申す

此類なり、準へて知るべし、

第六節　驅逐問投詞

是は物をおひやるときの聲なり、

し

此の聲は、牛馬犬などをおふときのこゑにて、「しし」と犬を追ふなど重ねても云ふなり、

第七節　補闕問投詞

是は、詞の足らぬを補ふことばなればかく云ふ、

〔例詞〕　や　は　も　し

是らの類なり、但、この「は」「も」「や」は係詞の「は」「も」「や」にあらず、例を見て味ひ知るべし、

〔用例〕

いかゞは爲むは
獨かも寢む
杜鵑なくや五月の菖蒲草
花しちらずば千代か經ぬべし

此の類なり、これをさとさば、「は」は「はあ」といふ意、「も」は「まあ」と云ふ意、「や」は「や其」と云ふ意、「し」はそれがまあと云ふ意にて、意を補ふことばなり、

第八節　助詞問投詞

是は動詞三階を受くる助詞、動詞五階を受くる助詞、形容詞三階を受くる助詞の中歎ずることばどもなり、されば、助詞ながら、問投詞となるものとも云ふ、

〔例詞〕　かし　や　動詞五階形容詞三階を受くるやなり
な　よ

これらの類なり、例を示す、

〔用例の一〕

此の家に我は住むかし
彼の人は此の家にすむや
彼の人は月を見るな
此の家に我はすむよ

これら三階を受くる助詞の例なり、

〔用例の二〕

汝は大阪へゆけかし
汝は長崎へゆけや
汝は東京へ來れな
汝は横濱へかへれよ

これら五階を受くる助詞の例なり、

〔用例の三〕

我はいと寒しかし
我はいと暑しや
我はうれしな
彼の人はいと變しな

これら形容詞(くしき、しくしし、しき、)三階を受くる助詞の例なり、(「あなおもしろや」「あら不思議や」などの「や」もこゝの「や」にて疑問間投詞のやにあらず、)これをさとさば、かしは「さ」と云ふ意、やは「よ」と云ふ意、なは「なあ」と云ふ意、よは「よう」と云ふ意なり、

第九節　疑問間投詞

是は動詞三階を受くる疑歎のや、形容詞(良行四段一格)二階を受くる疑歎のや、形容詞(くしき、しくしし、しき、)三階を受くる疑歎のやなり、(此の形容詞三階を受くる「や」は歎ずる「や」と疑歎の「や」と二つあり、三詞略圖を見あはせて知るべし、)されば、助詞ながら間投詞となるものとも云ふ、

〔例詞〕
や

此の一言のみなり、例を示す、

〔用例の一〕
汝は此の家にすむや
汝は月を見るや

これら動詞三階を受くる助詞の例なり、

〔用例の二〕
汝は錢ありや
汝は暇ありや

これら形容詞(良行四段一格)二階を受る助詞の例なり、

〔用例の三〕
汝は錢なしや
汝は暇なしや
汝の住む家は夏はすゞしや
汝の爲には此の事はよしやあしや

これら形容詞(くしき、しくしし、しき)三階を受くる助詞の例なり、これをさとさば、「や」は「かい」の意なり、是までのところ間投詞の大略なり、此の種類の名を一覽に知らしめむがため、圖を顯はして示す、

間投詞類別表

(一)　統稱間投詞

あ　や　わ
あな　あはれ　あら

(二)　賤惡間投詞
え　いな

(三)　困倦間投詞
う　うゝ

(四)　召呼間投詞
やよ　やよや　これ
これや

(五)　應答間投詞
あ　おゝ

(六)　驅逐間投詞
し

(七)　補闕間投詞
は　も　や
し

(八)　助詞間投詞
かし　や　な
よ

(九)　疑問間投詞
や

是までのところ十品詞の大意なり、委しくは、大文典を見るべし、

○いづれの詞にても、一言一品にさだまれることにはあれど、詞によりて一言二品に通じ、或は三品に通ずる詞あり、その通ずる詞どもは、その條下ごとに辨じたれば、此のこゝろ得にて見るべし、

文章篇

總說

文法とはいかなるものぞと云ふに、何事にても決定して云はむとすれば、決定する係詞ありて、それに云ひかけて結び、定めぬことを云はむとすれば、定めぬ係詞ありて、それに云ひかけて言語を結ぶ、これを文章法と云ふ、されば係詞は文法の本にして、結詞は文法の末なり、その餘係詞にかゝはらず云ひつゞけも、云ひとゞめもする法ありて、統べて十法あり、

第一章　直說法

此の法はすぐ〳〵と云ひとくゆゑにかく云ふ、此の直說法に、輕き重きの二種あり、輕き直說法は係詞なくして結び、(これを「たゞ」の法とも云ふ)又右の條

の「は」「も」「が」「の」「に」「を」を結びて文章をなす、これを輕き直說法と云ふ、重き直說法は、中の條の「が」「の」「ぞ」「や」「か」を結び、又左の條の「こそ」を結びて文章をなす、これを重き直說法と云ふ、

第一節　輕直說法標準

花○さかず　（係詞なし）
花「は」さかず
花「も」さかず
鶴「が」なく
鶴「の」なく
物「に」まぎる
物「を」まぎらかす

かくのごとく一文章をなすを輕き直說法と云ふ、結詞はいづれも三階なり、（三詞略圖を見合すべし）

第二節　重直說法標準

鶴「が」なくなる
鶴「の」なくなる
花「ぞ」にほふなる
花「や」さくらむ
花「か」さくらむ
花「こそ」さかめ

かくのごとく一文章をなすを重き直說法と云ふ、結詞は、いづれも四階なり、但「こそ」の結詞は五階なり、（三詞略圖を見合すべし）

○輕き直說法、重き直說法、共に結詞によりて細目あり「未來直說」「現在直說」「過去直說」「第二過去直說」「大過去直說」「形容現在直說」の名あり、例を示す、

第一　未來直說法

これは然ならざること、然あらむとすることを云ふ直說法なり、

花「は」さかず
花「ぞ」さかぬ
花「こそ」さかね
花「は」さかじ
花「は」さかむ
花「ぞ」さかむ
花「こそ」さかめ
花「は」さかまし
花「ぞ」さかまし
花「こそ」さかまし

花「は」さかなむ
花「は」さきなむ
花「ぞ」さきなむ
花「こそ」さきなめ
花「は」さくらむ
花「ぞ」さくらむ
花「こそ」さくらめ
花「は」さくらし
花「ぞ」さくらし
花「こそ」さくらし
花「は」さくべし
花「ぞ」さくべき
花「こそ」さくべけれ
花「は」さくまじ
花「ぞ」さくまじき
花「こそ」さくまじけれ

第二　現在直說法

これは目のまへのことを云ふ直說法なり、

花「は」ちりぬ
花「ぞ」ちりぬる
（「こそ」ちりぬれ
花「は」さく
花「ぞ」さく
花「こそ」さけ
花「は」さくめり
花「ぞ」さくめる
花「こそ」さくめれ
花「は」さくかし
花「は」さくな（歎ずるなにて「ナア」の意なり
花「は」さくよ
山「は」見ゆなり
山「ぞ」見ゆなる
山「こそ」見ゆなれ
花「は」さくかな
花「は」雲のごとし
花「ぞ」雲のごとき

これらを現在直說法と云ふ、

第三　過去直說法

これは過ぎさりしことを云ふ直說法なり、（第一過去といふ）

花「は」ささき
　「ぞ」ささきし
　「こそ」ささきしか

これを過去直説法と云ふ、

第四　第二過去直説法

これは、事は過ぎさりて、その物はなほ目の前にあるを云ひ、また事の過ぎさりたるを目のまへにとりかへして云ふ直説法なり、

人「は」しらざり
　「ぞ」しらざる
　「こそ」しらざれ
人「は」しりたり
　「ぞ」しりたる
　「こそ」しりたれ
人「は」しりつ
　「ぞ」しりつる
　「こそ」しりつれ
雪「は」ふりつゝ
　「は」ふりけり
雪「ぞ」ふりける
　「こそ」ふりけれ
人「は」すみけむ
　「ぞ」すみけむ
　「こそ」すみけめ
花「は」さきにけり
　「ぞ」さきにける
　「こそ」さきにけれ
雨「は」はるゝなり
　「ぞ」はるゝなる
　「こそ」はるゝなれ

これらを第二過去直説法といふ、

第五　大過去直説法

是は大に過ぎさりし事を云ふ直説法なり、

此の家に人「は」すめりき
　「ぞ」すめりし
　「こそ」すめりしか
此の家に人「は」すまざりき
　「ぞ」すまざりし
　「こそ」すまざりしか
　「は」すみにき

此の家に人「ぞ」すみにし
　「こそ」すみにしか
此の家に人「は」すみたりき
　「ぞ」すみたりし
　「こそ」すみたりしか

第六　形容現在直説法

是は形容詞（くしき、しくししき）の三階四階五階に結ぶ直説法なり、

よの中「は」うし
　「の」うさ
　「ぞ」うき
　「こそ」うけれ
人「は」こひし
　「の」こひしさ
　「ぞ」こひしき
　「こそ」こひしけれ

これらの類なり、悉く知らむとおもはば大文典を見るべし、

第三節　命令法

此の法を「希求法」とも云ふ、それはいかにと云ふに、我より下に對ひて云ふときは下知する意なれば、「命令法」と云ひ、また我より希求むる意になるときは「希求法」とも云ふ、いづれも係詞を結ぶなり、此の法に「一階命令」「二階命令」「三階命令」「五階命令」の四種あり、

第一　一階命令法

是は動詞の一階の詞に助詞のよを添ふるをいふ、

著物―「を」きよ
親―「に」によ
傍―「に」よきよ
木葉―○おちよ
利徳―「を」えよ
賜もの―「を」うけよ
こゝ―「に」こよ
引導―「を」せよ

これらの類なり、

第二　二階命令法

是は動詞の二階の詞に助詞の「ね」を添ふるをいふ、（此のねを方今は「ナ」といふ）

早く―○ゆきね

こゝ—「に」ふしね
弓—「を」いね
待て—〇ねね
身—「を」うらみね
階—「を」おりね
芥—「を」すてね
木—「を」うゑね
こゝ—「に」きね

これらの類なり、

第三　三階命令法

是は動詞の三階の詞に助詞の「べし」を添ふるを云ふ、

汝—「は」ゆくべし
座—「を」たつべし
着物—「を」きるべし
書—「を」みるべし
道—「を」よくべし
蓋—「を」とづべし
賜ものー「を」うくべし
芥—「を」すつべし
手習—「を」すべし
早く—〇いぬべし
待て—〇をるべし

これらの類なり、但、此の「べし」は用ゐやうによりて、常の「べし」云々あらむことどもおしきはむるべしなりことなるなり、「彼の人は暇あれば手習をするなるべし」と云へば常の「べし」なり、然るを「汝は夜昼となく手習をすべし」といへば命令法となるなり、かくのごとく用ゐやうによりて「べし」の意かはるなり、初學の徒のために　一つ二つ例を擧げて示す、

彼の人は急ぐ事あれば今朝は
早くいぬべし（常のべし）
約束にたがはず彼の人は今日
は待ちてをるべし（常のべし）
汝は用事あれば彼の所へ今朝
は早くいぬべし　命令のべし）
汝はいまだ用事あればこゝに
暫くまちてをるべし　命令のべし）

常の「べし」　命令の「べし」　用ゐやうかくのごとし　此ひて知るべし、

是は動詞の五階の詞、またその五階の詞に助詞の「かし」「や」「な」「よ」を添ふるを云ふ、

船—「を」こげ
早く—〇たて
船—「を」こげかし
船—「を」こげや
船—「を」こげな
船—「を」こげよ
常磐—「に」あれ
常磐—「に」あれかし
常磐—「に」あれや
常磐—「に」あれな
常磐—「に」あれよ
しばし—「は」たてれ
しばし—「は」たてれかし
しばし—「は」たてれや
しばし—「は」たてれな
しばし—「は」たてれよ
云ふ事—〇なかれ
云ふ事—〇なかれかし
云ふ事—〇なかれや
云ふ事—〇なかれな
云ふ事—〇なかれよ
早く—〇いね
早く—〇いねかし
早く—〇いねや
早く—〇いねよ

これらの類なり、悉く知らむとおもはば、大文典を見るべし、

第四節　可成法

此の法は、物や事を「なし得る」「とゝのへ得る」などの「得る」と云ふ意を云ひあらはす法にて、「え」といふ詞これなり、「え」と云ふ詞は、用ゐやうによりて、可成法にはならず、此の用ゐやうを知るを「可成法」を知ると云ふ、此の法は係詞にかゝはらず、

え行く
え行かず
え追ひつかず

是らの類なり、こゝにこゝろ得べきは「行くことを得」「行くことを得ず」「追ひつくことを得ず」など云

へば、直説法となりて、此の法にはあらず、上文に用ゐやうによりてと云へるは是なり、

第五節　附説法

此の法は、動詞にても、形容詞（くしき、しくししき）にても助詞にても、そのことばに云ひ添へて説きあかす法なり、但、係詞にはかゝはらず、此の法に、未來附説、現在附説の二種あり、その未來附説に「一階未來附説、三階未來附説あり、その現在附説に、三階現在附説、五階現在附説ありて、統べては四種あれど、歸するところは、未來、現在の二種なり、（是までのところは動詞形容詞「くしき、しくししき」につけて云ふ）さてまた、助詞を受くるには、未來、過去、現在の三種あり、委しくは下文に示す、

第一　一階未來附説法

是は、動詞形容詞（くしき、しくししき）の一階の詞に助詞の「ば」を添ふるを云ふ、

花さかば―見にゆかむ
着物を着ば―煖ならむ
木の葉落ば―さびしからむ
實を得ば―うれしからむ
人の來ば―うるさからむ
案内爲ば―我もゆかむ
夫の往ば―悲しからむ
幸有ば―めでたからむ
雪のふれらば―人も來ざらむ
水あさからば―かちにて渡れ
水深くば―馬にて渡れ
胸苦しくば―藥をのめ

第二　三階未來附説法

是は動詞形容詞（くしき、しくししき）三階の詞に助詞の「とも」を添ふるを云ふ、

風ふくとも―船にて渡む
暫時はゐるとも―なが居すな
身は老ゆとも―心はよわらじ
命すつとも―をしからじ
尋て來とも―人には逢はじ
誓言爲とも―たのまれじ
汝は往とも―とゞめじ
存生ありとも―かひなき身なり
雪ふれりとも―山路をゆかむ

かひなかりとも―かたらひて見む
水淺くとも―川は渡らむ
戀しくとも―逢がたからむ

これらの類なり、さてまた心うべきことは、此の中に、良行四段一格の「ありとも」形容詞（くしき、しくししき）の「あさくとも」「こひしくとも」などは、二階なれど、この列に擧げて示す、「とも」の受けやう同じ意なればなり、また心うべきことは、動詞形容詞共に云ひざまによりて、附説法にならざる「とも」あり、その差別を示す、

なやましとも―我はつとめむ

これらの類は上文に擧げたる「とも」にかゝはらず、未來附説法の「とも」なり、

ありともあり
うしともうし
かなしともかなし

これらの類は、未來附説法にあらず、そのゆゑは、詞をかさねて云へるにて、此の「とも」の「も」は補闕間投詞の「も」なり（「マア」といふ意のもなり）

第三　三階現在附説法

是は、動詞形容詞（くしき、しくししき）の三階の詞に助詞の「とは」を添ふるを云ふ、

我を捨てゝゆくとは―つれなし
寒きに單をきるとは―いかにぞや
知らぬ人をこふとは―なにの心ぞや
善きをすつとは―まどはんためか
呼ばぬを來とは―はやまりなり
よからぬ事を爲とは―いかにぞや
ことわりなく往とは―無禮なり
待ちてありとは―心ながさよ
こゝにふせりとは―酒に醉ひたるにや
かくたゞしかりとは―しらざりき
水あさしとは―おもはざりき
善きをあしとは―いかにぞや

これらの類なり、さてまた此の中に、良行四段一格の「ありとは」「ふせりとは」「たゞしかりとは」などは、二階なれど、此の列に擧げて示す、「とは」の受けやう同じ意なればなり、

第四　五階現在附説法

是は動詞形容詞（くしき、しくししき）の五階の詞に、

助詞の「ば」「ど」「とも」を添ふるを云ふ、

風ふけば—肌寒し
雪とくれば—水まさる
暇あれば—書をよむ
志深ければ—なす事成る
心正しければ—家とゝのふ
風ふけど—肌寒からず
雪とくれど—水まさらず
暇あれど—書をよまず
志深けれど—事ならず
心正しけれど—家とゝのはず
風吹けども—肌寒からず
雪とくれども—水まさらず
暇あれども—書をよまず
志深けれども—事ならず
心正しけれども—家とゝのはず

これらの類なり、五階現在附説法は、その意よく知らるれば例をいさゝか擧げたり、また心うべきことあり、上に係詞ありて、「志こそ深けれども」「心こそ正しけれども」と云ふとも五階現在附説法なり、(「こそ」をけれにて結びたれば直説法なれどまたともと受けてそのことを説くゆゑ直説法のかた輕くなりて附説法のかた重し、さるゆゑに、附説法に屬くなり)

第五　承助詞附説法

此の助詞を承くる附説法には、「未來附説」「過去附説」「現在附説」あること上文にも云へるがごとし、(動詞形容詞を承くる附説法には未來現在の二種のみなり)また、名詞を承くる助詞にも此の法あれば、こゝに擧げて示す、

(一)　承助詞未來附説法

武勇の人鎮守府將軍たらば—無事ならむ
彼と此と符合せらば—善からむ

是らは名詞を承くる助詞を又承けたるなり、

花さかずば—さびしからむ
花さかざらば—むなしく歸らむ
花さかましかば—をかしからまし
花さきたらば—見てかへらむ
花さきなば—來て見む
君としりせば—門あけまし
雨ふるべくば—急てかへれ

雪ふるまじくば—山路をゆけ
風ふくならば—船いだすな

是らは、動詞を承くるを又承けたるなり、

(二)　承助詞過去附説法

花ちりにしかば—さびし
花ちりにしかど—さびしからず
花ちりにしかども—さびしからず
花ささしかば—見る人きたる
花ささしかど—見る人なし
花ささしかども—見る人なし

これらは動詞を承くるを又承けたるなり、こゝに心うべきことあり、「にしか」「しか」は花にて云はば、さくこと散ることの過ぎ去りたるを云ふ助詞なり、(過去附説法は此の六言にかぎれり、)

(三)　承助詞現在附説法

武勇の人鎮守府將軍たれば—無事なり
武勇の人鎮守府將軍たれど—無事ならず
武勇の人鎮守府將軍たれども—無事ならず
彼と是と符合せれば—善し
彼と是と符合せれど—善からず
彼と是と符合せれども—善からず

是らは名詞を承くるを又承けたるなり、

花さかねば—さびし
花さかねど—さびしからず
花さかねども—さびしからず
花さかざれば—さびし
花さかざれど—さびしからず
花さかざれども—さびしからず
花ささたれば—をかし
花ささたれど—をかしからず
花ささたれども—をかしからず
花ささつれば—見る人多し
花ささつれど—見る人多からず
花ささつれども—見る人多からず
花ささければ—人の訪ふ
花ささけれど—人も訪はず
花ささけれども—人も訪はず
花ささにければ—人訪ふ
花ささにけれど—人訪はず
花ささにけれども—人訪はず

花さきぬれば—人訪ふ
花さきぬれど—人訪はず
花さきぬれども—人訪はず
花さくめれは—風も寒からじ
花さくめれど—風いまだ寒し
花さくめれども—風いまだ寒し
花さくなれば—雪はのこらじ
花さくなれど—雪いまだ消えず
花さくなれども—雪いまだ消えず

是らは動詞を承くるを又承けたるなり(此の類なほあり三詞略圖を見るべし、こゝには常に多く用ゐるを擧ぐ)悉く知らむとおもはば、大文典を見るべし、

第二章　疑問法

此の法は、物や事のうたがはしきを、彼は何ぞと問ひかくる法なり、此の法に重きあり、輕きあり、又云ひつむるありて、統べて三種あり、此の中輕き重きの二種はいづれも係詞を結ぶなり、云ひつむるなと云ふは、係詞にて云ひつむるなり、

第一節　輕疑問法

花—「は」—さくや
花—「も」—さくや
君—「が」—わくや
花—「の」—さくや
花—「に」—あくや
花—「を」—みるや
着物—「を」—きるや
木葉—「は」—おつや
我—「を」—おもひいづや
人—「の」—とひくや
こゝ—「に」—おはすや
君—「は」—いぬや
無事—「に」—ありや
そこ—「に」—たてりや
道—「は」—遠かりや
水—「は」—ふかしや

これらの類なり、此の餘助詞を受けたる疑問法あり、

あはれと—〇—おもはずや
君—「は」—しらずや
いづこ—「に」—ゆきたりや

是らの類なり、輕疑問法は、いづれも右の條の係詞に

かゝりて疑歎の「や」にて結ぶがさだまりなり、

第二節　重疑問法

今日に限りて風ふく—「や」—いかに
我が門をとぶらふ—「や」—たそ
雪のごとく見ゆる—「や」—なぞ
花の下にたてる—「や」—たれ
ゆけど〳〵道のとほき—「や」—なぞ
昔の人のこひしき—「や」—なぞ

これらの類なり、此の餘助詞を受けたる疑問法あり、

打きためてもこりぬ—「や」—いかに
往くともいはてゆきし—「や」—いかに
門の外にたちたる—「や」—たそ

是らの類なり、重疑問法は、いづれも中の條の係詞にかゝりて、疑問代名詞にて餘意を含めて云ひとゞむるなり(餘意を含むるとは「門の外に立ちたるやたそ」とあるは「門の外に立ちたるや誰にぞあらむ」と云ふ意をやたそに含むるを云ふ、)

第三節　強疑問法

都を出でて今日はいく日「ぞ」
遠く見ゆるは何と云ふ山「ぞ」
善く見ゆるに「や」
悪く聞ゆるに「や」
消えあへぬ雪の花と見ゆる「か」
白く見ゆるは雲「か」花「か」

これらの類なり(云ひつむる意を委しく知らむとおもはば云ひつむる係詞の條下見あはすべし)さてまた此の「ぞ」「か」に歎ずる「や」(よに通ふやなり)を添へても同じ疑問法なり、

都を出でて今日はいく日「ぞ」や
遠く見ゆるは何と云ふ山「ぞ」や
理を非なりとはいかに「ぞ」や
善く見ゆる「か」や
悪く聞ゆる「か」や

これらの類なり、なほ能く知らむとおもはば、大文典を見るべし、

第三章　禁制法

此の法は、何ごとにても「然することなかれ」といましむる法なり、此の法に、上にある禁制法、下にある禁制法の二種あり、上にある禁制法は、係詞にかゝはらず、下にある禁制法は係詞をむすぶ結詞なり、

第一節　在上禁制法

ものな思ひそ
悪人になに似そ
いたくな戀ひそ
早くな寐そ
人な訪ひ來そ
然な爲そ
よそになに往にそ
そこになありそ

是らの類なり、此の「な」は係詞のやうなれど然らず、「そ」も亦結詞にあらず、あひ應じて禁制法をなすなり、但、禁制する意は「な」にあるなり、然るゆゑ、上代は下の「そ」なきも多かり、是にて「な」は係詞ならぬことをも知るべし、

第二節　在下禁制法

もの―「を」いふな
着物―「を」きるな
木葉―○おつな
猥―「に」ほむな
他人―「は」くな
粗忽―「に」すな
よそ―「に」いぬな

これらの類なり、委しくは大文典を見るべし、

第四章　連續法

此の法は云ひつゞくる法なり、此の法に、尋常連續法、未來連續法、過去連續法、喚起連續法、統持連續法の五種あり、いづれも係詞にかゝはらず、

第一節　尋常連續法

海山は昔ながらにかはらねど
ありしながらの我身ならば
花見がてらに人を訪ふ
採藥がてら山にあそぶ

これらの類なり、（ながらがてらは、名詞を受くる助詞なり、助詞の條下を見あはせてその意を知るべし、）

第二節　未來連續法標準

あかず見よ
たをず行よ
花さかてさびし
人すまであれたり

花さかずてさびし
花さかずしてさびし

是らの類なり、但、此の「ず」はきるゝ「ず」にあらてつづく「ず」なり、「ず」に二種あること助詞の條下に云へり、

第三節　過去連續法標準

人すみてにぎはし
水淺くて船ゆかず
水深くしてわたりがたし
花を見つゝ山路を行く

これらの類なり、但、此の「つゝ」はきるゝ「つゝ」にはあらてつゞく「つゝ」なり、「つゝ」に二種あること助詞の條下に云へり、

第四節　喚起連續法標準

喚起とは、一度結びたるを、また喚び起すを云ふなり、是は係詞なくて結びたる（「徒」に結ぶなり）を喚び起すが多し、

都へゆくとさいて（こゝにて結べるを又喚起せるなり、已下皆同じ、）
人「は」知ると云へども
我が身おゆとなげく
人「の」來といとふ
田舍「に」ありときく
早くゆけと下知す
いまだ見ずと云へども
早く行むとおもひて
山と見えて山にはあらず
大敵とておそるな
然有とていかゞはせむ

是らの類なり、

第五節　統持連續法標準

事物を統べ持つとは、物や事を統べ持ちて含めるゆゑにかく云ふ、（何や彼やと云ふ意を言外に顯はす法なり、）

集ひて物語などす
花など種々さけり
馬車などゆきかふ
糸綿などうりかふ
山には熊鹿などすめり

これらの類なり、但、「など」と云ふ言は、名詞をのみ

受けて下へつゞくがさだまりにて、動詞をば受けざるなり、(「物あらそひなどす」「風ふきなどす」とあるも皆名詞を受けたるにてあらそひもふきも云ひ居るたる名詞なり)委しくは大文典を見るべし、)

第五章　標準法

此の法は、目あてを顯はす法なり、本の標準法、中の標準法、末の標準法の三種あり、此の法は、係詞にはかゝはらず、

第一節　本の標準法標準

京よりかへる

横濱より船をうかべて

山より猿いで來

悲しき事をきくより涙こぼる

是をなほよく示さば、「京」「横濱」「山」「きく」などは、皆その本にして、それより外に及ぶ意を顯はすなり、されば、此の「より」をば下に「に」と云ふ係詞ありてそれにかゝるが定例なり、「京よりかへる」といふ意なり、「横濱より船をうかべて」と云へば、「横濱より船をうかべて外國にゆく」などいふ意なり、「山より猿いで來」と云へば「山より猿こゝにいで來」と云ふ意なり、「悲しき事をきくより涙こぼる」と云へば「悲しき事をきくより涙こゝにこぼる」と云ふ意なり、

枕より又知る人もなし

風より外に訪ふ人もなし

これらも同じ法にて、「枕」「風」を本として、それより外に及ぶ意なり(よりと云ふ詞は、その原は一つなれど、分れて三つとなれり、二つは此の標準法のよりなり一つは比較副詞のよりなり、)

朝鮮國からかへる

むかしから今にいたるまで

是らを本の標準法と云ふ、(からと云ふ言は、その原一つなれど分れて二つとなれり、一つは、此の標準法の「から」なり、一つは副詞となる「から」なり、副詞となる「から」は「からに」とも云ふ、こゝのは「からに」とは云はず、)

第二節　中の標準法標準

京へのぼる

田舍へゆく

これをなほよく示さば、我が行べき所を方角の眞中

として指す言なるゆゑに、中の標準法と云ふ、(但「京にいたる」と云へば京にいたりつきたるを云ふにて、方角をさすにあらず、されば京にといひては標準法にあらず、)

第三節　末の標準法標準

京より大阪まで

君が代は萬代まで

道もなきまであれにけり

津々浦々にいたるまで探索す

これらの類なり、此の法は、末を指して本をも顯はす言なるゆゑに、末の標準法と云ふ、(此のまでは副詞とするまでなり)

第六章　畫限法

此の法は、物や事をはかりかぎる法なり、係詞にはかかはらず、(但「のみ」と云ひつめ「ばかり」と云ひつめてきるゝことあり、それはことばを省けるなり、次にあぐる例を見て知るべし、)

君が名をきくのみなり

住む人なくてたゞ家のみあり

高ければあふぎ見るのみ(あふぎ見るのみなりと云ふを省けるなり)

空に雲なくて月と星とのみ(是も亦上に同じ)

花もさくばかりあたゝかなり

書はほろびて名ばかりのこれり

待つとても此の月ばかり(此の月ばかりなりと云ふを省けるなり)

蛇の大さ松の木ばかり(是も亦上に同じ)

これらの類なり、これをなほよく示さば「のみ」は、一すぢにかはりかぎる意にて、「バッカリ」と解すべし、「ばかり」は數多き物の中にさかひをたてゝ畫りかぎる意にて、「ホド」「ダケ」など解すべし、委しく知らむとおもはば、大文典を見よ、

第七章　含蓄法

此の法は言外をあらはす法なり、此の法に、顯餘含蓄法、添餘含蓄法の二種あり、係詞にはかゝはらず、

第一節　顯餘含蓄法標準

きくだにうるさし

いふだにものうし

山里は松の雪だにきえず

聲をだにせめては聞きたし
都すらさびしさ秋なり
それすら百年の昔となりぬ
きくすらあはれなる物語なり

これらの類なり、これをなほよく示さば、「きくだにうるさし」と云ふは、見てはなほいかならむと云ふ意を含めり、(是のこりを顯はすなり)「都すらさびしき秋なり」と云ふは、田舍はなほいかならむと云ふ意を含めり(是のこりを顯はすなり、)

第二節　添餘含蓄法標準

見るさへわづらはし
ものいふさへいま〳〵し
春さへ雪のふる
夏さへさむし

これらの類なり、これをなほよく示さば、「ものいふさへいま〳〵し」と云ふは、逢ひ見ることは殊にいま〳〵しとおもひます意を含めり、(是のこりを添ふるなり)「春さへ雪のふる」と云ふは、冬は殊に雪のふるならむとおもひます意を含めり、(是のこりを添ふるなり)されば、「だに」は「デモ」「ソレデモ」など解すべし、「すら」は「ソレデモ」「ソコデモ」など解すべし、「さへ」は「ソレデモ」「ソレマデモ」など解すべし、(助詞の條下をも見あはすべし)委しくは大文典を見るべし、

第八章　三路圖

○文章の十法は上文に辨じたるがごとくなれば、心得らるべきことにはあれど、それを、又一覽に知らしめむがため三詞略圖を顯はして示す、「三詞」とは十品詞の根元にして、「動詞」「形容詞」「助詞」これなり、此の三詞の活動を知らしむるは勿論活動くにしたがひて、受くる助詞も、亦あの〳〵さだまりあり、助詞を受くる助詞もあの〳〵さだまりあり、定ありて法あり、然るゆゑに、一々法の名をしるして見やすからしむ、此の圖をよく知りうれば法にまどはず、(圖の中動詞を受くる助詞にき、し、しか、なむ、なめなど圈を附したるは、いかにと云ふに、きは、ささき、ささし、きしかとはたらくが定例なるを、加行變格佐行變格にてはその定例のごとくはたらかずして、來し、來しか、爲し、爲しかをのみはたらきて、來き、せきとはたらかず、此の類に圈を附したり、なむ、なめも亦同じ

例なり、さてまた、此の動詞形容詞は、悉く擧げたれども、助詞の部にいたりてははたらかぬをば擧げず、はたらかぬとは、じ、で、なむ、ば、て、そ、かし、や、な、と、とは、ども、かな、より、から、まで、のみ、ばかり、だに、すら、さへ、ば、ど、ども、よ、などなり、是らは階ごとにしるしつけたれば見て知るべし、)法に惑はざれば文章を書くにやすし、

第三十一表　三詞略圖

命令法の係詞

は　も　に　を

重き直說法の係詞

(名詞へつゞけば形容詞となる詞)

が　の　ぞ　や　か

重き直說法の係詞「や」は重き疑問法の係詞ともなる

た　ど

係詞なきをたゞと云ふ

は　も　が　の　に　を

輕き直說法の係詞

(云ひすうれば名詞となる詞)
(動詞へつゞけば副詞となる詞)
輕き疑問法の係詞ともなる
下にある禁制法の係詞ともなる

	一段			四段			
	一	二	三	四	五		
	干	似	着	降	住	逢	立
	ひ	に	き	ら	ま	は	た
	む	て	ざり	ば	な	ま	で
					む	し	じ
							ざり
	直説	連説	直説	附説	直説	連説	直説
	ひ	に	き	り	み	ひ	ち
	け	け	て	そき	ぬ	に	つ
	む	つ	たり			なむ	ゝ
		ゝ	つ			けり	つ
			たり				り
	直説	連説	直説	禁制	直説	直説	直説
	ひ	に	き	る	む	ふ	つ
	る	る	る	と	と	な	す
	や	か	な	と	と	や	ま
	し	じ	よ	ば	り	な	め
		り	り				べ
		し	し				し
		む	む				り
	疑問直説	直説	直説	附説	附説	禁制直説	疑問直説
	ひ	に	き	る	む	ふ	つ
	る	る	る	ごとし	なり	さへ	のみ
	ばかり	のみ	ばかり			すら	ばかり
						だに	
	直説	標準限量	標準限量	直説	直説	含蓄	含蓄
	ひ	に	き	れ	め	へ	て
	れ	れ	れ	よ	な	や	ども
	ど	ば				し	
	附説	附説	附説	命令	命令	命令	命令

	二段			中二段				
	二	下		下	老	恨	戀	落
	寢	捨	痩	受	得	居	射	見
	ね	て	せ	け	え	ね	い	み
	む	て	じ	ざり	ず	よ	ば	まし
							なむ	
	直説	連説	直説	直説	連説	直説	附説	直説
	ね	て	せ	け	え	り	い	み
	け	つ	つ	たり	て	そき	ぬ	に
	り	ゝ						けり
	直説	連説	直説	直説	連説	禁制直説	直説	直説
	ぬ	て	す	く	う	る	ゆ	む
	か	つ	ま	ら	ら	と	と	な
	し	ま	め	し	む	と	と	や
		じ	り	し		ば	り	な
			し			も		
	直説	直説	直説	直説	直説	附説	附説	禁制直説
	ぬ	つ	す	く	う	る	ゆ	む
	る	る	る	る	る	ごとし	なり	さへ
	ばかり	のみ	から	より	かな			すら
			まで					だに
	量限	標準	標準	標準	直説	直説	含蓄直説	含蓄
	ぬ	つ	す	く	う	る	ゆ	む
	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ
	ど			ば		ども	ど	
	附説	附説				附説	附説	附説

	二段			中二段				
	二	下		下	老	恨	戀	落
	寢	捨	痩	受	得	居	射	見
	ね	て	せ	け	え	ね	い	み
	む	て	じ	ざり	ず	よ	ば	まし
							なむ	
	直説	連説	直説	直説	連説	直説	附説	直説
	ね	て	せ	け	え	り	い	み
	け	つ	つ	たり	て	そき	ぬ	に
	り	ゝ						けり
	直説	連説	直説	直説	連説	禁制直説	直説	直説
	ぬ	て	す	く	う	る	ゆ	む
	か	つ	ま	ら	ら	と	と	な
	し	ま	め	し	む	と	と	や
		じ	り	し		ば	り	な
			し			も		
	直説	直説	直説	直説	直説	附説	附説	禁制直説
	ぬ	つ	す	く	う	る	ゆ	む
	る	る	る	る	る	ごとし	なり	さへ
	ばかり	のみ	から	より	かな			すら
			まで					だに
	量限	標準	標準	標準	直説	直説	含蓄直説	含蓄
	ぬ	つ	す	く	う	る	ゆ	む
	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ
	ど			ば		ども	ど	
	附説	附説				附説	附説	附説

段	經 變 消 枯 植	
語尾	接續	用法
へ め え れ ゑ	まし なむ ば よ	直說 直說 附說 命令
＝へ＝め＝え＝れ＝ゑ＝	けむ なむ にけり ぬ き そ	直說 直說 直說 直說 直說 禁制
＝ふ＝む＝ゆ＝る＝う＝	や な な よ なり と とは とも	疑問 直說 禁制 直說 直說 連續 附說 直說
＝ふる＝むる＝ゆる＝るゝ＝うる	だに すら さへ なり ごとし	含蓄 含蓄 含蓄 直說 直說
ふれ むれ ゆれ るれ うれ	ども	附說

加行變格	來	
語尾	接續	用法
こ	ず ざり じ て む まし なむ ば し○ し○ しか○ そ よ や かし	直說 連續 直說 直說 連續 直說 直說 直說 附說 直說 禁制 命令 命令 命令
き	て たり つ つゝ けり けむ なむ にけり ぬ し○ し○ しか○	連續 直說 直說 連續 直說 直說 直說 直說 直說 直說
く	らむ らし べし めり まじ かし や な な よ なり と とは とも	直說 直說 直說 直說 直說 直說 疑問 直說 禁制 直說 直說 連續 附說 附說
くる	かな より から まで のみ ばかり だに すら さへ なり ごとし	直說 標準 標準 標準 量限 量限 含蓄 含蓄 含蓄 直說 直說
くれ	ば ど ども	附說 附說 附說

佐行	爲	
語尾	接續	用法
せ	ず ざり じ て む まし なむ	直說 連續 直說 直說 連續 直說 直說 直說
し	て たり つ つゝ けり	連續 直說 直說 直說 連續 直說
す	らむ らし べし めり まじ かし や な	直說 直說 直說 直說 直說 直說 疑問 直說
する	かな より から まで のみ ばかり	直說 標準 標準 標準 量限 量限
すれ	ば ど	附說 附說

變格	大坐	
語尾	接續	用法
	ば し○ し○ しか○ そ よ	附說 直說 禁制 命令
	けむ なむ にけり ぬ き○	直說 直說 直說 直說 直說
	な よ なり と とは とも	禁制 直說 直說 連續 附說 附說
	だに すら さへ なり ごとし	含蓄 含蓄 含蓄 直說 直說
	ども	附說

奈行變格	往 死	
語尾	接續	用法
な	ず ざり じ て む まし なむ ば	直說 連續 直說 直說 連續 直說 直說 直說 附說
に	て たり つ つゝ けり けむ き そ	連續 直說 直說 直說 連續 直說 直說 直說 禁制
ぬ	らむ らし べし めり まじ かし や な な よ なり と とは とも	直說 直說 直說 直說 直說 直說 疑問 直說 禁制 直說 直說 連續 附說 附說
ぬる	かな より から まで のみ ばかり だに すら さへ なり ごとし	直說 標準 標準 標準 量限 量限 含蓄 含蓄 含蓄 直說 直說
ぬれ	ば ど ども	附說 附說 附說
ね（や）	よ や かし	命令 命令 命令

良行四	有	
語尾	接續	用法
ら	ず ざり じ て む	直說 連續 直說 直說 連續 直說
り	て たり つ つゝ けり けむ なむ にけり	連續 直說 直說 直說 連續 直說 直說 直說 直說
る	らむ らし べし めり	直說 直說 直說 直說
る	かな より から まで のみ ばかり	直說 標準 標準 標準 量限 量限
れ	ば ど ども かし	附說 附說 附說 命令

段	格	活用	語尾	種類
一段			ましなむば	直説
			ぬきそかしやとと	直説
			とはとも	附説
			まじなよなり	直説
	禁制		なな	禁制直説
	疑問		なよまじ	疑問直説
	連續		なよなり	連續附説
	附説		なよまじ	附説
四段	五階轉用	他動	げばじず	直説
		押	めばむら	直説
		立	じざり	直説
		逢	ばむら	直説
		有	ばじず	直説
	四行	降	ばむら	直説
		住	ばじず	直説
		有	ばじず	直説
	一段	降	ばむら	直説
		住	ばじず	直説
		有	ばじず	直説
	連續		てりたつけつけりけむ	連續説
			てりたつけつけりけむ	連續説
			てりたつけつけりけむ	連續説
	直説		てりたつけつけりけむ	直説
			てりたつけつけりけむ	直説
			てりたつけつけりけむ	直説
	疑問		らむらしべし	疑問直説
	連續		らむらしべし	連續説
	附説		らむらしべし	附説
	連續		らむらしべし	連續説
	附説		らむらしべし	附説
	連續		らむらしべし	連續説
	附説		らむらしべし	附説
	連續		らむらしべし	連續説
	附説		らむらしべし	附説
	連續		らむらしべし	連續説
	附説		らむらしべし	附説
形容詞		有降	じざり	直説
		有淺	じざず	直説
	連續		てつけりけむ	連續説
	直説		てつけりけむ	直説
			てつけりけむ	直説

段	格	活用	語尾	種類
一段			らてむましばなむ	連續説
			りきやとともはとも	直説
			めなむなめ	直説
			るまじかしやなとともはとも	直説
			るまじかしやなとともはとも	疑問直説
			るまじかしやなとともはとも	連續説
			るまじかしやなとともはとも	附説
	直説		るのみばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
			るのみばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
			るのみばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
	標準		るのみばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
			るのみばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
			るのみばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
	含蓄		るのみばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
			るのみばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
			るのみばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
	量限		れかしやなよなとも	命令
			れかしやなよなとも	命令
			れかしやなよなとも	命令
	含蓄		れかしやなよなとも	命令
			れかしやなよなとも	命令
			れかしやなよなとも	命令
	量限		れかしやなよなとも	附説
			れかしやなよなとも	附説
			れかしやなよなとも	附説
	直説		ばども	附説
			ばども	附説
			ばども	附説
	標準		ばども	附説
			ばども	附説
			ばども	附説
	直説		ばども	附説
			ばども	附説
			ばども	附説
四段	五階轉用	他動	げばじず	直説
		押	めばむら	直説
		立	じざり	直説
		逢	ばむら	直説
		有	ばじず	直説
	四行	降	ばむら	直説
		住	ばじず	直説
		有	ばじず	直説
	一段	降	ばむら	直説
		住	ばじず	直説
		有	ばじず	直説
形容詞		有淺	じざず	直説
		有降	じざり	直説
	連續		てつけりけむ	連續説
	直説		てつけりけむ	直説
			てつけりけむ	直説

段	格	活用	語尾	種類
一段		有戀	らてむましばなむ	連續説
			りきやとともはとも	直説
			めなむなめ	直説
			るまじかしやなとともはとも	直説
			るまじかしやなとともはとも	疑問直説
			るまじかしやなとともはとも	連續説
			るまじかしやなとともはとも	附説
	直説		るのみばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
			るのみばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
			るのみばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
	標準		るのみばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
			るのみばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
			るのみばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
	量限		れかしやなよなとも	命令
			れかしやなよなとも	命令
			れかしやなよなとも	命令
	含蓄		れかしやなよなとも	命令
			れかしやなよなとも	命令
			れかしやなよなとも	命令
	量限		れかしやなよなとも	附説
			れかしやなよなとも	附説
			れかしやなよなとも	附説
	直説		ばども	附説
			ばども	附説
			ばども	附説
	標準		ばども	附説
			ばども	附説
			ばども	附説
	直説		ばども	附説
			ばども	附説
			ばども	附説
形容詞		有戀	しくば	附説
			しくして	連續
			しくして	連續
			しくしかしやなとともはとも	直説
			しくしかしやなとともはとも	疑問直説
			しくしかしやなとともはとも	連續説
			しくしかしやなとともはとも	附説
	直説		しくばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
			しくばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
			しくばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
	標準		しくばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
			しくばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
			しくばかりだにすらさへなりごとしかなより	直説
	量限		しけれど	附説
			しけれど	附説
			しけれど	附説

容詞		
名詞の助詞 臣覽	たらむ ばば	直說附說
動詞一階の助詞	ずば	附說
	さらむ ばば	直說附說
	しかば	附說
	ずして	連續附說
	と	連續
	ども	附說
	ず	連續
	たりけむ きけり	直說
	せりけむ きけり	直說
	ざりけむ きけり	直說
	む	直說
	ましし	「な」「る」「さ」「や」「よ」
	ぬ	直說
	たる なり かな	直說
	せる なり かな	直說
	ざる なり かな	直說
	む	直說
	まし	直說
	だにすらさへなりごとし	直說
	たれど ども	附說
	せれど ども	附說
	ざれど ども	附說
	ねど ども	附說
	め ども	附說
	ましか	附說
	ども	附說

動詞二階の助詞	たらむ ばば	直說附說
	なば	附說
	つゝ	
	たりけむ きけり	直說
	つ	
	つゝ	
	つらむ	
	けり	
	けむ	
	なむ	
	にけり	
	にけむ	
	にき	
	たる なり かな	直說
	つる なり かな	直說
	つらむ	
	ける	
	けむ	
	なむ	
	にける なり かな	直說
	にけむ	
	にし なり かな	直說
	たれど ども	附說
	つれど ども	附說
	つらめど ども	附說
	けれど ども	附說
	けめど ども	附說
	なめど ども	附說
	にけれど ども	附說
	にけめど ども	附說
	にしかど ども	附說

動詞	動詞の階三		
	助詞		
	せば 附說		
	べくば 附說	べく	
	まじくば 附說	まじく	
	ぬ	ぬ	
	ぬらむ	ぬ	
	き	き	
	らむ	らむ	
	らし	らし	
	べし	べし	
	めり	める	
	まじ	まじき	
	なり	なる	
	ぬるかななり 直說	ぬる	ぬれども 附說
	ぬらむかななり	ぬらむ	ぬらめども 附說
	しかななり 直說	し	しかども 附說
	らめども 附說	らめ	らめども 附說
	らし	らし	
	べけれども 附說	べき	べけれども 附說
	めれども 附說	める	めれども 附說
	まじけれども 附說	まじき	まじけれども 附說
	なれども 附說	なる	なれども 附說

四階の助詞		
	ならむば 直說附說	
	ごとく	
	なりけり なりけむ なりき 直說	
	ごとし	
	なるかななり 直說	
	ごとき	
	なれども 附說	

第九章　品詞分解

「やまと歌」は人の心を種として萬の言の葉とぞなれり、

「やまと歌」は（主）　連續（名・助・動）

「人の」（中）　「こゝろを」（賓）　連續（名・接・名・係）

「種と」（賓をわきまふる詞）　「し」（主をわきまふる詞）

「よろづの」（中）　「言の葉と」（中）　「ぞ」（係）　「なれり」（動）　連續（名・接・名・助・係・動）　直說

「て」（助）　「けり」（助）　直說法

此の一文章は重き

此の文章は、「やまと歌はよろづの言の葉とぞ」とあるが主なり、「人の心を」は賓なり、主賓の餘は、或は主に從ひ、或は賓に從ひて、辨ふる詞となる、されば、「種として」は、賓に從ひて辨ふる詞となり、「なれりける」は、主に從ひて辨ふる詞となるなり、以下皆此のこゝろ得にて見るべし、

「世の」（賓）　「中に」（中）　「ある」（主）　「人」（名）　「こと」（主）　「わざ」（主をわきまふる詞）　「しげき」（形）

「もの」（賓）　「なれ」（動）　「ば」（附說）　「心に」（賓）　「おもふ」（動）　「こと」（賓）　「を」（賓）　「見る」（賓）　「もの」（賓）　「きく」（賓）　「もの」（賓）　「に」（賓）　「つけ」（賓）　「て」（賓）　「いひ」（賓）　「いだせる」（賓をわきまふる詞）　「なり」（動）　直說

これも直說法にて結べり、

「ある人は」（係詞）と云ふ意なれば、「ある人」は主なり、何所にあるぞといはば、世の中に活きてある人と云

ふにて、「世の中」は賓なり、「ことわざの」と云ふ意なれば、「ことわざ」は主なり、此の餘は推して知るべし、古文の作例は、かくのごとくなれど、方今は、主賓の標準となるべき係詞を略して書かむことたやすからず、是によりて係詞を略せぬ作例を示す、

「世」名 「の」接 「中」名 「に」係 「ある」動 「人」名 「は」係 「ことわざ」名 「の」係
賓 主

「しげき」動 「もの」名 「なれ」助 「ば」助
主をわきまふる詞

附說

此の例によりて文を習ふべし、

直說 年號何月何日の郵便にて。云ふ一兩日の中に羅紗の直段の上るべき見こみがたしかにつきたり一字も早く

賓 主 賓 主 主 主 主

命 副

主をわきまふる詞 主 主をわきまふる詞

某がと名あるべし

命 買とるべし金子は爲替手形にて明朝までにおくること

主 賓 賓 主 主をわきまふる詞

連綴 標準 直說

と相違なし

名あてあるべし

小文典は、大文典の鈔錄なれば、十のうち五つを盡せり、然れども、常に用ゐるところは、大よそ足らぬ事あらじ、これを知り得れば、中等の語學成なれりとす、

第十章　結論

○我國の人は、生れながらに普通の詞を知りて用ゐるゆゑに、更に語學をせずとも事足れりと思へり、方今の世に生れ出でたる人さやうなる不學にては、開明なる外國の上にいかにして立つを得む、外國の人は、皆己が國の詞の規則を知る、我が國の人は、詞の意は知れりとも、用ゐる規則を知らざれば、人々異にして、歸るところなし、たとへば、的なくして弓を射るがごとし、いつの時にいたりてか、世に耻ぢざる詞づかひをなし得む、詞は古今のたがひあるものなれば、方今の俗言と云ふともそれを用ゐるを耻とはすべからず、用ゐる規則を知らぬを耻とす、用ゐる規則を知らしめむには、文典をつくりて的とせずてはあるべからず、文典をつくるは、此のゆゑなり、

明治五年十月晦日　　黑川　眞頼

日本文典初步

緒言

文典をまなぶことは、むつかしきことのやうにいへど、然らず、世の人の常にいふ詞、おほくは文典にかなへり、然れども、文典をまなばざれば、詞の規則をしらず、西洋の國々は、その國々にしたがひて文典あり、今の世の學者、西洋の學問をし、西洋の文典をまなびて、皇國の文典をも、强ひて西洋の文典にならひて作らむとするは、むつかしくして益なし、西洋といへども、國によりて詞おの〳〵異なり、皇國は、皇國の詞の規則あり、まなびてその規則を知るべし、しらずばあるべからざるなり、

第一章　音

我が國の人の音、五十あり、これを五十音といふ、この五十音のうちに濁る音二十あり、半濁る音五つあり、また「ん」といふ音あり、「む」の轉じたるなり、「ゃ」といふ音あり「つ」の促れるなり、この七十七のこゑをさまざまにいひつらぬれば、數多の詞となる、その詞を以て文章をつづりて、數多の用をなす、然るゆゑに、文典のはじめに、まづ、音を敎ふ、

五十音圖

	所觸音					所生音	原聲
		喉內	舌內	唇內	舌齒	唇牙	
		あ	い	う	え	お	喉內聲
奧齒所觸		か	き	く	け	こ	喉內聲
前齒所觸		さ	し	す	せ	そ	舌本聲
斷所觸		た	ち	つ	て	と	舌中聲
		な	に	ぬ	ね	の	舌末聲

	は	輕唇聲
	ひ	
	ふ	
	へ	
	ほ	
	ま	重唇聲
	み	
	む	
	め	
	も	
「イ」よりおこる	や	喉舌聲
	い	
	ゆ	
	え	
	よ	
	ら	彈舌聲
	り	
	る	
	れ	
	ろ	
「ウ」よりおこる	わ	喉唇聲
	ゐ	
	う	
	ゑ	
	を	

濁音

所觸音	所生音	原聲
奥齒にかゝるゝ	が	喉內聲
	ぎ	
	ぐ	
	げ	
	ご	
前齒にかゝるゝ	ざ	舌本聲
	じ	
	ず	
	ぜ	
	ぞ	
斷所觸	だ	舌中聲
	ぢ	
	づ	
	で	
	ど	
	ば	重唇聲
	び	
	ぶ	
	べ	
	ぼ	

半濁音

所觸音	所生音	原聲
	ぱ	强唇聲
	ぴ	
	ぷ	
	ぺ	
	ぽ	

撥音

所觸音	所生音	原聲
	ん	鼻聲

促音

所觸音	所生音	原聲
斷所觸	っ	舌中聲

第二章　詞

我が國の詞は、原よりの詞あり、字音詞あり、原よりのと字音とうち合ひたる詞あり、やまといへば、原よりの詞なり、山（サン）といへば字音詞なり、ふじ山といへば原よりのと字音とうち合ひたる詞なり、されど、今はいづれも我が國の詞として、部分（ブブン）をして敎ふ、

詞は、もと三品にして、それがわかれて九品となりて、さまざまの用をなすものなり、さまざまの用をなすことは、九品うちあはねばなさず、されど、そのもとは三品なれば、この三品をよく心得れば、それがうちあひ或はわかれて九品となることも悟らるゝな

り、三品とは、名詞動詞助詞なり、

第三章　名詞

名詞は、物や事の名なり、

物の名とは馬犬鳥車の類にて、嘶く物の名は馬なり、吠ゆる物の名は犬なり、囀づる物の名は鳥なり、運轉（ウンテン）する物の名は車なり、おの〳〵その物の名なれば「名詞」といふ、事の名とは、忠義孝行の類にて、臣のする事の名は忠義なり、子のする事の名は孝行なり、おのおのその事の名なれば「名詞」といふ、

名詞に、固有名詞普通名詞の二種あり、固有はそのものに限れる名なり、普通はあまねくかよふ名なり、日本國（ニッポンコク）といへば固有なり、國といへば普通なり、刀禰川（トネガワ）といへば固有なり、川（カワ）といへば普通なり、義經（ヨシツネ）といへば固有なり、伊豫守といへば普通なり、

第四章　數量詞

數量詞は名詞よりいでたる詞にて、物の多さ大さ、長さ、廣さ、高さ、遠さなどをかぞへはかる詞なり、この數量詞に二種あり、一つは廣く物をかぞふる詞を、總じての數量詞といひ、一つは物によりて用ゐるを、別の數量詞といふ、

總じて量に、悉數、大數、小數あり「悉數」とは、一二三四五六七八九なり「大數」とは、十百千萬億なり、「小數」とは、分釐毛なり、

別の數量詞とは、日をかぞふる詞、一日二日三日、金をかぞふる詞、一釐一錢一圓、銀をかぞふる詞一毫一釐一分一匁一貫目、布帛をかぞふる詞、一端一匹、布帛の長をはかる詞、一釐一分一寸一尺一丈、地をはかる詞、一尺一間一町一里、田畠をはかる詞、一歩一畝一段一町、量（カサ）をはかる詞、一撮一勺一合一升一斗一斛、重（オモ）さをはかる詞、一毫一釐一分一匁一貫匁、時をはかる詞、一秒一分一時、天地をはかる詞一秒一分一度なり、

第五章　代名詞

代名詞は、名詞よりいでて、萬の物の名にかへて用ゐる詞なり、「楠正成は忠臣なり」「足利尊氏は逆臣なり」「といふことのかはりに「彼（カレ）は忠臣なり」「此（コレ）は逆臣なり」といひて、名詞のかはりに用ゐるゆゑに彼（カレ）や此（コレ）は代名詞なり、また、犬の吠ゆるを「それが吠ゆる」といへば、犬のかはりに用ゐる「それ」といふ詞は代名詞なり、また、童の學校へゆくを「あれは學校へゆく」

といへば、童の名のかはりに用ゐる「あれ」といふ詞は代名詞なり、また、吉兵衛といふものありて、みづから我が名をいひて「吉兵衛は横濱へゆく」といふべきを「我は横濱へゆく」といへば「我」といふ詞は我が名のかはりに用ゐるゆゑに代名詞なり、また、「吉兵衛久兵衛文助は横濱へゆく」といふべきを「我ら横濱へゆく」といへば「我ら」といふ詞を、たの〳〵の名のかはりに用ゐるゆゑに、代名詞なり、

第六章　形容詞

形容詞は、名詞よりいでて、名詞の形容をあらはす詞なり、「甘き菓子」、「酸き蜜柑」、「白き膚」、「黒き髪」といへば、菓子や蜜柑や膚や髪の形容をあらはしたるなり、また、「高き山」、「淺き水」といへば、山や水の形容をあらはしたるなり、

第七章　動詞

動詞は、よろづのもの〻作用（ワザ）と形狀（アリサマ）とをあらはす詞なり、「君はこゝにまします」、「臣は馬にのる」といへば、まします、といふ詞は、君の形狀をあらはし、のるといふ詞は、臣のわざをあらはすなり、

動詞は、おほく作用をあらはすなり、「見る」は目のわざ、「聞く」は耳のわざ、「嗅ぐ」は鼻のわざ、「いふ」は口のわざ、「採る」は手のわざ、「行く」は足のわざなり、動詞に、有對無對の二種あり、「有對動詞」とは相對するものありておこる、「無對動詞」は獨立におこる詞なり、「見る」、「聞く」などは有對動詞、「おくる」、「ねむる」などは無對動詞なり、

第八章　助詞

助詞は、一切の詞を受けて、その意を助くる詞なり、この詞に三つの種類あり、一つは法の本となり、格をあらはす助詞、これを係詞といふ、二つには法の末となりて語意を終らしむる助詞、これを結詞といふ、三つには語意をつづくる助詞なり、

法の本となりて格を顯はす助詞とは、我は、我も、人が、人の、人に、人を、是こそなどの、はもがのにをこそなり、この中にはもがのこそは、主格なり、にをは、賓格なり、主格は、主たるものをあらはすなり、賓格は主にむかへるものをあらはす、「義家は法の本貞任を追ふ法の結末」といへば、義家は主なり、貞任は賓なり、「楠正成が計策は法の本人の目を法の本おどろかす法の結末」といへば、計策は主なり、人の目は賓なり、

また、主にあらず賓にあらざる「が」、「の」あり、これを中格といふ、「鷲の羽」、「梅が枝」、「人の目」、「鳥の足」などの「が」、「の」なり、

法の結末となりて語意を終へしむる助詞とは、「ず」、「む」、「畢りぬ」、「べし」、「なり」、「たり」、「まじ」、「や」、「か」、「侍る」、「候」、「御座候」、「よ」、「べし」の類なり、「花法の本無き格さかず法の結末」といへば、さかざることをあらはして語意を終へしむるなり、「如斯に法の本御座候法の結末」といへば、かくのごとくなることをあらはして語意を終へしむるなり、

語意をつづくる助詞とは、

ばて　ば　ど　ども
ながら　へ　より　から
まで　の　み　ばかり　と
とも　と　は

などの類なり、

第九章　副詞

副詞は名詞よりいでたり、この詞は、動詞形容詞また他の副詞の上にそはりて、その形狀をあらはす詞なり、「水さよらにながる」、「火すみやかにもゆ」といへばさよらにすみやかには、動詞にそはりてその形狀をあらはすなり、「水はなはだきよし」、「風なか〳〵さむし」といへば、はなはだなか〳〵は形容詞にそはりて、その形狀をあらはすなり、「はなはだすみやかに」、「はなはだのどかに」といへば、他の副詞にそはりてその狀をあらはすなり、

副詞の常におほくつかふは、

は　や　み　な　や　がて
すべて　はなはだ　早　速
おのづから　なか〳〵　やう〳〵
とかく　つひに　ひたすらに
偏に　ともに　更に
速に　のどかに　さやうに
かやうに　さきに　すでに
もし　いまだ　おほく
おほよそ　おほむね　大概に
多分に　大凡に　大抵に
大略に　何卒

などの類なり、

第十章　接續詞

接續詞は、名詞動詞助詞よりいでたり、この詞は、上の意を下へつづくるを旨とす、

接續詞の常におほくつかふは、

さ　て　な　ほ　ま　た
は　た　ただし　け　だし
すなはち　そも〳〵　しかして
しかしながら　さりながら　さ　ら　ば
さ　れ　ば　さ　れ　ど　さ　れ　ど　も
か丶れ　ば　し　か　ら　ば　し　か　れ　ば
し　か　れ　ど　も

の類なり、音信の書翰などに、一とほり時候の事をいひ終へて、さて此の度の要用はかやうかやうといひつづくるために、「さて」といひ「かくて」といひ「しかれば」といふは、皆上の意を下へつづくるためなり、

第十一章　嗟歎詞

嗟歎詞は、名詞よりいでたり、よろこび、いかり、たのしみ、かなしみ、なにごとにつけても、長く息づきていはる丶詞なり、それは、「あ丶」「あら」「え丶」などの類にて、「彼が志はうれし」といふを「あ丶」といふ詞をうちいれて、「彼が志はあ丶うれし」といひ、「今日の競馬はおもしろや」といふを「あら」といふ詞をうちいれて、「今日の競馬はあらおもしろや」といひ、「彼の謠曲は忌はし」といふを「え丶」といふ詞をうちいれて、「彼の謠曲はえ丶忌はし」といふ類なり、

第三章より第十一章までは、詞の九品を敎へたり、これよりは、文法を敎ふべし、されど、こと長ければこの卷はこゝに筆をとどむ、

○わが國の文典は、文法を九品詞の後に示す、西洋各國の文典は文法を動詞につけて示す、われとかれとおのづから異なり、こゝろうべし、

明治六年五月十五日

日本文章法初步

第一章　文法大意

文法とは、文章の法なり、文章の法とて別にあるにはあらず、人の常にかきづづる文章に、ことごとく法はそなはれり、そなはらざれば文章きこえず、されど、文法を習ひ知れば、文章をかくに骨をることなくして、他の人によくきこゆるなれば、ならはずばあるべからざるなり、

皇國の文章は、詞を省きてその意をふくむること常におほし、それをこゝろえざれば文法はさとりがたし、されど、不思議なることは、文法をしらぬ人のかく文章も詞を省きてかきて、そのはぶける詞のこゝろは、文章にそなはれり、さるゆゑに、今、文法ををしふるにつきて、ここは詞をはぶけりとをしへなば、まことにしかりとその意を會得せざらむや、

文章のうへにあらはれぬ詞をよくしれば、文章をかくにまどはず、これを文法を習ふにつきて第一の要とす、

文法は、十法あり、されど、旨とする法は、四法にして、その餘の六法は、四法に附屬せる法なり、

第一　直說法
第二　命令法
第三　疑問法
第四　禁制法
第五　附說法
第六　連續法
第七　標準法
第八　量限法
第九　含蓄法
第十　成就法

文法を習ふにつきては、文章に二種あることをもわきまふべし、一種にしるしおく文章なり、一種は他におくる文章なり、しるしおく文章は幼童のためには急務にあらねばまづ他におくる文章を敎ふ、

他におくる文章のうへに、旨と用ゐる法は、直說、疑問、附說、連續、標準の五法なり、ただし、うるはしく文章をかゝむには、十法ともに用ゐれども、普通の文章には、五法にて大かた事足れば、まづこの五法を敎ふ、

第二章　直說法

直說法は、ただひとすぢにのぶ法なるなり、

普通文

改年之御吉慶奉申上候

普通假名文

としのはじめのおんよろ

こび「ヲ」「某が」まうしあ
げたてまつり「候」
ふみにまうしごと「ヲ」
「某が」つかまつり「候」
ふみにて「某が」まうしあ
げたてまつり「候」
つかひにて「某が」とあり
へずまうしあげ「候」

以書札奉申上候

以使不取敢申上候

一筆啓上仕候

以郵便逓送仕候

歳末之御祝儀奉申上候

貴札之趣拝承仕候

貴命之趣承諾仕候

連

いうびんにてつうだつ
「ヲ」「某が」つかまつり「候」
とし のくれのおんよろこ
び「ヲ」「某が」まうしあげ
たてまつり「候」

おんふみのおもむき「ヲ」
「某が」うけたまはり「候」
おほせのおもむき「ヲ」

華墨拜誦仕候

○

先以正二位様御無事に御
超歳被成候御事恐悦至極
に奉存候

先以御一統様御揃被成御
機嫌克被為入候條奉恐賀
候

先以御客位御安寧之條大
慶に奉存候

「某が」うけたまはり「候」
おんふみ「ヲ」「某が」うけ
たまはり「候」

まづ正二位さまおんかは
りなくとしをこえさせら
れしおんこと「ヲ」うへも
なきよろこび「に」「某が」
ぞんじたてまつり「候」

まづみな〳〵さまおんそ
ろひなされごきげんよく
いらせられ候おんこと
「ヲ」「某が」いはひたてま
つり「候」

まづみな〳〵さまおんさ
はりなきおんこと「ヲ」う
へもなきよろこび「に」

「某が」ぞんじたてまつり
「候」
先以御家内様御無事之由
まづみな〳〵さまおんか
珍重之至に奉存候
はりなきおんこと「ヲ」
うへもなきうれしさ「に」
「某が」ぞんじたてまつり
「候」
次に當方無異に越年仕候
つぎにこなたにもかはる
御安意可被下候
ことなく〳〵としをこえ候
「ヲ」「其方モ」おんこゝろ
やすくおぼしめしくださ
るべく「候」
次に小生無事に罷在候御
つぎにおのれもかはるこ
安意可被下候
となくまかりあり候「ヲ」
「君モ」おんこゝろやすく
おぼしめしくださるべく

「候」
○
今日は快晴に御座候
けふ「ハ」そらほれでさい
わよきごと「に」ござ
「候」
此節は徒然に而御座候
そのころ「ハ」「某ハ」つれ
づれにてござ「候」
只今は多忙に御座候
だいまは「ハ」「某ハ」はな
はだいそがしくござ「候」
昨今は閑暇に御座候
きのふけふ「ハ」「某ハ」い
とまあき「に」ござ「候」
今日之風雨恐入候
けふのあめかぜ「ハ」「某
ハ」おそれいり「候」
晩景御伺可申上候
ゆふかた「ハ」「某が」おん
うかがひまうしあぐべく
「候」
明日は推参可致候
あす「ハ」「某が」すゐさん

御入來之儀奉待上候（ヲ）

「ヲ」いたすべく「候」

おんたちいり「ヲ」本「某が」本

まちあげたてまつり「候」

御光來之段奉待入候（ヲ）

おんたちいり「ヲ」本「某が」本

まちいりたてまつり「候」本

○

麁茶差上度奉存候（ナリ）

附說

よからぬちやなれども

「君ニ」本さしあげたくぞん

じたてまり「候」本

御酒一獻御勸申度候（ヲ）

おんさけいつこん「ヲ」

「君ニ」おんすゝめまうし

たく「候」

此儀奉願候（ヲ）

このこと「ヲ」本「某が」本あつ

くねがひたてまつり「候」本

此條偏に奉願上候（ヲ）

このこと「ヲ」本「某が」ひと

へにねがひあげたてまつ

り「候」

此儀何卒奉頼上候（ヲ）

このこと「ヲ」本「某が」本いか

にもたのみあげたてまつ

り「候」

此條御傳聲可被下候（ヲ）

このこと「ヲ」本「君が」本おん

つたへくださるべく「候」

此儀宜敷御諷聽可被下候（ヲ）

このこと「ヲ」本「君が」本よろ

しくごふいちやうくださ

るべく「候」

左樣致度候（ニ）

さやう「ニ」本「某ハ」本いたし

たく「候」

扇一筥呈上仕候（ヲ）

○

あふぎひとはこ「ヲ」本「君

に」本ていじやうつかまつ

り「候」

見本之羅紗差送申候（ヲ）

みほんのらしや「ヲ」「某

が」「さしおくりまうし」「候」

御收納可被下候

○

おんをさめくださるべく

御受取可被下候	「候」
	おんうけとりくださるべく「候」
	猶期參會之時(ヲ)候	あげべく「候」
	なほおんめにかゝらんとき「ヲ」まち「候」
(ヲ)此品御受取可被下候	このしな「ヲ」おんうけとりくださるべく「候」
	餘は拜眉之時(ニ)可申述候	のこりのこと「ハ」おんめにかゝらんとき「ニ」「某が」まうしのぶべく「候」
(ニ)○拜謁之時萬々御祝詞(ヲ)可申上候	おんめにかゝらんとき「ニ」さまざまのおんいはひごとを「ヲ」「某が」まうし	
	(○ガ)恐惶謹言	「某が」かしこまりて「まうす」

(○ガ)恐々謹言	「某が」かしこまりて「まうす」
頓首	かしこ「や」
(○ガ)敬白	「某が」つゝしみて「まうす」
(○ガ)再拜稽首	「某が」つゝしみつゝしみも「まうす」

第三章　疑問法

疑問法はうたがひとふ法なり、

普通文	普通假名文
(○ハ)御疑念御座候哉	「君ハ」御うたがひのこゝろ「が」ござ候「や」
明日は御發足に相成候哉	あす「ハ」「君ハ」おんたびだち「に」なり候「や」
差引不相濟候哉	さしひき「が」すまず候「や」
(○ハ)如何に御座候哉	「君ハ」いかが「に」ござ候「や」

御子様方は御機嫌克く候歟

（ハ）直段何程に候歟

（○ニ）未御治定無御座候歟

第四章　附説法

附説法は直説法につけてとく法なり、つけてとくと

普通假名文

「や」本

おんこさまがた「ハ」本ごきげんよく候「か」本

あたひ「ハ」本なにほど「に」

候「か」本

「君ハ」本いまだおんさだめ

「が」本ござなく候「か」本

は「このごろ」「ハ」直雨ふりがち説にござ法「候」「しかれば」云々とつけてとくをいふなり、

普通文

左様に候へば

左候はば

右様に候へば

然ば

候へば（候得ばと書くはわろし）

候へども

乍併

乍去

但

第五章　連續法

連續法はつづくる法なり、「今日は隅田川之花見思立候」とあるを「今日は隅田川之花見思立候而」云々

普通假名文

さやうに候へば

さ候はば

みぎのやうに候へば

しかれば

候へば

候へども

しかしながら

さりながら

ただし

直説法

とつづくる類なり、

普通文

而

間

付

與

○

就而

依之

依而

隨而

普通假名文

て

ゆゑ

ついて

と

ついて

これによりて

これによりて

これによりて

第六章　標準法

標準法はめあてをあらはす法なり、いさゝか示さば、「横濱へ」「東京より」「問屋まで」の類なり、

普通文

普通假名文

へ（えと書くはわろし）

より

迄

へ

より

まで

第七章　附屬法大意

附説連續標準は、上文にもいへるがごとく、直説疑問の法のうちにある法なれば、文章のうへにては、直説につき或は疑問につくなり、

普通文

今日は隅田川之花見思立（ヲ）候而一兩輩誘引致候

普通假名文

けふ「ハ」本「某が」本すみだがはのはなみおもひたち

連續

候てひとりふたり「ヲ」本さ

御閑暇に候はば如何に候（ヽモ）
哉

但船に而木母寺迄と心掛（ヽハ）
候

そひたて「候」（本）（直説法）
おんいとまあきに候はば（附説）
「君モ」（本）いかがに候「や」（本）（疑問法）
たゞしふねにてもくぼじ（附説 連積 標）
まてど（準 連積）「某ハ」（本）こゝろがけ
「候」（直説法）

〔注意〕附説連積標準などの法は直説疑問などの

のうちにつきてあること
とかくのごとし、

第八章　連文法

改年之御吉慶奉申上候（ヲ。ガ）（直説）
先以御家内様御無事に御
超歳被成候條大慶に奉存（ヲ）（ヽガ）
候（直説）隨而扇一宮進上仕候（ヲ。ニ）
猶得拜眉之時萬々御祝（直説）
詞可申述候（直説）恐々謹言（ヽガ）

としのはじめのおんよろ
こび「ヲ」（本）「某か」（本）まうしあ
げたてまつり「候」（本）（直説）まづ
みな〳〵さまおんかはり
なくとしをこえさせられ
じおこと「ヲ」（本）うへもなき

直説

よろこび「に」（本）「某か」（本）ぞん
じたてまつり「候」（本）（直説）これ
によりてあふぎひとはこ（連積）
「ヲ」（本）たてまつり「候」（本）（直説）な
ほおんめにかゝらんとき
「ニ」（本）さまざまのおんいは
ひごと「ヲ」（本）「某か」（本）まうし
のぶべく「候」（本）（直説）「某か」（本）（連）が

讀
しこまりで「まうす」（本）（直説）

他につかはす文章は、一月より十二月までの體あり、そのほか商業に用ゐる體、さまざまの體あり、また、願書證文請取書も、他につかはす文章につきたるものなれば、これらをもあはせて次の卷に敎ふべし、

明治六年五月廿一日

詞の栞打聽序

今の世に、歌よむ人はふみをよまず、書讀む人は、歌をよまず、ふるきをたづぬる人は、あたらしきをしらず、新しきを知る人は、古きを溫ねず、これにくはしきはかれにおろそかに、えたるところ得ぬところ、たがひにありて、かたよりなづめるがおほかりけり、ここに、歌もよみ、書も讀み、古きを溫ねて新しきを知り、これをもかれをもひろく學び、くはしく考へ、かたよらずなづまずして、ただしくおだやかならむす

ぢをえらびとらるゝは、ひとりわが黒川眞頼大人になむありける、それが中にも、ことに言葉の學びに心をつくされたるは、御國のものまなびせむには、まづふるきこと葉のこゝろを得ずではよろづことゆかぬわざなればなるべし、大人さきに初學びのために、詞の栞といふ書をなむあらはされたりける、さるは、詞の八衢とてにをは紐鏡とを一つにとりつかね、また辭の玉の緒にいへりしことどもをも考へ合せて、十四種のはたらき、受くるてにをは、指辭の輕重、總てを一目に見わたして、さとり易くものせられたるのみならず、かの三つのふみどもの中にも、あやまれるをあらため、たらざるをおぎなひたれば、このしをりをだに見たらむには、言葉の道すぢをどふかたなむなかりける、しかはあれど、僅かにひとひらの紙にとりつゞめものせるふみなれば、うち見たるうはべのみ大かたにはこゝろうれどこまやかなるゆゑよし、くはしくさとりえがたきふしもあればとて、わがともがら、大人にこひて、その講釋をきゝし時、鈴木弘恭ぬしの、まめやかに筆とりて、しるしとどめられたるぞこの打聽にはありける、そも〳〵、紐鏡玉の緒八衢の世にあらはれしより後、さるかたの書共あまたいでき、たれど、いづれのふみも、なほ疑ひはうたがひをつたへて、あきらかならざりけるを、この打聽を見れば、せんだちの人々のおもひいたらざりしくまぐまで、とゝろのゆかぬかたなく、くもり日のはれわたりたるこゝちせられて、今まで世にありとあるくさ〳〵の書どもには、こよなくまさりたりけり、百とせばかりのむかし、天明といひしころ、本居大人の著はされし漢字三音考の序に、小篠敏といへる人のしるせる詞に、後の世の人畏るべしと、孔子ののたまへりしを、わが本居先生におきて、まさにそのまことなることをしれりとはいへりき、おのれ、今また、黒川大人におきても、しかなむいはるゝかし、時は、明治十九年のしはすばかり、三田葆光しるす、

叙

ものに入りやすくしてなりがたきと、入りがたくして成り易きとの二つあり、たとへば、歌よむことは、いり易くしてなりがたきものなり、詞の學びは、入りがたくして成りやすきものなり、わが黒川大人さきに詞の栞といふふみをあらはして、此の道にいりな

詞の栞

ことのそのこちとけまざふ人もあらば　しるべはせよとちりのまとりぞ

黒川眞頼

十四種の活用	將然言	連用言	終止言	連體言	已然言
一の音	二の音	三の音	四の音	五の音
一階の辭	二階の辭	三階の辭	四階の辭	五階の辭
四段 飽押打思住釣				
カ行四段	か	き	く	け
サ行四段	さ	し	す	せ
タ行四段	た	ち	つ	て
ハ行四段	は	ひ	ふ	へ
マ行四段	ま	み	む	め
ラ行四段	ら	り	る	れ
一段 若似千見射居				
カ行一段	き	き	く	け
ナ行一段	に	に	ぬ	ね
ハ行一段	ひ	ひ	ふ	へ
マ行一段	み	み	む	め
ヤ行一段	い	い	ゆ	え
ワ行一段	ゐ	ゐ	ゐる	ゐれ
中二段 起落慰恨老舊				
カ行中二段	き	き	く	け
タ行中二段	ち	ち	つ	て
ハ行中二段	ひ	ひ	ふ	へ
マ行中二段	み	み	む	め
ヤ行中二段	い	い	ゆ	え
ラ行中二段	り	り	る	れ
下二段 得受痩捨兼弁譽				
カ行下二段	え	け	く	け
サ行下二段	せ	せ	す	せ
タ行下二段	て	て	つ	て
ナ行下二段	ね	ね	ぬ	ね
ハ行下二段	へ	へ	ふ	へ
マ行下二段	め	め	む	め
ア行下二段	え	え	う	え
ヤ行下二段	え	え	ゆる	えれ
ラ行下二段	れ	れ	るる	れる
濁音				
四段	ぎ	ぎ	ぐ	げ
一段	ぢ	ぢ	づ	で
中二段	ぢ	ぢ	づ	で
下二段	じ	じ	ずる	ずれ

	シク	シキ	クシキ	ラ四	ラ四	ラ四	ナヘン	サヘン	カヘン	ワ下二 ラ下二 ヤ下二 マ下二 ハ下二	タ下二 ナ下二 サ下二 カ下二 ア下二	ヤ中二 マ中二 ハ中二 ラ中二
	しく	きく	くし	四段の音ニ シク シキ クシキ 悲格 恋有	四段の音五 ク グ ス ヌ ル 鈎格 住有 思有 打有 抑有 能有	良行四段一格 居有	奈変行格 死 往	左行変格 大変 為	加行変格 来	下二段 植 枯 消 磬 弁 兼 捨 痩 受 得		二段 舊 老 恨 恋
	け む	み	み	ら	ら	ら	な	せ	こ	ゑ え け せ て ね へ め ら き ゑ		り ゆ み ひ ち
	て む	て む と そ	て む と そ	む な む ぎ	む な む ぎ	む な む ぎ	む な む ぎ	ぬ な む ぎ ね そ ヨ ち の	ぬ な む ぎ ね そ カ ヤ ヨ ち の シ	む な む ぎ		む な む
				う	り	り	す	し	き	ゑ え け せ て ね へ め ら き ゑ		り ゆ み ひ ち
	ヤ と そ	ハ カ シ タ モ ナ ヤ と そ	ハ カ シ タ モ ナ ヤ と そ	し な む け り つ て	そ し け り つ て	そ し な む け り つ て	そ し け り つ て	し な む け り つ て	し な む け り つ て	そ し な む け り つ て		そ し な む け り つ
		さ	さ	う	り	り	ぬ	き	く	ら る ゆ む ふ ぬ つ も く う		る ゆ む ふ ち
	と	と ヨ ヤ	と ヨ ヤ	ハ カ シ タ と ヤ	ハ カ シ タ と ヤ	ハ カ シ タ と ヤ	ハ カ シ タ と ヤ モ ナ ヨ と	ハ カ シ タ と ヤ モ ナ ヨ と	ハ カ シ タ と ヤ モ ナ ヨ と	ハ カ シ タ ま な む と ど り め ら む と ヤ ヨ と		ハ カ シ タ と ヤ モ ナ ヨ と
		き	き	る	る	る	ぬる	まる	ら	ら る る ら る る ら る る ら る る		ら る る ら る る ら る る ら る る
	と う な	と う な	と う な	と う な と を ま り め ら む	と う な と を ま り ど ら む	と う な と を ま り ど ら む	と う な と を ま り が ど ら む	と う な と を ま り が ど ら む	と う な と を ま り が ど ら む	と う な と を ま り が ど ら む		と う な と を ま り が ど ら む
	け む ど も	れ む ど も	れ む ど も	れ む ど も	れ む ど も	れ む ど も	終 ぬ む ど も ヤ ヨ と	ぬ む ど も	ら む ど も	ど ど で		ど ど で
		れ	れ	れ	れ	れ						
		と ヨ ヤ ナ	と ヨ ヤ ナ	と ヨ ヤ ナ	と ヨ ヤ ナ	と ヨ ヤ ナ						

【注意】

●ハ希求言の印なり

▲ハ用言より指辞へ〜印なり

シクシキ	クシキ	シクシキ	クシキ	ラ四一	ラ四一	ラ四一	
右く し き 一格	く し き 一格	右く し き 一格	く し き 一格	四段 五段 一段 四行 良	四段 の音 の音 ウ行 ラ行 る格	四段 の音 ア行 ラ行 る格	
惡	善	戀 態	深 浅	居 有	住 恩 押 飽 釣 有	悲 戀 深 浅 有	
け み	け み	み	み	ら	ら	う	
け く	け く	く	く	む ぞ な む	む ぞ	む ぞ な む	
け	け	け	け	り	り	う	
て と そ	て と そ	て と そ	て と そ	て け り つ	て け り つ	て け り つ	
て と そ	て と そ	て と そ	て と そ	し な む	そ し	し	
ハ カ モ ナ ヤ タ シ	ハ カ モ ナ ヤ タ シ	ハ カ モ ナ ヤ タ シ	ハ カ モ ナ ヤ タ シ	ハ カ ヤ タ シ	ハ カ ヤ タ シ	ハ カ ヤ タ シ	
け き	け き	け き	け き	り	り	う	
と を ち ま ら む	と を ち ま ら む	と を ち ま ら む	と を ち ま ら む	と を ち ま ら む	と を ち ま ら む	と を ち ま ら む	
け き	け き	け き	け き	る	る	る	
と を ち ま ら む	と を ち ま ら む	と を ち ま ら む	と を ち ま ら む	と を ち ま ら む	と を ち ま ら む	と を ち ま ら む	
け	け	け	け	れ	れ	れ	
で ど ば	で ど ば	で ど ば	で ど ば	で ど ば	で ど ば	で ど ば	
で ど ば	で ど ば	で ど ば	で ど ば	で ど ば	で ど ば	で ど ば	
ヨ ナ カ	ヨ ナ カ	ヨ ナ カ	ヨ ナ カ	ヨ ナ カ	ヨ ナ カ	ヨ ナ カ	
け	け	け	け				
で ど ば	で ど ば	で ど ば	で ど ば				
け	け	け	け				
で ど ば	で ど ば	で ど ば	で ど ば				
け	け	け	け				
で ど ば	で ど ば	で ど ば	で ど ば				

やむ人々を、いとやすらかに導き給へれど、さてしもなほふみまよはざらむために とて、その栞をふたゝびねもごろにをしへ給へるなむ、この説明にはありける、さては、我がともがらのために は、黄金とも玉ともいとたふとき物なるを、たゞさゝに開きすてむは、あたらしとおもへば、おのれうちさく儘に、かたはしよりかいつけつるが、かく一卷とはなりたるなり、そも〳〵、このことは、明治十七年の三月に始めて、同十九年の三月にをはりぬ、是をうちきける人々は、三田葆光、多田親愛、坪井九馬三、辰巳小次郎、塙忠雄、加藤直種、黒川眞道、鶴久子、根岸栖臣、林甕臣に、おのれを加へて、十まり一人なれど、根岸林のふたりは、なかばにてやみにたれば、それに替りて、平田盛胤、酒井喜雄、佐々木古信、細谷松三郎、大久保初雄ぞまた加はりける、大人より〳〵にのたまひけらく、世に歌よむ人の多きは、入りやすければなり、されど申すむねなき歌と、優れたるうたとのすぐなきは、成りがたきがゆゑなるべし、然れども、こはなりがたきにはあらず、詞の學にくはしからねばなり、とのたまひき、此のうちきゝをよく見て、能くさとりえたらむには、世に歌よむ事と詞のまなびとのふた道におきては、入りやすくして成り難きと、入りがたくしてなり易きとのなげきは、をさ〳〵あらざるべし、さては、此の卷こそいよ〳〵たふとければ、黄金とも玉ともめではやさざらめやは、

明治二十三年七月　　鈴木弘恭

詞の栞打聽

第一章　詞の栞の名義

これを詞の栞と名づけたるは、別にふかき意のあるにはあらず、おのれがこのふみをかきをへてよめる歌に、

ことのはの、みちわけまどふ、人もあらば
　　しるべにせよと、しつるしをりぞ

と、さとしおきつるにて、一わたりは心えらるゝことならむ、さてしをりといふことは、山深くわけ入るには、木の枝を折りかけて、道のしるべとすることにて、一度しをりをしておけば、いつもその、をりを目的にして、わけ入らるゝなれば、それになずらへて、かくは名づけたるなり、そも〳〵、いにしへの書をた

どゝ、もの學びせむには、詞の學びをもとゝし、さてよろづのふみをよみとくべきなり、さるを、初學の輩、するにのみ意を用ゐて、解きがたきふし〳〵のあるにやめるは、此の道よりわけいらぬゆゑぞかし、もの學びに心ざさむ人は、まづこのみちよりわけ入らばいかにしげき文の林なりとも、たはやすくわけいらるゝものぞよ、されば、そのおほむねを、つぎ〳〵にさとすべし、

因にいふ、詞に於いて「一の音」「二の音」といふは、五十音の一二の順序を異なり、五十音のうち、第五の音は詞の活用には入らぬ音なれば、(加行變格は例外なり)是を省きて、殘りの四段を詞の活用の階段とはするなり、故に「四段活用」とは、悉く四段に活用するものをいひ、「一段活用」とは、第一の音の一段のみにて活用するものをいひ、「中二段活用」とは上下の二段(即一の音四の音)を省きて中の二段(即二の音三の音)にて活用するものをいひ、「下二段活用」とは、上の二段(即一の音二の音)を省き、下の二段(即三の音四の音)にて活用するものをいふなり、次の圖を見て知るべし、

詞格指掌圖

(あ) (い) (う) (え) (お)

四段 [下二段] か

四段 [中二段] き く

[下二段] け

(こ變格)

四段 [下二段] さ し す せ(變格)(そ)

四段 [中二段] た ち つ

[下二段] て (と)

四段 [下段] な に ぬ ね(變格)(の)

四段 [中二段] は ひ ふ

[下二段] へ (ほ)

[中三段] ま み む

[下二段] め (も)

[中二段] や い ゆ え (よ)

四段 [下二段]

[中二段] ら り る れ (ろ)

[下二段]

(わ) ゐ う ゑ (を)

[下二段]

注意 (　)内の字は、すべて十四種の活用に係はらぬ音と知るべし、

第二章　十四種活用

作用言形狀言の名目は、既に先達の名付けて、さてその活用を十種に定めおきたるを、今十四種とせしは、おのれが定めつるなり、そはいかにといふに、十種にては、ことたらねばなり、まづ十種とは、人の家にたとへれば、四段活用一軒、一段活用一軒、中二段活用一軒、下二段活用一軒ありて、以上四軒なり、外に三樓格といふ分家のごときもの三軒あり、(加行、左行、奈行なり、又良行四段一格といふ活用あり、(詞の八衢良行四段の條にいはく、右に擧げたる詞の中に有居の二ついさゝか異なり、云々、又義門法師も和語說略圖に有の一格をおきたり、)此の一軒は、作用言なれど、用ゐやうに因りては、形狀言となるなり、故に此の良行の四段一格の一軒は作用言と形狀言との間に置きたり、以上八軒を作用言といふ、

次にくし、さ活用一軒、しく、し、しき活用一軒あり、これを形狀言といふ、この二軒を、上の八軒に合せて、都合十軒となる、これを十種活用といふ、これ、先達の定め置きたる區別なり、さてもとは、右十種なるを、十四種に增したるゆゑは、良行四段一格といふものは、前の一軒のみにては、いまだことたらぬが故に、更に一軒をたてたり、これは、四段活用の第五の音よりうつる格にて、他けらひ、押せらひなどいふ類なり、(前の良行四段一格には、二階になむと受くる助辭なし、)

又くし、さ、しく、し、しき二軒より移る一格ありて、上二種の良行四段一格と異なり、そはからかりかる、かれと活く詞にて、淺かり、戀しかりの類なり、(前の良行四段一格には、二階にそと受くる助辭あれども、此の所にはそと受くる助辭なし、)因りて、これも別に一軒として、作用言の中に加へたり、以上十二

軒なり、

又形狀言を二軒增加したるゆゑは、古事記萬葉集などの歌に、よけ、あしけ、よけく、あしけく、などいふ詞あり、後の世の詞に善く惡しくといふに意は同じ、然る故に、くし　きとしく　しきとに、各一軒づゝを加へたり、以上十四軒、これ十四種活用なり、(委しくは、その條々にいふべし、)

第三章　將然連用終止連體已然并希求使令

將然言、連用言、終止言、連體言、已然言と第一の音より第五の音までを區別したるゆゑは、まづ第一の音の將然言は、しからむとする詞なり、故に「む」といふ助辭を添へてこゝろみるべし、飽かむ、押さむ、打たむ、思はむ、住まむ、釣らむ、などいふがごとし、これ將然言と名づくるゆゑなり、(此の事は、はやく詞の通路にもいへり、)

次に、連用言は、用言より用言に續くをいふ、さて、連用言は、「て」もじあるを例とす、「て」もじなきときは、かゝに添へて見るべし、必省きたるものぞ、たとへば、咲きちるは、咲きてちるといふことなり、行きすぐは、行きてすぐといふことなり、咲きて行きては、用言にて過ぎしことなり、ちるすぐは用言にて今のことなり、かやうに連ねて用ゐるが故に、連用言といふなり、

次に、終止言は、いひはてゝ止む詞なり、先達は截斷言といへり、是は若狹の義門が名付けしなり、然れども、允當ならず、其のゆゑは、天地の間のもの皆始終あり、これは强ひて截るにあらずして、自然にきるゝ意なり、たとへば、繰り溜めたる絲を卷かむに、卷き終へて止むがごとし、故に今終止と改めたり、山海經には、書の終りに終止とあり、終止の字これに據れり、されば終止言とは、自から詞のいひ終りたるをいふ名目なり、この詞、は、も、の、徒の結び詞となる、徒とは指したる助辭なきをいふなれば、極めて輕き格なり、その極めて輕き徒をも、この詞にて結べば、はも、のの輕きこともまた推して知るべし、すなはち、これ絲の卷き終へて止むがごとくなり、故に終止言といふなり、

次に、連體言は、用言より體言へ續く詞なり、しかれども、くゝ、か、の、何よりくれば、切るゝ格なり、是は切れぬくなれど、くゝ、か、の、何の指辭に應じて、

切るゝが故に、連體言の結びは甚力あり、右のごとく、ゞ、ゝ、か、の、何に應ずれば、切るゝなれども、つねは續くが詞の性質なり、扨此の詞は、つねは體言に連なり續く性質なるが故に、是を連體言といふなり、

次に、已然言は、已に然る意なり、しかれども、是も允當ならず、已然などいふは、心よくもなけれども、相當の文字見當らねば、たとへもとのまゝにておきつ、たとへば、風ふけばといへば、先刻からふく風の今にいたりて吹きてあることなり、過去より現在迄吹きてあるをいふなり、花さけばといへば、已に咲きたる花が、今に至りてある意なり、凡べて、已然言は過去より現在までに關係あり、ゆゑにおのれは、しかなれるとなるとを兼ねるものと定たり、

四段、一段、中二段は、ともに、五十音の中六行づゝに活用し、下二段のみは十行ともに活用するは、皇國言語の自然なるべし、しかるを、詞八衢に、わゐうゑをのゐを、一段と中二段と兩方に入れて、中二段を七行の活きとせしは誤なり、

又八衢に、一段のいを安行のいとして、初めにおきたるもわろし、一段のいは也行のいなり、

又こゝに一言いふべきことあり、希求、使令は、四段活用にては、第五の音に屬すれど、已然言にあらず、(希求使令とはいはゆる下知の詞にて、四段にてはあけ、おせ、うて、おもへ、すめ、つれの類、一段中二段下二段にては、若よ、見よ、起きよ、落ちよ、得よ、受けよ、といへる類なり、)希求使令はは、も、の、徒を受けて結ぶが例なり、四段活用は、第五の音に希求使令あり、一段、中二段、下二段は、第一の音に希求使令あり、四段活用の五の音にていはば、は、も、の、徒をうけて切るゝ時は希求使令にて、已然言にあらず、一段、中二段、下二段の一の音にていはば、は、も、の、徒をうけて切るゝ時は、希求使令にて、將然言にはあらざるなり、古人いはく、一段、中二段、下二段は、一の音には希求使令あるべからず、一の音は、元より詞をなさず、調はざる言なり、故に一の音連用言に希求使令を付くる方穩當なるべしと、これも一應は然るべきやうなり、しかれども、連用言をもて希求使令としては、其理かなはず、其の證は、變格に於いては、必ず一の音より希求使令を受くる確證あり、そはいかにとならば、

加行變格　こよ(來ヨ)　佐行變格　せよ(爲ヨ)

是らのごとし、此の例を推して見れば、一の音より受くるを以て至當とすべし、さて又、四段は五の音、一段以下は一の音に、●●●●●の印を付けたるは、希求使令を示したるなり、

又こゝに二言いふべきことあり、奈良朝以上は、四段の五の音はよもじなくして希求使令となり、(萬一「ひくま野に、にほふはり原、いりみだり、ころも爾保波勢、たびのしるしに」、萬三「いへ思ふと、こゝろすすむな、風まちて、よくして伊麻世、あらきそのみち」)平安朝以下も、まれには、下二段の一の音によもじを添へずして、希求使令とせるもあるなり、(古今俳諧「ふじのねの、ならぬおもひに、もえばもえ、神だにけたぬ、むなしけぶりを」、堀川百首「はやことも、をふねさしよせ、かのみゆる、島根のはちす、折らまくもほし」)

又意はおなじくて、四段と中二段と、二かたに活く詞あり、これは、四段の方古しくて、中二段の方新らし、その證は、忍ばむ、忍び、忍ぶ、忍べといふは、四段活用なり、中二段にては忍びむ、忍ぶ、忍ぶる、忍ぶれといふ、此の忍ぶるといふ活用は、奈良朝には聊もあることなし、又紅葉を四段にて、もみだむ、もみぢ、もみづ、もみで、と萬葉にはいへれど、もみぢむ、もみづると、中二段に活用したるは、萬葉には見えず、平安京以來の歌より見えたり、是もまた心得おくべし、

第四章　三變格並良行一格

上條にもいへるがごとく、加行、佐行、奈行には變格の活用ありてこれを二變格といふ、これは、四段にも、一段にも、中二段にも、下二段にも、その定格にあたらぬ活用なれば、變格とはいふなり、さて、又、詞八衢には、右三變格のみを載せたるを、今新に「良行四段一格」といふものを三種たてたるは、上條にもいへるごとく、「良行四段活用」とは異なるがゆゑなり、いづれも、詞の栞を見てわきまふべし、

第五章　形狀言

形狀言は、いはゆるくしさ　しくしさの二種なり、即くしさは、淺く深く等の類、しくしさは、戀しく、悲しく等の類にて、皆上は體言なり、淺はあさ、深はふか、戀はこひ、悲はかなの體言にて、くしさ、しくしさ

しさの活用の添はりたるなり、此の外も、體言ならざれば、形狀言はつかぬものと心得べし、

上條にもいへるごとく、これに又「一格」といふものを二種加へたるは、善く、善し、善き、善けれ、を善けく、善けし、善けき(善け、善き)といひ、惡しく、惡し、惡しき、惡しけれを惡しけく、惡しけし、惡しけき(惡しけ、惡しき)といふ類なり、此の格は、古言に多し、さて此の條の已然言のことは、次の條にいふべければ、見合せてさとるべし、

第六章　古格並辨疑

古格といふは、古事記、日本書紀、萬葉集などに見えたる格にて、平安京以後には、大かたは用ぬをいふなり、さて、古格に於いては、已然言を受くるばを省けるあり、

萬　四「眞野の浦の、よどのつぎ橋、心ゆも、おもへや妹が、夢にし見ゆる、

同　六「湯の原に、なくあしたづは、我がごとく、妹にこふれや、時わかず鳴く、おもへやは、おもへばやなり、こふれやは、こふればやなり、

又、くしさより、うつる良行四段一格の活用には、將然言のからをつゞめて、かといへるが多し、

萬十四「うすぐたの、ねろにかくりぬ、かくだにも、國の遠かば、ながめほりせむ、

同　「いかほろの、そひのはり原、ねもごろに、奥をなかねそ、まさかしよかば、遠かばは、「とほからば」なり、よかばは、「よからば」なり、

又、くしさ一格、しくしさ一格活用の已然言の、けしけは、けれ　しけれをつゞめたるなり、そは、

萬十七「玉ぼこの、みちのとほけば、まづかひも、やるよしもなみ、云々、

同十五「あをによし、ならの大路は、ゆきよけど、此の山道は、ゆきあしかりけり、

古事記「はしだての、くらはし山は、さかしけど、いもとのぼれば、さかしくもあらず、

萬　七「くれなゐに、こゝろもそめまく、ほしけども、きてにほはばや、人のしるべき、

とほけばは、「とほければ」なり、ゆきよけどは、「ゆきよげれど」なり、さかしけどは、「さかしけれど」

なり、ほしけどもは、「ほしけれども」なり、此の類多し、

又、同じ一格の已然言の、き しきは、け しけの轉ぜるものにて、連體言のき しきとは異なり、

仁德紀「ころもこそ、ふたへもよき、さゆどこを、ならべむ君は、かしこきろかも、

萬十一「わたのそこ、おきをふかめて、おふるもの、もともいまこそ、こひはすべなき、

よきは、「よけれ」なり、なきは「なけれ」なり、この類なほあり、

又、古事記、日本書紀などの歌に、かなしきろかも、たふときろかも、などあるろもじは、嶺呂、妹呂、麻呂などと體言に添はりたるは、親愛の意を含めり、また、たふときろ、かなしきろとやうに用言に付きたるは、親愛の意はなくて、またく助辭なりと知るべし、

反語のや（これを疑嘆のやといふ）もて切るゝに、まどはしきあり、其の例は、

萬 三「河風の、さむき初瀨を、なげきつゝ、君があるくに、似る人もあへや、

同 十二「あづさ弓、するの原野に、とがりする、君がゆづらの、絶えむとおもへや、

同 十四「うなゐ原の、ねやはら小菅、あまたあれば、君はわすらす、我忘るれや、

同 十八「なぐさむる、心しなくば、あまさかる、ひなにひと日も、あるべくあれや、

あへやは、「あはめや」の約言、おもへやは、「おもはめや」の約言、忘るれやは、「わするらめや」の約言、あれやは、「あらめや」の約言なり、

かやうなるは、皆はめ、らめの約言にて、めはむの轉せるなり、是らのやは疑嘆のやにて俗言のカイといふにおなじ、

又、咏嘆のやの中に、まどはしきあり、其の例は、

萬 二「わがこひの、ちへの一重も、なぐさもる、こゝろもあれやと、云々、

同 六「玉藻かる、からにの島に、あさりする、鵜にしもあれや、家思はざらむ、

同 七「いはくらの、小野ゆ秋津に、立渡る、雲にしもあれや、時をしまたむ、

是らは、使令言につく咏嘆のやにて、ヤアと解すべき

やなり、さて上のれやと、此のれやおなじもじなれど、各其の意ことにて、初學のともがらのまどひやすかるべければ、因にわきまへおくなり、

第七章　自他六等

詞は、本と自と他と三等なり、然れども、これを細別するときは、然る詞に、おのづから然る詞と、みづから然る詞との區別あり、然する詞に、自ら然する詞あり、他に然せさする詞あり、然せらるゝ詞に、おのづから然せらるゝと、他に然せらるゝとの區別ありて、六等とはなるなり、さてこれを分くるには、まづ、三等を知るべし、三等を知るには、本詞にせれを付けて、試みるときは、明白（スカヤカ）にさとり知らるべし、

たとへば、四段の「他」は本詞なり、これにせれをつけて、あかせ、あかれとなるがごとし、即一の音より下二段の佐行良行に移して試みるべし、凡べて、四段は、一の音かされはまらより、せれへうつす例なり、一段、中二段、下二段はさらの一の音を、中に加へて、一段ならば、見させ、見られ、中二段ならば起きさせ、起きられ、下二段ならば、得させ、得られとやうに、佐行良行へうつして試みるべし、其のうち一段に限りては、させを約めていふことあり、例をいはば、見させを見せ、着させを着せといふ類なり、

さて、此の三等より六等に別るゝ譯は、四段のあかむ、あさ、あく、あけといふは、本なり、これを左行下二段にうつしてあかせ、あかす、あかする、あかすれといへば、然する詞にて自なり、又これを良行下二段にうつして、あかれ、あかる、あかるゝ、あかるれといへば、然せらるゝ詞にて他なり、今一二をあげて、左にしめす、

四段活用詞自他三等表

本（四段）　あく　　シカル詞ナリ
自（下二段）　あかする　　シカスル詞ナリ
他（下二段）　あかるゝ　　シカセラルゝ詞ナリ

右は三等なり、これを六等に區別すれば、左のごとし、

四段活用詞自他六等表

本（四段）　あさ（同）　カ四段　あく　　ナノヅカラシカルナリ
自（下二段）　あかする　サ下二段　あく　　ミヅカラシカルナリ
他（下二段）　あかせ（同）　あかせさする　　ミヅカラシカスルナリ　他ニシカセサスルナリ

他(下二段)　あかれ　ラ下二段　同　―あかる〻　オノヅカラシカセラル〻ナリ　他ニシカセラルルナリ
　　―あかる〻　オノヅカラシカルナリ　ミヅカラシカルナリ

右は、四段活用の他くといふ本詞の、三等に轉じ、又六等に別る〻をしめせるなり、

一段活用詞自他六等表

本(一段)　見　ヤ下二段　―見ゆる　オノヅカラシカルナリ　ミヅカラシカルナリ
　　―見る　マ一段

自(下二段)　見させ　サ下二段　同　―見する　他ニシカセサルナリ　ルナリ
　　―見せさする　ルナリ　ミヅカラシカスルナリ

他(下二段)　見られ　ラ下二段　同　―見らる〻　オノヅカラシカセラル〻ナリ　他ニシカセラルルナリ
　　―見らる〻　オノヅカラシカセラル〻ナリ　他ニシカセラルルナリ

右は、一段活用の見といふ本詞の、三等に轉じ、又六等に別る〻をしめせるなり、

中二段活用詞自他六等表

本(中二段)　おち　タ中二段　同　―おつる　オノヅカラシカルナリ　ミヅカラシカルナリ
　　―おつる

自(下二段)　おちさせ　サ下二段　サ四段　―おとす　ルナリ　ミヅカラシカスルナリ
　　―おとさする　他ニシカセサルナリ

他(下二段)　おちられ　ラ下二段　同　―おちらる〻　オノヅカラシカセラル〻ナリ　他ニシカセラルルナリ
　　―おちらる〻　オノヅカラシカセラル〻ナリ　他ニシカセラルルナリ

右は、中二段活用の落ちといふ本詞の、三等に轉じ、又六等に別る〻をしめせるなり、(此の所におち　おつといふ詞のおとと轉じたるは、すなはち轉言の例にて、ち(二の音)のと(五の音)轉じたるなり。)

下二段活用詞自他六等表

本(下二段)　とけ　カ下二段　同　―とくる　オノヅカラシカルナリ　ミヅカラシカルナリ
　　―とくる

自(下二段)　とけさせ　カ四段　サ下二段　―とく　ルナリ　ミヅカラシカスルナリ
　　―とかする　他ニシカセサルナリ

他(下二段)　とけられ　ラ下二段　同　―とかる〻　オノヅカラシカセラル〻ナリ　他ニシカセラルルナリ
　　―とかる〻

右は、下二段活用の解けといふ本詞の、三等に轉じ、又六等に別る〻をしめせるなり、

此のほかは皆準らへて知るべし、又四段活用の習はむ、匂はむなどいふことばを、左行に移して習はさむ、習はし、匂はさむ、匂はしといふことあり、是は自(ミヅカラ)にのみかゝる詞なり、

拾遺「手枕の、すきまの風も、さむかりき、身はならはしの、物にぞありける、」

古今四「なに人か、きてぬぎかけし、藤袴、くる秋ごとに、野べをにほはす、」

また詞にも「ふみかよはしける花」などあり、是らは、皆同格なり、さて、このならはしをならはせ、にほはしをにほはせ、かよはしをかよはせとは、いはぬことなり、もし、にほはせ、かよはせ、ならはせなどいふ時は、自にあらずして、他に然せさする詞となるなり、

拾遺「梅が香を、さくらの花に、にほはせて、柳が枝に、咲かせてしがな、」

源氏紅葉賀「てほんかきならはせなどして、云々、」

これらの類なれば、よく味はひてさとるべし、

第八章　助辭五階言

詞に五階あり、まづ作用言は、將然、連用、終止、連體、已然の五種あれば、隨ひて助辭(ツイテ)も五種の區別ある道理なり、さて形狀言に至りては、六階なれば、助辭もまた六種にわかるれど、大かたは作用言におなじければ、その五種の助辭をよく心得なば、形狀言の六種の辭にも通ずべし、

第一節　一階助辭俗解

桒に載せたるはず　む　なむ　ば　の四種なれども、是は目標(メジルシ)をあげたるにて、「ず」はず　ぬ　ねと活用し、「む」はむ　む　めと活用する類を、よく心得べし、(但、左の助辭の上に「○」印を付したるは、一種のはじめの目標なり、「○」印のなきは、おなじ種類の活用と知るべし、以下これに準ふべし、)

一階助辭俗解表

○ず　ナイ　ぬ　ナイデアル　ね　ナイガマア

デアルは、ヤに同じ、いづれにも、適宜なるべし、

ず　ナイデ

ずは續くときは、デもじを添へてナイデと解すべし、

じ　ウデアルマイ　ヤウデアルマイ

じはずの轉語なり、

て　ナイデ

てはずての省畧なり、此の助辭古はなし、

ずけり　ナカツタ　アイ　ずける　ナカツタ　デアル　ずけれ　ナカツタ　ガマア(ナイデアルガマア)

ざり　ナイデアリ　ざる　ナイデアル　ざれ

ざりはずありの約言なり、

ざらむ（ナイデアラウ）　ざらむ（ナイデアラウデアル）　ざらめ（ナイデアラウガマア）

ざらむはずあらむの約言なり、

○む（ウ、ヤウ）　む（ウデアル、ヤウデアル）　め（ウガマア、ヤウガマア）

まく（ウコト、ヤウコト）

まくはむの延音なり、

まし（ウデアリマシヤウ、マシヤウ）　ましウデアリマシヤウデアル、マシヤウデアル）

ましか（ウデアリマシヤウガマア、マシヤウガマア）

ましのまはむの轉語なり、

○なむ（ウナラヨイ、ヤウナラヨイ）

○ば（ウナラ、ヤウナラ）

○ヨ（ヨ）

此のヨは、一段、中二段、下二段等にあり、四段には、五階にあり、これは希求使令のようなり、故に片假字にかきて、これを區別せり、

是らの類なり、但、む　なむ　ばの三は、ウ云々、ヤウ云云と二樣に俗解を付したるは、四段言のときは、ウ云云なり、一段、中二段、下二段言のときはヤもじを加へて、ヤウ云々と俗解する例なればなり、（但近古の俗にヤもじなしに、着む、起きむ、得むを、キウ、オキ、ウ、エウともいへり、これもまた、心得おくべし、）

第二節二階助辭俗解

栞に載せたるは、て　つ　けり　なむ　し　その六種なれども、これも目標をあげたるにて、おの〳〵種々に分るゝこと、一階の條のごとし、

二階助辭俗解表

○て（テ）

てむ	テアラウ（テヨカラウ）	てむ（テアラウデアル、テヨカラウデアル）
てめ	テアラウガマア（テヨカラウガマア）	
てまし	テアリマシヤウデアル	てまし（テアリマシヤウデアル）
てましか	テアリマシヤウガマア	
てば	テアラウナラ	
てけり	テアツタアル	てける（テアツタアル）
てけれ	テアツタガマア	てき（テアツタアイ）
てし	テアツタアル	てしか（テアツタガマア）
てしが	テソレアリタイモノヂアリイ	

此の助辭は願の意なり、

てしがな（テソレアリタイモノヂヤリイ）

是も願の意なり、

此の外にては　てもなどあるは、皆こゝの分家のごとくは見ゆれども、てにマアといふ咏嘆の意のはもの添はりたるものにて、まことの分家にはあらず、

たり（テアリ）　たる（テアル）

たれ（テアルガマア）

たりはてありの約言なり、此の外にたらず、たらじ、たらむ、たらまし、などの類は、皆分家なれども、くだ〳〵しければ、あげず、上の例になぞらへてしるべし、

○つ（タリイ、シシヤウタリイ）　つる（タデアル、テシマウタデアル）

つれ（タガマア、テシマウタガマア）

此のつ　つる　つれは、半過去の意なり、さててとつとは、もと一軒なれど、古くより分家して、二軒とはなりたり、また、此の所の解をタワイと、テシマウタワイと二樣に付したるは、全略二樣あるをしめしおくなり、テシマウタワイは全の解なり、タワイは略の解なり、

つゝ（何ッ何ッ）

つゝはつの連用言なり、たとへば、見つゝは、見ッ見ッと解すべし、

つらむ	タデアラウ	つらむ（タデアラウデアル）
つらめ	タデアラウガマア	つらし（タサウナ）
つらし	タサウナデアル	つらし（タサウナガマア）
つべし	タデアルベイ	つべき（タデアルベイデアル）
つべけれ	タデアルベイガマア	

此の外に、つも　つやなどあるは、例の咏嘆のマアカイの添はりたるにて、こゝの分家にはあらざること、上の條に準へて知るべし、

○けり（タリイ、テキタリイ）　ける（タデアル、テキタデアル）

けれ（タガマア、テキタガマア）

此のけり　ける　けれにも、つ　つる　つれのごとく、全略の二樣あり、けむは、タデアラウ、テキタデアラウなり、けらしは、タサウナ、テキタサウナなり、おして知るべし、

○なむ（テイナウ）　なむ（テイナウデアル）

なめ（テイナウガマア）

此のなむは、俗にイナムのなむとも常のなむともいふ、

なまし（テイニマシヤウ）　なまし（テイニマシヤウデアル）

なましか（テイニマシヤウガマア）

なゝ（テイナウナア）

なば（テイナウナラ）

なで（テイナナイデ）

にけり（テインダワイタリイ）　にける（テインダワイタデアル）

にけれ（テインダガマアタガマア）

此のには、上のなむのなと同意のになり、

にけむ（テインダデアラウ）　にけむ（テインダデアル）

にけめ（テインダデアラウガマア）　にけらし（テインダサウナ）

にけらし（テインダサウナデアル）　にけらし（テインダサウナガマア）

にき（テインデアツタワイ）　にし（テインデアツタデアル）

にしか（テインデアツタガマア）

にきの次に、にしが、にしがな、又次下なるしの次にしが、しがなと擧ぐべきを、此には省けり、多く用ゐぬ辭なればなり、その語意は、上の條なるてしが、てしがなに準へて知るべし、

ぬ（テインダワイ）　ぬる（テインダデアル）

ぬれ（テインダガマア）

此のぬも上のにと同意のぬなり、

ぬべし（テイヌベイ）　ぬべき（テイヌベイデアル）

ぬべけれ（テイヌベイガマア）　ぬべらなり（テイヌベキヤウスダワイ）

ぬべらなる（テイヌベキヤウスデアル）　ぬべらなれ（テイヌベキヤウスダガマア）

ぬらむ（テイヌルデアラウ）　ぬらむ（テイヌルデアラウデアル）

ぬらめ（テイヌルデアラウガマア）　ぬらし（テイヌルサウナ）

ぬらし（テイヌルサウナデアル）　ぬらし（テイヌルサウナガマア）

ね（テインダモレテインダガヨイテアツタデアル）

○し

此のしは、次のきしとかと活用するしなり、例に依らばきをあぐべきなれども、しを擧げたるは、ししとせしとの區別を早くしらしめむとてなり、

き（テアツタ）　し（テアツタデアル）

しか（テアツタガマア）

し（テアツタタガマア）

此のきししかの見やうは、其のものゝ、今は其の所になきをさす意と知るべし、故に此のしを過去のしといふなり、

○そ（コトナカレ）

此のそは勿れのなをまづいひて、なぬそと結ぶ口あひのそなり、此のそは、俗にナナニソのそといふなり、ぞと濁ることなかれ、

△らむ（ルデアラウ）　らむ（ルデアラウデアル）

らめ（ルデアラウガマア）

△べし（ルベイ）　べき（ルベイデアル）

べけれ（ルベイガマア）

△と（ルト）

是らの類なり、さてこれに△の印を付したるらむ べし との三種は、いづれも、古格にて、一段活用の二階にのみある、助辭なりと知るべし、

第三節　三階助辭俗解

栞に載せたるは、らむ べし めり まじ なり ばかりかに パタ と ヨヤナ なモ カシ の十五種なれども、是も目標をあげたるにて、もの〳〵種々に分るゝこと、一階二階の條のごとし、

三階助辭俗解表

○らむ（グラウ）	らむ（デアルダラウ）	
らめ（グラウガマア）	らし（サウナ）	
らし（サウナデアル）	らしき（サウナガマ）	
	らし（サウナガマア）	
○べし（ベイ）	べき（ベイデアル）	
べけれ（ベイガマア）		

べしは、昔も今も同じ詞なり、物語などにべいとあるも同意なり、

べからず（ベクナイ）　べからぬ（ベクナイデ）

べからね（ベクナイガマア）　べからば（ベクアラウナラ）

べかなり（ベクアルヤイ）　べかなる（ベクアルデアル）

べかなれ（ベクアルガマア）　べかりけり（ベクアツタヤイ）

べかりける（ベクアツタデアル）　べかりけれ（ベクアツタガマア）

べからむ（ベクアラウ）　べからむ（ベクアルダラウ）

べからめ（ベクアラウガマア）　べからし（ベクアルサウナ）
べからし（ベクアルサウナデアル）　べからし（ベクアルサウナガマア）
べらなり（ベキサマナリ）　べらなる（ベキサマデアル）
べらなれ（ベキサマデアルガマア）　べみ（ベキヤウスサニ）
べく（ベク）

○めり（トミエルヲイ）　める（トミエルデアル）
めれ（トミエルガマア）
めりは、推察の意なり、

○まじ（マイ）　まじさ（マイデアル）
まじけれ（マイガマア）　まじく（マジク）
○なり（ヲイ）　なる（デアル）
なれ（デアルガマア）
此のなりは、俗にワイナリといふ、咏嘆のなにりるれの添はりて、なり、なる、なれと活用せるにて、四階のなりとは異なり、四階のなりは、にありのつゞまりにて、別なり、此の所のなりは、たとへば、古今に「難波なるながらの橋もつくるなり今は我が身をなにゝたとへむ」、又「みよし野の山のしら雪つもるらしふるさと寒くなりまさるなり」、又、「秋風にはつかりがねぞ聞ゆなるたが玉づさをかけてきつらむ」、後撰に「曉のかねの音こそ聞ゆなれこれを入あひとおもはましかば」、是らの類をいふなり、

○ばかり（トスルダケ）
此のばかりは、物を計るなり、元は、清音によみしを、ばかりと、詞の濁りて、助辭となれるなり、終止言を受くる故に、トもじを添へて、解する例なり、

○がに（トセントスルタメ）
此のがには、兼ねてする意なり、また設（マウケ）なり、これも終止言を受くるが故に、トもじを添へて、解する例なり、

○ハタ（マア）
此のハタは、咏嘆辭にて、四階のはたと異なり、とは切れたるを續ぐ助辭なり、

○と（ト）　とも（トテモ）
ちふ（トイフ）　ちふもてふも同意なり、
てふ（トイフ）

○な（ナカレ）
なは、勿れにて禁止の助辭なり、

○カシ（サ）
カシは、切れたる詞に添へていふ咏嘆辭なり

○ヨ（ヨウ）
ヨは咏嘆辭なり、

○ヤ（カイ）
ヤは咏嘆辭なり、又、疑嘆のヤといふ、此の外にヨと解すべきヤあり、ここに畧す、

○ナ（ナア）
ナは咏嘆辭なり、

○モ（マア）
モは咏嘆辭なり、

是らの類なり、さて、此の所のハタヨヤナモカシの六種を、片假字にて記したるは、咏嘆の辭のしるしなり、希求使令のよ、禁止のな、指詞のや、もに混ぜざらしめむがために、片假字もてしるしたるなり、見む人しか心得てよ、

第四節　四階助辭俗解附（だに、さへ、すら）

栞に載せたるは、かな、に、なり、を、と、ばかり、がに、はたの八種なれども、是も目標を擧げたるにて、おのおの種々に分れたること、前階の條のごとし、

四階助辭俗解表

○かな（ヂヤナア　コトヂヤナア）
此のかなはかなしのかなの轉じて、咏嘆を含める助辭となれるなり、故に、體言を受くるときは、ヂヤナア、用言を受くるときは、コトヂヤナアと解する例なり、

○に（デ）
此のには、場所をさす助辭にて、處に依りては、デと解する例なり、又、副詞のには別に意なし、此の四階のにと混ずることなかれ、

○なり（ヂヤ　ニテアリ　ノデアリ）　なる（デアル　ニテアル　ノデアル）
なれ（デアルガマア　ニテアルガマア　ノデアルガマア）
此のなりはにありの約言にて、漢字の在の字にあたれり、俗にヂヤナリといひて、三階のなりと區別す、たとへば、古今に「ことならば、思はずとやはいひはてぬ、なぞよの中の玉だすきなる、後撰に「あはれてふ、ことにしるしは、なけれども、いはでは、えこそ、あらぬものなれ、千載に「宮城野の、萩やをじかの、つまならむ、花咲きしより、こゑのいろなる」是らの類をいふなり、

なりけり ノデアツタアイ　なりける ノデアツタデアル
なりけれ ノデアツタガマア　ならむ ノデアラウ
ならむ ノデアルデアラウ　ならめ ノデアラウガマア
ならまし ノデアリマシヤウ　ならまし ノデアリマシヤウ
ならましか ノデアリマシヤウガマア　ならし ノデアルサウナ
ならし ノデアルサウナデ　ならし ノデアルサウナガマア
ならなむ ノデアラウナラヨイ
ならず ノデナイ　ならぬ ノデナイデアル
ならね ノデナイガマア　ならじ ノデアルマイ
ならで ノデナイデ
○を ヲ
○と ノト

此のとは、三階のととはいさゝか異なり、のとの意に解する例なる故に、俗にノトのといふなり、

○ばかり ダケ ダケニテ

此のばかりは、物を計るなり、連體言を受くるが故に、トスルといふ言を添へずして、たゞちにダケと解すべし、

○がに モノトセンダメ

此のがにはかねの轉じたるにて、豫てカネみる意なれど、三階のがにとは聊異なり、俗解を見合せて知るべし、

○はた マアマタ

此のはたは、漢字の將にあたれり、故に、三階のはたとは異にて、其の意は、俗のマアマタなり、本居翁が、モマタと解したるも、大略おなじ意なり、散木集に「ちぬの海、浪にただよふ、うきみるの、うきを見るはたゆゝしかりけり」とある、是らのはたなり、

より ヨリ ヨリマア

漢字の自にあたれり、「○」より以下なべにに至るまでは、栞には載せざる助辭なり、

まで マア　漢字の迄の字にあたれり、

のみ バカリ　漢字の而已の字にあたれり、

ゆゑ ユエ

から ヨリ

もの モノ

ものを モノヲヨ

ものから モノナガラ

ものならなくに モノデナイノニ

だに デア

さへ マデ

すら ソレ

ごと ゴトシ

なべ ナラビ

なべに ナラビニ

是らの類なり、

此の所の末尾に擧げたる數種の中には、にもじを添へてからに、さへに、すらに、などもいへり、但、是は副詞のになり、

又だに、さへ、すらのことに就きては、故人の說はさまゝあれども、いまだしきやうなれば、一わたり左にいふべし、

だにのには四階の助辭のに、をのにには、あらず、だにといふ一つの助辭なり、また、一種をだにといふあり、をの下にあるだになり、俗にソレデモと解するなり、まただにもと下にもを添へていふときは、俗解デモマアなり、すべて、だには俗にデモといふにおなじ、

さへは、俗解マデなり、下二段のそへの義なり、さてそへはソハセにて、物を副へてこれまでもと、ちからを入るゝ意なるもあり、本居翁がそひなりといへるは近けれども、四段言なれば、自他たがひてわろし、土佐日記に、「かもめさへだに浪とみゆらむ」とあり、是らを味はふべし、

すらは萬葉に直の字また尙の字をあてたり、故になほの意といふ說もあり、玉霰には、すらは「やはり猶」といふ意にちかしといへり、眞頼考ふるに、すらは俗のソレといふ意なり、今も國によりてはソラなどいふ所あり、萬葉に尙の字を當てたるは、尙は直の意ある故に假借せる文字なれば、泥むべからず、古歌に、「とけてすらぬるほどもなき云々」「家人のはる雨すらをまつかひにする」「君すらもまことの道に入りぬなり」などいへる、是らを味はひて見るに、ソレの意としてよく解くるなりすらは其なり、其を轉じてすらといひて、助辭とせるものなり、

第五節　五階助辭俗解

栞に載せたるは、ば　ども　と　ヨ　カシ　ヤ　ナの八種なり、此の五階の助辭は、活用するものは、一種も

あることなし、

五階助辭俗解表

○ば　ソコデ　漢字の故の字にあたれり、
○ど　ナレド　漢字の雖の字にあたれり、
○ども　ナレドモ　漢字の雖の字に當れることどにおなじ、
○と　ト　切れたるをつぎいだす助辭なり、
○ヨ　ロウ
○カシ　サ
○ヤ　ヤア
○ナ　ナア
是らの類なり、

筆九章　指辭五條

玉緒には、指辭をは｜も｜徒、ぞ｜のや｜何、こその三條としたれど、さては指辭足らずして、初學の惑ひ易ければ、今五條とはあらためつるなり、なにの辭か足らぬどいはば、まづの｜と何とは輕重の二種あるを一つにし、又か｜がを指辭に入れざりしは、足ざるなり、さてその｜のと何とは輕重あることに心づかずして「變格」といふものをたて、いとあやしく論らひたり、故に今は初學にもさとり易からむために、か｜とが｜を加へ、また｜の｜何の三ツに輕と重と輕の重とあることをさし示せり、

又玉緒には、何の部類に何か｜たれか｜いかでかなどの類を擧げたれど、是らは何の部類にあらずして、かの部類なり、因りて、今あらためて、は｜もの徒｜かの｜ぞや｜かの｜何｜こそ｜の五條とはなしつるなり、なほくはしくは、其の條々に於いていふべし、

第一節　「はもの徒」の指辭

は｜もの｜の徒は、輕き指辭なり、そは「徒」にても、自然に切るゝ詞なれば、は｜も｜のの指辭あるに於いては勿論のことなり、は｜も｜のは、終止言の結びにて、は｜も｜は體より續く時は指辭なるあり、咏嘆辭なるありて、一樣ならず、そのところにて見定むべし、人は花は月も雪もの類はおほくは指辭なり、

萬　五「たつのまも、今もえてしが、あをによし、ならのみやこに、ゆきてこむため、

古今卷下「今もかも、さきにほふらむ、たちばなの、小島のさきの、山吹の花、

推古紀「おやなしに、なれなりけめや、さすたけの、君はやなき、

古今俳諧「むつごとも、まだつきなくに、あけぬめり、いづらは秋の、ながしてふ夜は、

是らのは｜もは、咏嘆のは｜もなり、

又助辭より續く時は、咏嘆なり、まれには、咏嘆ならぬもあれども、それは甚輕くして咏嘆にひとし、一二をいはば、とは｜には｜ても｜をものもの類、但、けるは｜つるは｜ぬるも｜たるもの類は、連體言より續きたれば、助辭より續けるにはあれど指辭なり、さるは、言ふは｜聞くは｜見るも｜戀ふるもと、連體言より續くと同例なればぞかし、

又、く｜しき、しく｜し｜しきのく｜しく｜より受くる時も、咏嘆なり、淺くは｜深くも｜繼しくは｜悲しくもの類なり、又、指辭の上にある時もおなじ、はぞ｜もぞ｜はや｜もや｜はこそ｜もこその類なり、

は｜は物をとりわくる意あり、彼れは｜是れは｜のはのごとし、も｜は物を取り合する意あり、彼も｜是ものものごとし、今予が指辭のは｜もといふは、此の意を十分にもてるは｜もなり、しか心得てよ、さて、その輕重の大意を示さむに、先、は｜もを重ねていふことをわきまふべし、

古今十三「人はいさ、我はなき名の、をしければ、昔も今もしらずとをいはむ、

土佐日記「男もすといふ日記といふものを、女もしてこゝろむとてするなり、

これらの類なり、さてかやうに二つかさねてあるは、指辭の中にも、一層輕くして、其のちからをいはば、徒とおなじほどなり、

又、次の歌のごとく、一方をのみいひて、一方を含蓄したるは｜もは、其のちからありて、下へかゝるもまた強し、故にたしかなる指辭といふべし、

古今一「人はいさ心もしらず故郷は、花ぞむかしの、かにほひける、

同　「春がすみ、たてるやいづこ吉野の、吉野の山に、雪はふりつゝ、

同　「ときはなる、松のみどりも春くれば、今ひとしほの、色まさりけり、

是らの類をいふ、左の圖を見てわきまふべし、

- 指辭
  - 重 合蓄
    - 卷け來にけり
    - 卷もくれゆく
  - 輕 體用
    - 冬はすぎ卷け來にけり　花もちり卷もくれゆく
- 呼嘆
  - 重 體用
    - 見てはゆききしてはゆく　見テユキキシテユク
    - 見てもおもひきしてもおもふ　見テ思ヒキシテ思フ
  - 輕 單用
    - 見てはゆく　きしてもおもふ

合　冬ハスギタガ卷ハ來タワイ
合　花モ散タガ卷モクレユク
冬ハスギテ卷ハキタワイ
花モ散テ卷モクレユク

のは玉の緒には、ぞと同じほどの指辭にて、はもの結びにて切れたるは、變格なりとあれど、こはのに輕重あるを知られぬからのことなり、左の歌どもを見てさとるべし、

古今四「待つ人に、あらぬものから、初雁の、今朝鳴くこゑの、めづらしきかな、

千載六「玉づさに、涙のかゝる、心ちして、しぐるゝ空に、雁のなくなり、

是らののは、輕く指して輕く結べるなり、ゆゑに、輕ののといふ、重ののの事は、次にいふべし、

因にいふのは、輕重ともに體言をのみ受けて、用言を受くることなし、もし、用言を受けたるがあらば、その用言はいひすゑて體言となりたるものと知るべし、近き世の人の歌などに、「落ちたるのかと思ひけるかな」「霧のふるのと思ひけるかな」などいへるたぐひをもり見ゆれど、こはひがごとぞよ、

徒とは、指す辭のなきをいへるにて、これも結びに輕重あること、のに同じ、その輕格は、玉の緒に多く證歌を擧げたれば、誰もよくしれることなれど、詞の栞の順序に依りて、まづこゝに證歌三首を擧ぐ、重の格は、次にいふべし、

古今五「夜を寒み、おくはつ霜を、はらひつゝ、草の枕に、あまたゝび寢ぬ、

後拾廿「今よりは、あらぶるこゝろ、ましますな、花のみやこに、やゝろ定めつ、

萬八「我が君に、わげはこふらし、たまひたる、つばなをくへど、いやゝせにやす、

などの類なり、

第二節　「か、の」の指辭

かのかものもおなじほどの助辭なり、此のかのは、形狀言のくしき、しくし、しき同一格の四階のさもじにて結ぶときの指辭に限る格なり、これを輕重のかの（輕と重との間なればかく名づけつ）といふ、

古今十三「うつゝには、さもこそあらめ、夢にさへ、人めをもると、見るがわびしさ」、

後撰三「風をだに、まちてぞ花の、ちりなまし、心づからに、うつろふがうさ」、

古今四「秋萩を、しがらみふせて、鳴く鹿の、めには見えずて、音のさやけさ」、

後撰二十「夕ざれば、ねにゆくをしの、獨して、妻とひすなる聲の悲しさ」、

是らの類をいふなり、さてこの見るがわびしさ、うつろふがうさといふべきを、見るはわびしさうつろふはうさとやうにいふは、變格なり、用ゐるべからず、又、見るかわびしさ、うつろふがうさなどいふも、變格なり、すべて、此のかのの指辭の下は、さしけさしけさにて結ぶ格なりと知るべし、

第三節　「ぞ、や、か、の」の指辭

ぞやかのぞはソレの意なり、はとおなじ性質にて、他をさし指して一方を指す辭なれど、はよりは重く指す辭なり、やは柔かなる性質なり、大らかに疑ふ意をしめす辭にして、かよりは緩やかなり、かは堅き性質なり、疑の辭なれども、やに比ぶれば、迫りて疑ふ意あり、のは柔かにて穩やかなる辭なれば、別にとりたてゝいふべきほどの意なし、

たとへば、「花ぞさくなる」「春ぞ立ちける」といふは、「花ガソレザイタデアル」「春ガソレタツタデアル」と云ふことなり、花やさくらむ」「春やたつらむ」といふは、「花ガ大カタサグデアルダラウ」「春ガ大カタタツテアルダラウ」といふことなり、「花かさくらむ」「春かたつらむ」といふは、「花ガ十に九ッサクデアルダラウ」「春ガ十ニ九ッタツデアルダラウ」といふことなり、「花のさくなる」「春のたつなる」といふは、「花ガサクデアル」「春ガタツデアル」是は由ののなり）といふことなり、此の例をもて、よろづを味ひ知るべし、

古今十三「ひとりして、物をおもへば、秋の田の、いなばのそよと、いふ人のなき」、

千載四「宮城野の、萩やをじかの、つまならむ、花咲き

しより、聲のいろなる、

これらは、玉緒三轉證歌の條に擧げたる歌にて、重のなり、

第四節　「何の重」の指辭

何は、元より輕重なき辭なれども、栞の圖に輕重と二樣に擧げたるは、のと同樣にて、受くる助辭の輕重に依りて、區別をあらはすなり、さて何は疑の意を示す詞なれば、體言としても然るべきやうなれども、先達これを指辭とせり、しか心得てさまたげなきのみならず、益あればしたがふべし、その疑の輕重は、結辭の輕重にしたがふものなり、その輕のかたは、次なるが何の條に示すべければ、此の所には、重の例をのみしめす、

古今十二「瀧つせの、中にもよどは、ありてふを、など我が戀の、ふちせともなき」、

古貝六帖「みくまのゝ、浦のはまゆふ、いくかさね我をば君が、おもひへだつる」、

是らの類をいふなり、證歌はいと多くあれど省きつ、

第五節　「こそ」の指辭

こそは、ぞを一層強くいふゆゑにコソと迫るなり、かく迫るゆゑに、此の結びは、却りて後弱くして咏嘆の意あり、故に已然言をもて結ぶ例なり、是迫るは、かゝりてゆるきに應ずる理なり、

早今十四「宮城野の、木あらの小萩、露を重み、風を待つごと、君をこそ待て」、

天智紀「みえしぬの、えしぬのあゆ、鮎こそは島へもえき」云々、

是らの類をいふなり、證歌はいと多くあれど省きつ、

第六節　「が、何の輕」の指辭

が何これも輕重あれど、輕きかたははものとおなじほどの指辭なり、

後撰九「秋の田の、いねてふことを、かけしかば、思ひ出づるが、嬉しげもなし」、

六帖「世の人の、いみけるものを、我が爲に、なしといはぬは、誰が愛なり」、

萬十四「日のくれに、うすひの山を、こゆる日は、せなのが袖も、さやにふらしつ」、

後撰十二「戀しきも、思ひこめつゝ、あるものを、人にしらるる、涙だなになり」、

同九「くやくやと、待つ夕ぐれと、今はとて、かへる

あしたと、いづれまされり」、

新勅二「高砂の、をのへのさくら、たづぬれば、みやこのにしき、いくへ霞みぬ」、

金葉四「淡路しま、かよふ千鳥の、なくこゑに、いく夜ねさめぬ須磨の關守」、

是らは、者がの輕き格何の輕き格なり、此の類なほあれど省きつ、

第七節　「がの重」の指辭

がの重がの重の結びは、玉の緒三の卷にも見えたり、

古今十九「さかしらに、夏は人まね、さゝの葉の、さやぐ霜夜を、わがひとりぬる」、

萬二「さゝ波の、しがさゝれなみ、しく〳〵に、つねにと君がおもほせりける」、

拾遺二「わがやどの、梅の立枝や、みえつらむ、おもひのほかに、君がきませる」、

などの類なり、

第八節　「徒の重」の指辭

徒の重徒の重の結びは、玉の緒に「變格」とて擧げたる中におほかり、

後撰十六「數ならぬ、身をおも荷にて、よし野山、高きなげきを、おもひこりぬる」、

拾遺十五「かしまなる、つくまの神の、つく〳〵と、我が身ひとつに、戀をつみつる」、

などの類なり、その餘も、なずらへて知るべし、輕の結びは上にいへり、

第九節　希求使令の指辭

又、希求使令に係るはもの徒をはもの徒の重といふは、栞の圖に擧げたるがごとし、そは、下二段、加行變格、佐行變格の一の音、また四段、奈行變格、良行四段一格の五の音なり、されば、すべてにはわたらず、さて、「はもの徒の重」と名付けしは、例の結ぶ辭の重さによりて名づけたるにて、上のがの同などの例のごとし、

古今十六「深草の、野べの櫻し、心あらば、ことしばかりは、墨そめにさけ」、

萬十「朝な〳〵、わが見る柳、うぐひすの、來るてなくべき、森にはやなれ」

などの類なり、

因にいふ、指辭は、すべて上にいへるごとく、五條

にて、その辭は、五十音の上と下との兩端の音のうちより取りて用ゐしなり、(兩端の音とは、一の音と五の音とをいふなり、)其の證は、はものはは一の音なりもは五の音なりがのがは一の音なり、のは五の音なり、ぞやかのぞは五の音なり、やは一の音なり、かは一の音なり、またこそは五の音なり、さて、此の兩端は、詞の首尾にて、これを材木にたとふれば、端を切りて楔(クサビ)に用るがごとし、然れば、言語に於いても、指辭は言葉の楔(クサビ)なり、此のくさびあるが故に、言語動かず、漂はしからず、これよく楔を用ゐれば、家のうごかぬにおなじ、

第十章　變格の係結

變格とは、本居宣長翁が、私に名付けたる名なり、其の譯は、翁は年來考へられて、指辭ははもゝ徒、ぞのや何、こそと三條に定め、てにをは紐鏡を著はし、また證歌を擧げて、詞の玉の緒を著はされたるは、實に未曾有の卓見なり、さて、その中に、右の三條にはまらぬものども出て來にけり、そは、玉の緒の二卷にあげたる、

後撰「ふる雪の、みのしろ衣、うちきつゝ、春きにけりと、おどろかれぬる」、

同十六「數ならぬ、身をおも荷にて、よしの山、高きなげきを、思ひこりぬる」、

以下略す、これらは、皆從の重の結びなり、さて、また何の輕の結びなる、

後撰十二「戀しきも、思ひこめつゝ、あるものを、人にしらるる、涙なりける」、

同十三「思ひ出でて、おとづれしける、山彦の、こたへにこりぬ、こゝろなになり」、

金葉三「夏のよの、月まつほどの、手すさびに、岩もるしみづ、いくむすびしつ」、

堀川百首「逢ひ見ての、あしたの戀に、くらぶれば、待ちし月日も、なにならぬかな」、

是らの類を、すべて「變格」として、特別となしたり、然れども、別格の意にて違格としたるにはあらず、かくさだめられしことは、上にもいへるごとく、輕重の二格あるを見出さずして、偏に三條とのみおもひ定められたるが故なり、おのれが指辭を五條と改めたる旨意をよくあぢはひなば、「變格」といふものはなきものなりと、自からさとりぬべし、なほくはしくは、玉の緒變格辨にあげたれば、就きて見るべし、

第十一章　敬語及添詞

大凡、言葉づかひの中に、「敬語」といふものあり、又「添詞」といふものあり、「敬語」とは見給ふ聞き給ふの類にて、これは誰もよくしれることなり、(此の外に、今一種敬語あり、これは別にいふべし、)此の他は波行下二段の給へにて、思ふ給ふるの類なり、(思ふ給ふるは、正しくはおもひ給ふるといふべし、されど中昔より、轉じてかくもいふことゝなれり、)この給へは給はせの約言なり、されば思ふ給ふるは思ひ給はするの約なり、これ奉(タマフ)り存といふ俗言の意におなじ、然れども奉り存は此方よりおもひたてまつるなり、思ひ給ふるは、上のめぐみにて、おろかなる身もかく思ひたまはするといふ意にて、自他はたがへど、敬する意に至りてはおなじおもむきなりと知るべし、此の他、四段活用にては、あかむ　おさむ　うたむといふ一の音より、佐行下二段のせへうつしてあかせ給ふ　おさせ給ふ　うたせ給ふといひて、敬語となり、一段、中二段、下二段活用はさ文字を加へて、着させ給ふ　見させ給ふ　起させ給ふ　落ちさせ給ふ　受けさせ給ふとやうにいひて、敬語となるなり、また、三變格に至りても、おなじことなり、さて、その加行變格、佐行變格、奈行變格、良行四段一格は、四段の質か否かを試みむには、判然と分る法あり、それは如何といふに、加行變格は「來(コ)させ」といひて「來(コ)させ」とはいはず、佐行變格も「爲(セ)させ」といひて「爲(セ)させ」とはいはず、然れば、四段の性質にあらざるなり、(四段の性質は他かせ　押させ　打たせとやうに、直にせもじへ續くが故なり、されば、直にせもじへ續かざるは、四段性質にあらざるものと知るへし、)奈行變格は、往なせ　死なせといひて、往なさせ　死なさせとはいはず、良行四段一格も、有らせ、ならせといひて有らさせ　居らさせとはいはず、しかれば、此の二行は、四段の性質なり、但、これは因におどろかしおくのみ、

「添詞」といふは、かきくもる　うちふく　とりよろふ　さしはへて　ふりはへて　たちまさむかれなどの、かきうち　とりさし　ふりたちの類なり、是らの詞をそふれば、その意強くもなり、また輕くもなるなり、さて、上の敬語の給ふ　思ふ給ふるの類と、添詞とは、

連用言なれども、常例のごとくてもじを添へて見る格にあらず、てもじを添へては、聞えぬなり、（見給ふを見て給ふ「うちわたす」をうち、てわたす、とは解すべからざる類なり、）てもじを添へて解すべきは、通常の連用言なり、

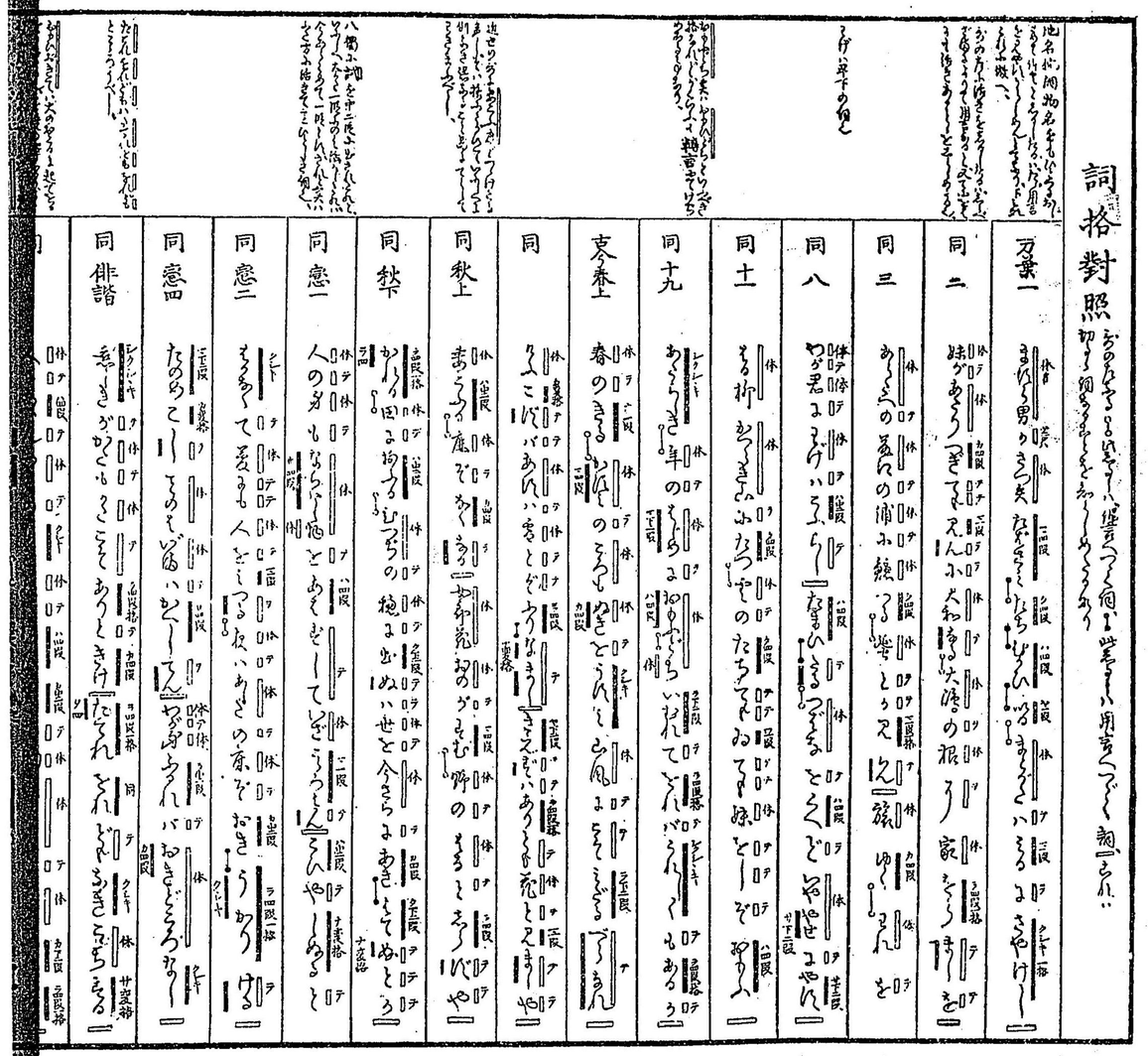
明治十九年十月卅日上野なる韻松亭にて
語學會の竟宴によめる　眞頼

なほのこるくまこそあらめみとせへて
わけしことばのはやしなれとも

玉の緒變格辨序

ひと日、三田のをぢと物がたりしけるに、をぢがいへらく、詞の玉の緒に變格といへる格なむ、いとも〳〵いぶかしき、さるは、この變格といふものあらむには、世のつねの格といふものはたしかにいひ定めがたからむ、こはいかにとふに、こたへけらく、おのれもしかなむ、さるによりて、年ごろふみども見るごとに、かむがへあはせつゝ、からうじておもひえたることなむある、さてもへば、變格といへる名は、いみじきひがごとにて、世のつねの格といへるべきものなりけり、そはかくこそはありけれとて、そのかたはしをかたりいでたるに、をぢ手うちてよろこびて、筆とりつゝ、いさゝかものゝはしにかきつけられたりき、さるをまたをぢがそれによりて、てにをはのさし辭のかろきと重きとを、こゝろみて、輕さ重さをはかるには、秤といふものをもちゐるにならひて、それを圖に作りいでて、見やすくさとりやすからしめ、また、そのあかしども歌にふみにあまたかゝげいでて、ひとゝぢの書となしつるなむ、この變格辨にはありける、あはれ、まめなるをぢやと、このふみの成りぬるを見て、おのれもまた手うちてなむよろこびぬる、さても、かばかりめでたくなりにたるこの書よ、その成りにたるゆゑよしを、卷のはじめにかきつく、ときは、明治といふ年の十とせあまり四とせの長月の十日ばかりなり、

黒川眞頼



同 秋下

同 恋一

同 恋二

同 恋四

同 俳諧

同

後撰雑二

後拾遺雑上

千載秋下

元輔集

源氏物語

黒河春村
同 真頼

てにをはのくはしきさたあることは、ふるきむかしの書には見えねど、六七百年さきまでは、をさ〳〵いにしへのあとにたがふこともなかりしを、世くだるに隨ひて、やう〳〵みだりになりもてゆきて、いにしへにとほくなりぬるを、二百年ばかりこなた、いにしへ學びひらけしより、おのづから古格にはづれぬがおほくなりにたれど、すべて、たがはじとまでにはあらざりけらし、さるを、鈴舍翁、玉の緒ひも鏡などいへるふみをあらはして、其格あることをときさとされしより、人皆いにしへより、たのづからなるさだまりあることをさとり、また此のふみにもれたるをあさりて、此の道をみがくめるも、またく翁のみたまのふゆによりてなりけり、そも〳〵、三田ぬしは若き時よりの友にて、いまもへだてぬどちなるを、かのふゆの變格といふことに疑ひおこりて、しか〳〵なむ思ふと、黑川翁にとはれしを、翁こたへけらく、そは變格にあらず、輕重によりての定格ならむと、かねて定めおかれきといはれたるを、つばらにきかれて、ぬしがかきつらねられたる、すなはち此の書なり、鈴舍翁のみたま、天がけり聞きたまはば、縣居大人の說を、のちに此の翁考へなほしゝことのごとくなりと、いかによろこぼひたまふらむとさへおもはれて、思ふ心を一こと、書そふるになむ、

明治十六年八月　　鈴木重嶺

玉の緒變格辨

黑川眞頼啓發
三田葆光傳述

總說

本居宣長翁の、てにをは紐鏡、詞の玉の緒、二つの書を著はされて、てにをはは、神代よりおのづから萬の言葉にそなはりて、その本末かなへあはするさだまりあることを、つばらかにとき示されしよりこのかた、今にいたりて、初學びのともがら、まづ此の二つの書にたよりて、おろ〳〵もてにをはのといのへざまをしり得ることゝなりきぬるは、翁のみたまのふゆにこそはありけれ、（おなじころほひ、京都の人富士谷成章あゆひ抄を著はして、古歌のてにをはど

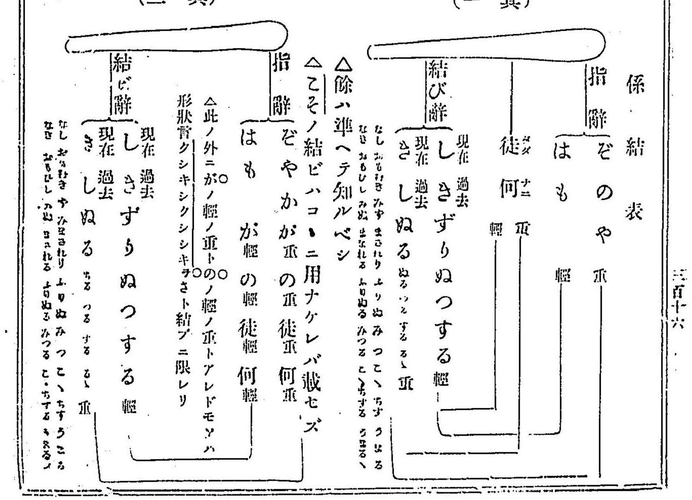
もを、但言ヽ譯して、いと委しくときあかしたるも、さるべき書にはあれど、あまりくさ〳〵に名目など設けなしたるが、かへりてわづらはしくて、とみにはさとりやすからず、初學のため、たよりよからねばにや、さばかりに世に行はれず、おしなべて紐鏡玉の緒をのみ用ゐることゝはなりにたり、〔さてかの紐鏡に、三條の大綱を立て、右はは。も徒、中行はぞ。や何、左行はこそ。と、三種に分け定めて、その詞の結びをさとされ、詞の玉の緒にこと〳〵く、その證歌を擧げられたるに、その定まれる格にはづれながら、てにをは調はずとは聞えぬ歌どもをば、假りに變格と名づけられしよりこのかた、世の人おしなべて、古歌を解くにも、今よみ出づるにも、さる一種の格あるものと心得ることとはなりにたり、黒川眞頼大人のいへらく、こは變格にはあらず、もとより定まれる一つの格なり、さるはさばかりの翁といへども、あらゆるてにをはのかぎり、始めて見あきらめ、新にかの三條の大綱をあみいでられしなれば、さるをち〳〵のことしげきが中には、いはゆる千慮の一失とやらむにて、いさゝか考へもらされしことども、またなきにあらず、いでそのよしつばらかにときあかしてむ、そも〳〵辭の本末かなへあはせ結びとのへむには、本の緊の輕きは、末の結びも輕く、もとの緊の重きは、すゑの結びも重からむこと、おのづからなることわりなり、さて指辭のはもは、輕き辭なれば、その結びとなる辭も|ぬつする|とやうに輕く、ぞ。や。は重き辭なるゆゑに、その結びもる|ぬる|つる|する|る〻|と重くと〻のふるが、定まれる格なり、しかるに、徒は紐鏡にはもぞ。や。何のかゝりのなきを、かりに徒と名目をつけられしなれば、輕きにも重きにもつかざるものなり、また、何もそれとさしたるものもなきほどの言葉なれば、これもまた輕きにも重きにも、一方にはかたよらざるなり、されば、徒と何とは、もと輕重の二種ありて、そのつかひざまによりて、重くも輕くもなれば、輕くいはむときはかろき方に結び、重くいはむときは重きかたにむすぶぞ、古よりの定まれる格にはありけるといはれき、よりて、榛光おもへらく、本居翁は、いまださばかりは深く考へ得られずて、紐鏡をつくられしとき、徒は輕の方、何は重の方と一向にさし極めて、はも徒、ぞ。や。何と二條に分けられしか

らに、詞の玉緒に證歌を引かるゝに至りて、その定めに合ひがたきがあれど、その歌どもは、よくとゝのひて聞ゆれば、とにかくにおもひまどはれて、やむことをえず、かりに變格といふ名をおほせて、さて、變格はくさ〳〵の味はひあるものなれば、みだりにはよむまじきことなりなど、おぼつかなげにさへいはれしならむとぞおぼゆる、さて、その變格とせられたる歌どもを見れば、いづれも前にいへる、徒を重き方に結べると、何を輕き方に結べるとの二つの格にぞありける、(變格とて、定まれる格にはづれながら、てにをはの調ひたるがあらむには、定格はあれども、なきがごときものになりゆくめり、とにかくに、變格といふことおだやかならずとて、疑ひおもへりし人も、はやく世にありしかど、さればとて、いかなる故ぞともを考へえたる人は、いまだなかりき、さるは、義門法師なども、これを疑ひて、その著はせる玉の緒繰分にいはく、こはその理かう〳〵とはいひ難けれど、おのづからなる言靈の然る格と覺しければ、變格といふべきにもあらざらむとさへ、かつは思はるばかりなれど云々といへり、さるを、黒川大人のはじめて見あきらめられしこそ、いみじき卓見にはありけれ、)そは、玉の緒に擧げたる變格の歌、すべて七十九首の中に、はもの指辭をぬる|なると結べる歌三首|はとかゝりてせぬと結べる歌一首、わづかに四首のみにて、その餘は、こと〳〵く徒の重格と、何の輕格との二つなるをもてしるべし、されば、かの四首は、もとより作者のふとかきわやまりしか、さらずは後人のうつしあやまれるものなるべし、(こはかならず、後人のうつしあやまりなること、うつなしとおぼゆれど、たしかなる證據なければ、作者のかき謬れるかとも、二かたにおぼめかしいへれど、猶後人のうつしあやまりなること、疑ひなかるべし、さるは、古への假字は殊になだらかにかきながせるものにて、ようせずば、見たがへらるゝもおほく、また假名文字は、筆のはしるまに〳〵、數おほくかきつゞけらるゝものにしあれば、筆のはこびにて、覺えずかき謬るも多かるものなり、大かた今の世に行はるゝ假字書どもの誤多きは、さるゆゑぞかし、)また、變格に同じくて不調歌とて擧げられたる十首の中にも、八首までは徒の重格にて、變格に異なることなく、又、てにをは不調歌

とゝ擧げたる中にも、此の格の歌あまた見えたり、此の歌ども、ことごとく末に擧げたれば、よく見てあぢはひしるべし、

○今初學びのさとりやすからむために、言葉の本末輕重の結びを、天秤に掛けあはせたる圖を作りて、さし示せり、第一圖を見てしるべし、

○徒と何とに輕重あることは、前にいへるがごとし、しかのみならず、のといふ指辭にも、輕重あれば、（此の事は、すでに玉の緒にもいへり、そのやと中行にのみ置きてはこと足らず、はもの屬なる右行にも輕のを加ふべし、又かといへる辭はやの一きざみ强きにて、結びは大かたやに同じけれど、こまやかにいはば、これもまたぞのやの屬に加へつべきものなり、又がといへる辭も輕重あり、よりて黑川大人の著はされたる、詞の桑に載せたる指辭をとりすべて、輕重をわかち、天秤に掛けたる表を作りて、初學に示さむとす、左の二表を見てさとるべし、



詞の玉緒所載變格歌

後撰一　ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春來にけり
「とおどろかれぬる

同十六　數ならぬ身をおも荷にてよし野山高きなげきをおもひこりぬる

拾遺十六　みなといづるあまのをぶねのいかり繩くるしきもの「と戀をしりぬる

千載八　宮木ひくあづさの柚をかきわけて難波の浦を遠ざかりぬる

新古八　ありし世にしばしも見てはなかりしをあはれ「とばかりいひてやみぬる

同十一　あまのかるみるめをなみにまがへつゝ名草の濱をたづねわびぬる

同十二　みるめこそいりぬる磯の草ならめ袖さへなのみ下にくちぬる

同十八　うきしづみこむよはさてもいかにぞ「と心にとひてこたへかねぬる

同十八　くらゐ山あとをたづねてのぼれども子をおもふ道に猶まどひぬる

同　同　うき身には山田のをしねおしこめて世をひたすらに恨みわびぬる

拾遺十五　○かしまなるつくまの神のつく〳〵とわが身ひとつに戀をつみつる

後拾四　わがやどに花をのこさずうつしうゑて鹿の音きかぬ野邊「となしつる

同二十　八重菊にはちすの露をおきそへて九品までうつろはしつる

金葉九　家の風ふかぬものゆゑはづかしのもりのことの葉ちらしはてつる

千載五　さゝなみやひらの高ねの山おろしに紅葉を海のもの「となしつる

同　六　やかたをのましろの鷹をひきすゑてうだのとだちをかりくらしつる

新古九　はる〳〵と君がわくべきしら浪をあやしや袖とまる袖にかけつる

新後拾八　たなばたは思ひしらなむあまの河いそぐわたりに舟をかしつる

○

古今十五　あひにあひて物おもふころのわが袖にやどをひたすらに恨みわびぬる

る月さへぬるゝがほなる

○

後拾八　春は花秋は月にとちぎりつゝけふをわかれ「とおもはざりける」

新古十七　須磨の關ゆめをとほさぬ浪の音をおもひもよらでやどをかりける

後拾遺十三　はじめよりあふはわかれ「とき」ながら曉しらで人をこひける

源氏藤袴　いもせ山ふかき道をば尋ねずてをだえの橋にふみまどひける

○

後撰十九　ひぐらしの山路をくらみさよふけてこのすゑごとに紅葉てらせる

○

同花八　あふことや涙の玉の緒なるらむ」しばしたゆればおちてみだるゝ

新古五　秋の夜ははや長月になりにけり」ことわりなりや」寐覺せらるゝ

○

源氏乙女　いにしへをふきつたへたる笛竹にさへづる鳥の音さへかはらぬ

新古十七　春の日のながらの濱に舟とめていづれか橋「ととへどとたへぬ」

○

後拾一　世々ふともわれわすれめや」櫻花こけのたもとにちりてかゝりし

詞の玉の緒にいはく、上件の歌ども、いづれも留り下に、かなよをなどの辭を加へて聞く意なるゆゑに、定まりのごとく結びては、かへりて宜し意からず、よく味ひみるべしといはれたれども、そは外に含めたる餘韻餘情などをおしはかりたるにて、しかいひもてゆかば、さる意味のなきにしもあらざらめど、一首のてにをはのとゝのへは、徒の重格なり、

○

拾遺六　谷の戸をとぢやはてつる」鶯のまつにおとせで春もくれぬる

○按ずるに春もは春のか

千載三　どこなつの花もわすれて秋風をまつのかげにてけふはくれぬる

玉葉十　○按ずるに「かけにて」は「かけにぞ」かこひわびてわれとながむる夕暮もなる

れば人のかたみがほなる

○按ずるに「なる」は「なり」か

新古十五　梅の花香をのみ袖にとゞめおきてわがおもふ人はおとづれもせぬ

○按ずるに「せぬ」は「せず」か「おもふ人の」か

此の四首は、はものむすびたがひて調ひがたし、こは前にいへるがごとく、後人のうつしあやまりなるべし、

○

後拾三　いかならむ」こよひの雨に常夏のけさだに露のおもげなりつる

玉の緒に、此の歌は、上にのとあれば、變格にはあらざれども、つるの下へものをといふ辭をくはへて見る意なりとて、猶變格の部に入れられたれど、のとかゝりてつると結べるは、またく常例の格といへるに異なることなし、

○

後撰十一　戀しきも思ひこめつゝあるものを人にしらるゝなみだなに　同十二　おもひ出でておとづれしける山彦のこたへにこりぬ心なに

蜻蛉日記　さだめなくきえかへりつる露よりもそらだのめなる君はなに

同　おく山のおもひやりだにかなしきにまたあま雲のかゝるなに

ひとよだにひさしてふなるあしたづのまに〳〵見ゆるちとせなに

同　から衣たちならしてし百敷の袖こほりつることよひなに

つくばねの峯までかゝる白雲を君しもよそにみるはなに

同豐のむら鳥　涙川ながすねざめもあるものをはらふばかりの露やなに

後撰十一　〈赤嘆ナリ已下同ジ〉

拾遺十七　梅もみな春ちかしとてさくものをまつ時もなきわれやなに

拾遺十八　から衣たつより落つる水ならでわが袖

後拾十一　ぬらすものやなに　なり
うれしきをわするゝ人もあるものをつらきをこふる我やなに　なり
同　同　須磨のあまの浦こぐ舟のあともなく見ぬ人戀ふる我やなに　なり
同花十　雲の上に月こそさやに見えわたれまたとゝこほる物やなに　なり
六　帖　雲もなくなぎたる朝のてる日にもおもはれまさる我やなに　なり
同　つねよりも秋のゆふべのわびしきに堪はいとどあらしの風やなに　なり
蜻蛉日記　いふよりもきくぞかなしき敷島のよにふるさとの人やなに　なり
うつほ祭の使　ゆふされば まろねする身のわびしきになく日ぐらしの聲やなに　なり
同　國ゆづり　ありとのみ見ゆる寐覺のわびしきにひとりあるころの夢やなに　なり
風雅廿　色かへぬ松もなに　なり萬代にときはにほふ花もさければ
六　帖　よの人のいみけるものをわがためになしといはぬはたれがうきなり
源氏若菜下　おきてゆくそらもしられぬあけくれにいづくの露のかゝる袖なり
後撰七　君こぶる涙にぬるゝわが袖と秋のもみぢと、いづれ　まされり
同　九　くや〳〵とまつ夕暮と今はとてかへるあしたといづれ　まされり
後拾十五　くもり夜の月とわが身のゆくすゑのおぼつかなさといづれ　まされり
飼花三　たなばたのまちつるほどのくるしさとあかぬわかれといづれ　まされり
朝恒集　くらべ見むわが衣手と秋はぎの花のいろとはいづれ　まされり
好忠集　夏はぎの麻のをがらとあだ人の心がろさといづれ　まされり
赤染集　秋はてゝいまはさかりのもみぢ葉とつろふ菊といづれ　まされり
土佐日記　わが髪の雪といそべの白浪といづれまされり　おきつ島守
拾遺十四　八百日ゆく濱の眞砂とわが戀といづれ

菅家萬葉下　まされり　沖つ島守
をとめらがひかげのうへにふる雪は花のまがふにいづれ　だがへり
新千載十四　○
卯の花のかきねがくれのほとゝぎすわがしのびねといづれほどへぬ
五社百首　おちたぎつ瀧のうちはの岩のこけわがゆのうへといづれ　つゆけし
金葉二　○
夏の夜の月まつほどの手すさびに岩もる清水いくむすびしつ
新古五　衣うつおとはまくらにすがはらやふしみの夢をいく夜のこしつ
同　二九　みやこをば秋といもにぞ立ちそめし淀の川霧いく夜へだてつ
新古四　たなばたのとわたる舟の梶の葉にいくたなばたのをのへのさくらたづぬればみやこのにしきいくへ覆みぬ
新勅一　秋かさつ露の玉づさ
○
高砂のをのへのさくらたづぬればみやこのにしきいくへ覆みぬ
金葉四　淡路島かよふ千鳥のなく聲にいく夜寐ざめぬ須磨の關守
新古七　年へたる宇治の橋もりことゝはむいくよになりぬ水のみなかみ
狹衣　おもふことなるともなしにいくかへりうらみわたりぬ加茂の川なみ
玄々集　舟出していくかになりぬふるさとは山見ゆばかりけふぞ來にける
新古二　いくとせのはるに心をつくしきぬあはれとおもへみよし野の花
同十四　いくめぐりそらゆく月もへだてきぬちぎりし中はよそのうき雲
元眞集　さきだちてはぎの下葉も色づきぬおくれて秋はいづくまできぬ

右の歌共は、いづれも何を輕き方に結びたる格也、大方之にて玉の緒に、縫格とせられたる事は、徒の格と、何の輕格と、二つの定格なるを知べし、

玉の緒所載同の一格歌

金葉五　長濱の眞砂の數もなにならず つきせず見ゆる君が御代かな

續後撰廿　君が代のかずにくらべばなにならぬ千尋の濱の眞砂なりとも

大和物語　なにばかり高くもあらず　よのつねの比叡を外山と見るばかりなり

堀川百首　あひ見てのあしたの戀にくらぶればまちし月日もなにならぬかな

これらを、一つの格といはれたれども、いづれも何の輕格にて、變格の部に擧げたる歌どもと、同じてにをはなり、又もと受くる格は、結びにかゝはらずとて「ぬれつゝぞしひてをりつる年の内に春はいくかもあらじとおもへば」「うば玉のやみのうつゝはさだかなる夢にいくらぬまさらざりけり」の類の歌十五首を擧げられ、又も文字はあらでも、もとうくる意にて、同じく結びにかゝはらざる歌ども、多く擧げられたり、然はあれど、その結びにかゝはらずといへるは、みな何の輕格なり、こなたかなた見わはせてしるべし、しか結びにかゝはらずといへる類のくさ〳〵あるにても、もとより何は輕重ともに結ぶべき格わることを、わきまふべきことにこそ、

古今十九　詞の玉緒不調歌十首中之八

戀しきがかたもかたこそありときけ　たてれをれどもなきこゝちする

後撰十二　まどろまぬものからうたてしかすがにうつゝにもあらぬこゝちのみする

（△詠嘆）

新古十四　わかれてはきのふけふこそへだてつれ　千代しもへたる、こゝちのみする

（△詠嘆）

同　六　夕なぎにとわたる千鳥波間より見ゆる小島の雲にさえぬる

玉葉十三　をぎの葉にことゝふ人もなきものをくる秋ごとにそよ「とこたふる

同花三　いづくにもわがのりならぬ法やあると　そらふく風にとへどこたへぬ

新古廿　ふたつある心をわれにもたりけり　うし「とおもふにさてもわすれぬ

（△詠嘆）

玉葉十三　これやさはかはるなるらむ　そのふし「と見えぬ物からありしにも似ぬ

（△詠嘆）

風雅十三

右の歌どもは、いづれ變格の例なれど、いやしげにきこえてとゝのはずとあれども、みな徒の重格にて、上にあげたる變格と異なることなきを、かれは變格にてとゝのひ、これは同じ例なれども、いやしげにきこえてとゝのはずとは、何のけぢめをもて定められけむ、いぶかし、おそらくは、本居翁の耳に、ふとおぼつかなげにきゝなされたるまゝに、不調歌とせられたるなるべし、

同てにをは不調歌中之歌

玉葉十　ちぎりしもよも「とたのまぬこの夕まつ　とはなしにしづ心なき

同十七　さきだつもとまるもおなじ夢の世によそに驚く身さへはかなき

風雅十三　かはりたつ人の心の色やなに　うらみむとすればそのふし「となき

新古六　冬のきて山もあらはに木の葉ふりのこる松さへ峯にさびしき

玉葉十四　あまをとめかよふ雲路はかはらねど　わがたちなれし世のみこひしき

同十三　おもふ人こよひの月をいかに見るや　つねにしもわらぬ色にかなしき

（△詠嘆）

風雅十七　はるけすてさてや「とおもふ恨のみふかきなげきにそへてがなしき

亜之集　千とせをばひなにてのみや過しけむ　をづるの池「といひてひさしき

新勅十六　おいぬれば今年ばかり「と思ひこし　また秋の夜の月を見るかな

風雅十四　しらざり」ふかきうらみはうつりはつる人にて人の見えけるものを

拾遺十八　かきつくる　こゝろみえなるあとなれど見てもしのばむ人やある「とて

新古四　人よりもこゝろのかぎりながめつる　月はたれ「ともわかじものゆゑ

（△詠嘆）

風雅十七　世の中のうきたびごとになぐさむる　しいくほどのなからましかば

右の歌どもまた、徒の重格にて變格に異なることなきを、いかで不調とは定められけむ、

同稱萬葉集中てにをは不調歌例

十九　天地とあひさかえむと大宮をつかへまつればたふとくうれしき

十四　いもをこそあひ見にこしか〻まよびきの横山べろのしゝなすおもへる

十　秋田かるかりほをつくりわがをれば衣ろもで寒く露おきにける

四　いきてあらば見まくもしらに〻なにしかも〻しなむよいも〻といめに見えつる

九　風莫の濱のしら浪いたづらにこゝによりくる〻見る人なしに

十四　むさしぬのをみぬ見かくしわすれゆく君が名かけてあをねしなくる

十八　ほとゝぎすいとねたけくは立花の花ちる時にきなきとよむる　（ナヲ　ナヲ　今咏嘆）

同稱萬葉集中てにをは如誤非誤歌例

四　うまざりを三わのはふりがいはふ杉手ふれしつみか〻君にあひがたき

二十　うらめしく君はもあるか〻やどの梅のちりすぐるまで見しめずありける

七　玉づさのいもは玉かも〻わし引のきよき山邊にまけばちりぬる

十　秋の夜の月かも〻君は雲がくりしばしも見ねばこいだこひしき

十一　きのふ見てけふこそあひだ〻わぎもこがこゝだくつぎて見まくほしきも

右の歌ども、前の七首は、てにをは違へる歌とし、後の五首は、違へるに似てたがへるにあらずといはれたれど、いづれも徒の重格にて、いはゆる變格に異なることなきを、いかなれば、しか二つにはきゝわけられけむ、

○

二十　ほとゝぎすまづなく朝けいかにせばわが門すぎじ〻かたりつぐまで

此の歌も、てにをはたがへりといふ中に入れられたれども、こは何の輕格なり、此の外、玉の緒古風の部に擧げたる、詞づかひのことにつきても、眞賴大人の委しく辨明せられし說どもあれど、そは變格にあづからざれば、此の卷にはしるさず、

同てにをは不調歌中之一二

古今十　ほとゝぎすみぬの雲にやまじりにし〻ありとはきけど見るよしもなき

上にぞのや何等のてにをはなくして、きと留れる歌、八代集の中には、此の一首のみなりとあり、げに結句のむずびとゝのはざれば、不調の部に入れられしはうべなり、しかるに、其後校合本には、見るよしもなしとあり、されば、普通の本になきとあるは、はやくよりうつしあやまれるが、世には多く傳はりたるなるべし、さて、此の結句をなきにては不調とするにつけても、變格の部に擧げたる、

「谷の戸をとぢやはてつる〻答のまつにおとせて春もくれぬる

「とゝ夏の花もわすれて秋風をまつのかげにてけふはくれぬる

「とひわびてわれとながむる夕暮もなるれば人のかたみがほなる、

「梅の花、香をのみ袖にとゞめおきてわがおもふ人はおとづれもせぬ

是等みなちやまりなるをしるべし、もし春もくれぬる、けふはくれぬる、夕暮もなるれば人のかたみがほなる、人はおとづれもせぬなどと結びたるが變格にてとゝのふべくば、見るよしもなきとても、とゝのはずとはいふべからずなむ、

同變格不調歌中之一二

新拾八　風雅十三　とゞぬ人をまつ秋風の寢覺にはわれさへあやな旅ごゝちする

なほざりに人は見るらむ玉づさにおもふ心のおくはのこさぬ

此の二首は、はの指辭を「する」「のこさぬ」と結びたるげにとゝのはず、きはめて書損なるべし、さるは、世に傳はれる兼輔集は、誤字いと多かれば、新拾遺集にも誤字のまゝとられたるなるべし、又風雅集には、とゝのひのよろしからぬ歌ども多く見ねたれば、これかれともに證とするにたらずなむ、

○變格の辨は、大かたこゝにつきぬといふべし、因に、はじめにいへるのとがの輕重の證歌を、いさゝかづゝとり出でて初學に示す、

「の」の輕格

のの重は、常例の格にて、詞の玉緒三轉證歌に多く擧げたれば、今載するに及ばず、

古今四　まつ人にあらぬものから初鴈のけさなく聲のめづらしきかな
後撰二　春霞たちて雲ゐになりゆくは鴈の心のかはるなるべし
拾遺十三　ながめやる山べはいとど霞みつゝおぼつかなさのまさる春かな
金葉一　ちりかゝるけしきは雪のこゝちして花には秋のぬれぬなりけり
千載六　玉づさに涙のかゝるこゝちしてしぐるるそらに鴈のなくなり

「が」の重格

古今十九　さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやぐ霜夜をわがひとりぬる
拾遺一　わがやどの梅のたち枝や見ねつらむ『おもひの外に君がきませる
同十九　われぞそはにくゝもあらぬ『わがやどの花見にだにも君がきませる
萬葉二　わがせこをやまどへやるとさよふけて曉露にわがたちぬれし
同　さゞ波の志賀さゞれなみしぐ〳〵につねにと君がおもほせりける

後撰九　秋の田のいねてふことをかけしかばおもひいづるがうれしげもなし
拾遺二十　世の中にあらましかばと思ふ人なきがおほくもなりにけるかな
六帖　よの人のいみけるものをわがためになしといはぬはたれがうきなり
萬葉七旋頭歌　はる日すら田にたちつかる君はかなしも『若草のつまなき君が田にたちつかる
同十四　ひのくれにうすひの山をこゆる日はせなのが神もさやにふらしつ

「が」の輕格

古今十三　うつゝにはさもこそあらめ『夢にさへ人めをもると見るがわびしさ
後撰三　風をだにまちてぞ花のちりなまし『心づからにうつろふがうさ
同十六　なほき木にまがれる枝もあるものをけをふきさずをいぶがわりなさ
萬葉四　家にして見れどあかぬを草まくらたび

同　にもつまどあるがともしさ
　とほくあらばわびてもあらむを里ちかくありときゝつゝ見ぬがすべなさ

「の」の輕の重格

古今四　秋はぎをしがらみふせてなく鹿のめには見えずておとのさやけさ
同十八　鴈のくる峯の秋霧はれずのみおもひつきせぬ世の中のうさ
同序　さく花におもひつくみのあぢきなさ『身にいたづきのいるもしらずて
後撰十四　あふばかりなくてのみふるわが戀を人めにかくることのわびしさ
同二十　夕されば袖にゆくをしのひとりして妻こひするなる聲のかなしさ

右の歌どもにて、のがに輕と重と輕ノ重との三種あることをわきまふべし、玉緒三の卷のノ部には、くさ〳〵に名目を分ちて、かず多く載せたる中に、今のノ輕格に擧げたるたぐひをば、いとまれなる例にて、其の歌のいきほひによれるものなり、ゆめゆめ、これらを思ひて、みだりにはよむべからずといはれしは、輕重の格あることを、よく見とめられざりしなりけり、

文章部

てにをはのさだまりは、文章とても歌にことなることなきは、詞の玉の緒にいはれたるがごとし、さてその玉緒に、變格と名づけられたる徒の重格何の輕格も、また歌に異なることなし、さるを、玉緒文章の部にいはく、古歌のはし書どもに「ふるとしに春たちける日よめる」『雪の木によりかゝれるをよめる』『歌奉れと仰られける時よみて奉れる』『梅の花ぞをりて人におくりける』のたぐひ、上にぞのや何などの辭なければ、よめり奉れりおくりけりといふべき格なるを、りといはずしてといふは、いかにといふに、すべて歌のはし書は、その歌へかゝりていふものなるゆゑに、常のとぢめとは異にして、語は切るとも意は切れずして、やがて歌へつゞくなり云々といはれたれ共、これらみな歌へかゝるにもあらず、又よめる歌といふべき、歌といふ文字をはぶけるにもあらず、本居翁の變格と名づけられたる辭とおなじく、徒の重格に結びたるものなり、そは細注にしるせる「櫻の

花のちるを見なる」「藤の花松にかゝれる」「初鴈を聞ける」「稲かりほせる」などもおなじ格なるをもて、歌へかゝりたるにもあらず、歌といふ文字を省けるにもあらぬことをしるべし、又「山里に郭公鳴きたり」「野山に花の木ほれり」「霧山をこめたり」女の家にいたりてたてり」などは、徒の輕格なりとしるべし、その外古き文章のうちには、かの變格と名づけたる徒の重格何の輕格多くあれども、今いさゝかとり出てて左にしるす、

伊勢物語　花のしなひ、三尺六寸ばかりなむゆりける、それを題にて歌よむ、よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじまうけしたまふ「とききて、來りければ、とらへてよませける」もとより歌のことはしらざりければ、云々、

同　むかし仁和のみかど、せり川に行幸したまひける時、なを翁の、今はさることにげなく思ひけれど、もとつきにけることなれば、大鷹の鷹かひにてさむらはせたまひける」すりかりぎぬのたもとに、鶴のかたをつくりて云々、

源氏物語箒木　こと人のいはむやうに、こゝろえずおほせらるゝ」とて中將にぐむ、

同若紫　すてしたちいでて見わたし給へば、高き處にてこゝかしこ、僧坊どもあらはに見おろさる」、

同　もしわれにおくれて、そのこゝろざしとげず、この思ひおきつるすぐせたがはば、海にいりねと、つねにゆめごんしおきて侍る」などきこゆれば、

枕草紙　たま〳〵、此の道にまかりいりにければ、かうだにわさまへられ侍る」といふ、

同　くらうなりて、物くはせたれど、くはねばあらぬものにいひなしてやみぬる、

同　しろきしさし、おしたゝみて、これにたゞいまおぼえむふること、一つづゝかけ」とおほせらるゝ、

大鏡　あなを侵りては、いひいれ侍りけめ」とおぼえ侍る、

同　いかばかりおぼしめしけむ」とおぼえ侍りし」、上件にあげたるは、みな上にぞのやが等の辭なければ、けり」侍」おほせらる」見おろさる」やみぬ」侍りき」といふべきを、る」と結べるは、徒の重格

なり、

源氏物語葵　かゝることをきゝ給ふにも、朝貌の姫君は、いかで人にに」「とふかうおぼせば、

空穗樓の上　そよ、それにつけても、ものおもはせたてまつりけむを、おもふに、いとくるしうなむ」いかで昔の世の中のことをかけじ」そのたまへば、

四十二物語　見めよく品高くやさしき上臈の、よもぎ打ぐらにとぢられて、あさましくすたれてなぐさむものとては、うたをよみ、管絃をし、口をくらしたらむと、また年よりたる賤しきおきなが、ぜにのたはらによりかゝりて、翁がものこそわどぜが物よと、わなゝきふんはんいぷれなるべし」、

これらは、何の輕格なり、このほかもあれど、さのみおほく擧げむも、わづらはしければはぶきつ、餘はなずらへてしるべし、

○此の變格辨は、おのれ近きころ、黑川眞頼大人にこひて、活語屬辭のうへの疑はしきことども、なにくれとなく問ひきゝける時、大人の、ときしめされし中の一くだりにて、そをみづからの心おぼえばかりに記して、文机のほとりにさしおきつるを、したしき友だちの見て、こは歌學びするともがらのためには、いとえうある書たれば、わたくしものにのみひめおかで、おなじくは、板にゑらせて、世におほやけにせよと、せちにすゝめらるゝまゝに、おのれもまたおもふに、變格のことは、本居翁の疑をのこされしよりこのかた、世の人も、かつはいぶかしみ思ひながら、べちに考へ出でたるよしもあらねば、疑をつたへて、さる一つのてにをはのありとのみおもひをりしを、翁身まかられてより八十年あまりの今にいたりて、はじめて黑川大人の考へえられて、あきらかに疑の解けつるも、さはいへど、ささに翁の疑を殘しおかれたる賜ものによりてなるべし、されば、かりそめなる此一卷も世にあらはれて年久しき、人のまどひをとくたづきともなりなむには、翁も泉下によろこび給ふべく、黑川大人もまたひとつ心のうちにのみさとりてありつゝも、問はざれば答へずといふらむやうにて過し給ひなむは、道のためうれたしとも、あたらしともなげかれぬべき業ならずやは、さらば、大人のため、おのれ木鐸ともなりなましとて、かう

すり卷には、ものしつるになむ、時は明治十四年といふ年の八月ばかり、三田葆光しるす、

天耳遠波の變格の事は、玉緒にもなほたど〳〵しげにいひ置れ、みな人もおぼつかなくのみ思ひわたれるを、此辨一見れば、げにとうべなはれて、めづらかにもおもひ得られたるかなと、まづそのざえのかしこきと、思ひかねのかいなでならぬとに驚かれぬ、かくておもへば、もとより徒の重格何の輕格にして、さらにうたがふべきふしなきがごとくなれど、すでに此書の中にもいはゆたるごとく、本の輕さは末の結びもかろく、もとの重さはするのむすび重からむが、おのづからのことわりにして、いはゆる徒なるは、はものかゝり、たになきほどなれば、かろきをもて主といふべく、何のたぐひは、そのゆるよしをうたがふ辨なれば、重きをもて本性といはざるべからずやあらむ、さる故にか、この變格といふかきりは、おしなべて定まれる格にいへるとは、やうかはりて、玉緒にもいへるごとく、言葉をいひ殘し餘情をこめたるさまに聞ゆといはど、なほ玉緒のもとのすぢに心ひかれたりと笑はれぬべけれど、しかのみにはあらず、さればゝ、變格といふ名はあしからめども、なほおしなべたるてにをはの定めにはするがたくやあるべき、徒を重く結び何をかろくむすべりといふあげつらひは、いとめでたく、かならず此理より出たる事と思はるれど、正面變則のけぢめはある事とすべくや、此辨の大かたの上には、万人なれど、いさゝか思ふふしを書そへて、なほ後のかうがへをまたむとす、

明治十四年の冬　本居豐穎

もこそ問答

質問「もこそ」といふ詞の事

過ぎし比、大人の說き給へる御言の中に、もこそといへる辭の結びにあれ しれ すれ みれ などいふは、已然言なるを、將然の事・用ゐるは誤なり、將然のときはもこそ あらめ しらめ せめ 見め とこそいふべけれ、詞の玉の緒に、もこそは、行末をおしはかりておやぶむ意の辭なり、つねのこそと意かはれり、ぞとゝぞとのけぢめのごとしとあるは、鈴屋翁の、ふとしかきゝなされたるあやまりにて、語格におきて、さることわりあるべくもあらず、古歌の中に、しか聞きなさるゝがありとも、尚よく味はひ見れば、つねのこそその格に異なることなきなり云々、此の御說、語格におきては、一わたりさることゝは聞え侍る物から、愚なる心には、とみにもえさとりがてにて、猶いかにぞやとかたぶかれ侍れば、いかで、つまびらかに問ひあきらめて、惑ひを解かまほしうなむ、そも〳〵こそ あれといふとこそ あらめといふとの、已然將然の差別は、大かた初學びの輩とても、心得たるほどの詞格にて、そは疑ふべくもあらねど、もこそとぞとの辭は、吾も人も早く玉の緒の說の先入となりたればにや、大かた古歌の意も、かの書にいへるが如く、行末をおしはかりたるおもぶきにのみ聞きなさるゝが多かれば、此の比、八代集の中もこその辭を用ゐし歌のかぎり拔きいでて、玉の緒の說と大人の御說と、二つながら俚言に譯し試み侍るに、いづれにしても、聞ゆるもあれど、猶多くは未然をおしはかる意とせずては、てにをはもとゝのはず、歌の意もたしかに解きえがたきさまになむおぼえ侍る、よりて、おのれひそかにおもふに、こそといひてあれ すれと受くるは、已然言の格なるは、もとよりの事ながら、もこそのむすびとなる時は、おのづから、未然を押はかる意ともなれる一種の辭にはあらじか、たとへば、辭の上にはけりといひするて、一首の意はけらしの如く物を押はかりたる意の歌あり、（玉の緒に、おしはかるけりといへる條を揭げて、十一首の證歌を擧げたり「おしなべて花の盛りになりにけり、山の端ごとにかゝるしら雲」「岩間には氷のくさびうちてけり、もりこし水もたえて音せず」「ふりつみし高根のみゆきとけにけり、清瀧川の水のしら浪」等の類、）また、てーかな にしがなは打まかせては願ふ意なるを、稀には願ふ意ならぬつねの哉といへる所に用ゐたるもあるなどやうの類ひにて、すこそも押はかると、しからざると兩樣に用ゐらるゝ辭ならむかとぞ覺え侍る、いかにとなれば、古き歌にもこそ あらめ しらめなど結びたる歌一首もなし、しかいふべき處

も、みなあれ しれと結びたり、もしあれとあらめと意異なるべくば、千有餘年以來、數かぎりもなき歌の中に、たえて一首もなき理やはあらむ、（さもこそあらめといへるは多し、）かくは申し試み侍る物から、おのれもとより詞の學びにくらく、すべて暗中摸索などいふ押はかりにしあれば、極めてひがごとなるべけれど、さいつころ、大久の御說をうけたまはりしよりこの方、とかく心におちゐず、いぶかしみおもへるは、おのれ一人のみにも侍らずなほざりにきゝ過すべきことにしもあらねば、口さがなく御說をもどくには侍らねど、疑はまどひをとくはしにこそとて、おもひよれることども心殘さず申し試み侍るなり、こひねがはくは、いとまあらむをり、つばらかにときさとして、吾人のまどひを解き給はむことを、あなかしこ、

明治十三年七月　三田葆光

黑川眞頼先生

眞頼云、鈴屋翁の、行末を押量りてあやぶむ意の辭なりといはれたるは、誤といふばかりにはあらねど、それにしたがひて、心ゆる人のあやまりもてゆくをみれば、誤りといはざるをえざるなり、

又云、古今集遠鏡に「色にはいでじ人もこそ しれ」といへる歌を、「色ニハ出スマイ、人ガ知ラウモシレヌホドニ」とやうに解せられたるをみれば、「知れ」といふ詞を、またく將然にとかれたり、然らば誤れりといふべし、北邊成章、黑澤翁滿なども、此の誤をまぬかれず、

一首の歌の意に、或は未然の意あるは、もこそすれといふのみにはかぎらず、けりつぬ等にもあるなり、これを何ぞもこそすれのみにかけてはいはむ、

未然を押し量るといふより、やゝ誤を醸すなり、こは物を押さはむる意と心得給ふべきにこそ、けりのけらしと同意に聞ゆるは、一首の上にて解するがゆゑなり、けりとけらしと同意なるにはあらず、さるを、これを同意なりといふは、もこそすれと、もこそすらめと同意なりといはむがごとし、「哉」とかなとは、異なること勿論なれば、こゝに引き出づべきにあらず、

もこそに緩急の二種あり、二種にときわくべし、さ

るは何ぞもこそにのみかぎらむ、こそにもぞやかなどにも、皆あることなり、

古き歌にもこそあらめといへるは、一首もなし、しかいふべき所は、皆あれと結びたりといはれたるは、げにさることなりいまく考ふるに、あれと結ぶかたよろしきなり、おのれも、さいつ比は少しこゝろよからぬもあるやうにおもひしかども、よくよみ味ふに、よく道理にかなひて聞え侍るなり、

新舊譯對照

古今二　花みれば心さへにぞうつりける色にはいでじ人もこそしれ

舊譯（詞の玉緒の說、古今遠鏡の譯等をいふ、）

色ニハ出スマイ、人ガ知ラウモシレヌホドニ、

新譯（黑川眞頼大人ノ解）

色ニハ出スマイ、人ガマアキツト知ルガマア

○こそハウタガヒナクト解シテモ、大カタ同意ニ落ツメリ、イヅレニ心得テモヨロシ、

古今四　ごよひこむ人にはあはじ柳機の久しきほどにまちもこそすれ

舊、柳機ノ久シイ一年ノ間ヲ待ツノニアヤカッテ、コチモ久シウ待ッヤウナ中ニナルコトモアラウホドニ、

新、柳機ノゴトク、久シキホドニ、待ツトイフコトヲマア、キットスルガマア、

後撰十三　淵なから人かよはさじ涙川わたらば淺き瀨もこそは見れ

舊、人ガ渡ラバ、淺キセモ見ラレヤウホドニ、

新、人ガ渡ッタナラ、淺キセヲマア、キット見ルガマア、

拾遺十六　おもふことといはでやみなむ春霞山路もちかしたちもこそきけ

舊、立チカウモシレヌホドニ、

新、立チマア、キットキクガマア、

千載三　さみだれにぬれ〳〵ひかむわやめ草沼の岩がき浪もこそてせ

舊、浪ガコサウモシレスホドニ、

新、浪ガマア、キットコスガマア、

新古今六　みかりするかなのゝみのにふるあられあなかままだき鳥もこそたて

舊、早ク鳥ガ立テシマウデアラウホドニ、

新、早ク鳥ガマア、キツトタツガマア、

同十八　かくばかりうきをしのびてながらへばこれよりまさる物もこそ　おもへ

舊、ナガラヘテアラウナラバ、マタコレヨリモマサル物思ヒガ、アラウモシレヌ、

新、ナガラヘテアラウナラバ、マタコレヨリモマサル物ヲマアキツト思フガマア、

以上七首、詞の玉緒にもこそは行末を推はかりてあやぶむ意の辭なり、つねのこそと意かはれり、ぞともぞとのけぢめのごとしといへる證歌に擧げたるものなり、

眞賴曰、行末をおしはかることは、一首の上の言外にある事にて、もこそにあるにはあらず、ぞも又同じ、

後撰九　人のうべのことゝしいへばしらぬかな君も戀するをりもこそ　あれ

舊、君トテモ戀スルヨリモアラウモノヲ、

新　君モ戀ヲスルヨリモマア、キツトアルガマア、

拾遺一　身にかへてもやなく花を惜むかないけらば後の春もこそ　あれ

舊、イキテアラウナラバ後ノ春モアラウモノヲ、

新、イキテアラウナラバ後ノ春ガマア、キツトアルガマア、

新　古　山ざとの庭よりほかの道もがな花ちりぬやと人もこそ　とへ

舊、花ガ散タカトテ、人モトヒテ來ヨウホドニ、

新、花ガチツテイヌヤトテ、人ガマア、キツト訪フガマア、

拾遺十一　おもひしる人もこそ　あれあぢきなくつれなき戀に身をやかへてむ

舊、我ユエニ、死ンダカト思ヒシル人モアラウホドニ、戀ニ身ヲカヘヨウカ、

新、我故ニ死ンダカト、思ヒシル人ガマア、キツトアルガマア、

以上四首、同書に同じ事ながら、即、行末を押はかりあやぶむ意のなきなりとて、擧げたる歌なり、

眞賴曰、本居氏は、歌一首の上にて、解せらるゝゆゑに、てにをはを解くに至りて、粗になりゆき、遂に別種のものなりと認むるに至れるなり、

解　說　例

以下十七首は、八代集の中より、歌の意、もはら玉の緒の說のごと聞ゆるかぎりを拔き出でたるなり、但、もこそといふとも、せめ　しかなどと受けて、將然已然の紛らはしからぬは擧げず、又同書に、常のこその上にものの添ひたる歌とて、擧げたると、ぞのもこそと同意なりとて、擧げたるとの歌をも書き加へたるは、彼是をおもひわたし引くらべ見て、その異同を心得べきためなり、

後撰一　さくら花けふよく見てむ異竹のひとよのほどにちりもこそ　すれ　散ルコトヲマアキツトスルガマア

同十四　わたりてはあだになるてふそめ河の心づくしになりもこそ　すれ　ナルコトヲマアキツトスルガマア

拾遺夏　夏の夜の心をしれるほとゝぎすはやもなかなむわけもこそ　すれ　アケルコトヲマアキツトスルガマア

同　秋　枝ながら見てを歸らむもみち葉はをらむほどにもちりもこそ　すれ　散ルコトヲマアキツトスルガマア

同物名　むらさきの色にはさくなむさし野の草のゆかりと人もこそ　しれ　人ガマアキツト知ルガマア

同雜下　いなをらじ露にたもとのぬれたらば物おもひけりと人もこそ　しれ　人ガマアキツトシルガマア

同十一　いかにして、しばしわすれむ命だにあらばあふせのありもこそ　すれ　アルコトヲマアキツトスルガマア

後拾遺　けふみずばあすもたづねむ山櫻夜のまの風にさきもこそ　すれ　サクコトヲマアキツトスルガマア

同　四　まだよひに寢たる萩かなおなじ枝にやがておきゐる露もこそ　あれ　降ガマアキツトアルガマア

同二十　はかなくもわすられにける扇かなおちたりけりと人もこそ　しれ　人ガマアキツトシルガマア

金集四　いかにせむする墨の松山浪こさばみねの初雪きえもこそ　すれ　消ルコトヲマアキツトスルガマア

同　八　おとにきく高しの濱のあだ浪はかけじやそてのぬれもこそ　すれ　ヌレルコトヲマアキツトスルガマア

同　八　ちらぬまにいまひとたびも見てしがな花にさきだつ身ともこそ　なれ　身トマアキツト成ルガマア

詞花九

千載十五　よしさらば君にこゝろはつくしてむまたも戀しき人もこそあれ（人ガマア キツト アルガマア）

新古十三　つらきをもうらみぬわれにならふなようき身をしらぬ人もこそあれ（人ガ マア キツト アルガマア）

同十三　よしさらば後の世とだにたのめおけつらさにたへぬ身とゝこそなれ（人ガ好トマア キツト ナルガマア）

同十五　ゆかちかくあなかまよはのきり〳〵す夢にも人のみえもこそすれ（見エルコトヲマア キツト スルガマア）

以上十七首の歌、いづれも、玉の緒の説のごとく、未然をおしはかる意を聞え侍り、いかゞ、

眞頼曰、一首の上には、未然を推し量る意のありともいふべし、されど、それは言外にあるにて、詞の上にはあるもあり、なきもあり、ばよりかゝるは、皆未然の意、いとあらはなり、

如此解説して味へば、もこそすれもぞすると常のことすれもぞすると異なることなきなり、

詞の玉緒所載一種例

古今十三　うつゝにはさもこそあらめ夢にだに人めをもるゝと見るがわびしさ（サウマア キツト アラウガマア）

拾二　春かけてきかむともこそ思ひしか山ほとゝぎすおそくなくらむ（マア キツト オモツタガマア）

同十二　玉ぼこの道もこそ人はゆけなど時のまもみねば戀しさ（マア キツト 人ハユクガマア）

六帖　月夜にはこぬだにもこそまつときけくるをもかへす物にざりける（コヌ人デモ マア キツト マツトキ クガ マア）

大和物語　かくさける花もこそあれわがためにおなじ春とやいふべかりける（花ガマア キツトアガルマア）

山家集　あはれとも心におもふほどばかりいはれぬべくはとひもてせめ（トコフトヲマア キツト セウ ガマア）

後撰十五　ふりぬとて思ひもすてしから衣よそへてあやなうらみもぞする（恨ムコトヲ マアサア ソレヲ スルデアル）

金葉一　春雨にぬれて歌ねむやまざくら雲のかへしのあらしもぞふく（マアサア ソレガ フクデアル）

詞花三　秋山の清水はくゝむじにごりなばやどれるつきのくもりもぞする（クモルコトヲマア サア ソレヲスルデアル）

新古　玉の緒よたえなばたえねながらへばしのぶることのよわりもぞする（ヨワルコトヲマアサアソレヲスルデアル）

後撰五　天の川流れて戀ひはうくもぞあるあはれと思ふせにはやくみむ（ウクマアサアソレガアル）

定家卿　柴の戸のあさみゆばかりしをりせよわすれぬ人のかりにもぞとふ（マアサアソレガ訪フデアル）

新古　うつろはでしばしのだのもりを見よかへりもぞする（カヘルコトヲマアサア ソレヲスルデアル）

千載　みちのくのしのぶもぢずり忍びつゝ色にはいでじみだれもぞする（ミダル、コトヲマアサア ソレヲスルデアル）

眞頼曰、萬葉集巻一「あささらば今も見るごとつまごひに鹿なかむ山ぞ高野はらのうへ」といへる歌も、上には文字ありて、下にぞとうけたり、

これらもおなじほどのこゝろばへにて、「秋さらば鹿なかむ山にぞある」といへるなりと、秋より已前に決定していへり、拾遺の「身にかへてあやなく花をゝしむかないけらば後の春もこそあれ」といへるにおなじ、されば萬葉のうたは、秋さらば鹿なかむ山にぞあらむとやうに解してはわろきなり、

餘論一　三田葆光述

もこそ　もぞの辭、ともに右の俚言を以て譯せるがごとく、將然にもあれ已然にもあれ、其の事を押極め、思ひ定めていへる辭なり、押はかりたる意に見ゆるがあるも、そは言外にあるにて、辭の上にあるにはあらず、さて右の歌どもの中、「玉の緒よたえなばたえね」といへる歌は、常時の風調にて、詞巧みに心深く切なる戀の情を、よく盡したる歌にて、小倉百首にも入りたれば、殊に人口に膾炙せる故、今此歌の大意を、例の俚言に譯して辭の意味を說き明してむ「吾ガ命ヨ、死ヌルナラ死ンデシマヘ、長ラヘテアラウナラバ、今マデコノヤウニ忍ンデキタ心ガダンダンヨワツテ、所詮長ク忍ビオホスルコトハナラヌデアル」と、たしかに思ひ定めていへる辭なり、しか押極め思ひ定

めたるに、切なる戀の情言外に思ひやられて、いとも いとも哀れ深く聞ゆるなり、しかるをもし、これを推し量る意なりとて、「忍ぶることのヨワラウカモシレヌ」とやうに解しては、よわりもやせむといふと同じ意になりて、さては、「ナガラヘテアラウナラバ大カタヨワリモスルデアラウ」といへるほどのゆるやかなる辭にて、情凝切迫せる心詞に相叶はず、作者の本旨にたがひ、あたら名歌の深味を、かへりて淺々しく解きまぐるものといふべし、又一つ、今日の俗談に喩へいはむに、「私ノ願トマスコトヲ御聞入レ下サレヌトキハ私ハ生キテハヲリマセヌ死ンデシマイマス」といふは、未死なぬ中の言葉なれば、將然言なれど、さはいへ、押はかりにはあらず、自必死と思ひ定めていひたる事なり、然るをもし、その口上を取次ぎて傳へ言ふ者が、「何某が申すに、其の願ひ事を御聞入レガナケレバ死ヌカモシレマセヌ」と申したりといひては、本人がいひし所とは、語勢の緩急輕重大に相違し、本意にたがふ事ならずや、これらの意味にて、とくと會得すべき事にこそ、

○伊東祐命云、もこそ問答數回熟覽熟慮致し候に、黒川翁の答に、未然をおしはかるといふよりやゝ誤りをかもすなり、こは物をおし極むる意と心得たまふべきにこそとある、前賢未發の確論、まことに惑を解くに足れり、おのれも、此の辭の意始めてよくわかり申候、殊に餘話の玉の緒よの歌の俚言解は、明瞭にして一點の遺憾もなし、此の卷に因りて、疑を解きし事、君と黒川翁との贈物、容易にはおもひ侍らずかし、さはあれど、黒川翁の俚言にあてゝ古歌を解かれたるには甚、うけがたき所侍り、さるは、

花みればこゝろさへにぞうつりけるいろにはいでじ人もこそしれ
ソノトキ人ガマアキットシルガマア

いづれの歌も皆此の定にとかれたり、もにマアをあてられたるは歎息と見られしか、歎息のもは必かなしもうれしもつもはも、又句の半ばにあるも、さえても月のなどのごとく、てにをはの下にのみ付きて、體語に付きたるはなきやうなり、

眞賴曰、もこそのもの文字は、咏歎なる事勿論なり、指辭のもとおもはれたるは違へり、指辭といふものは、もと一雙並び、ぞやど一雙に並ぶものなり、さればは何といはるゝ所はも何ともいはれ、ぞ

何といはるゝ所は、や何ともいはるゝが定まりなるものなり、これぞ指辭と咏歎とを見定むる一つの標目なる、「色にはいでじ人もこそしれ」とはいはれど、「色にはいでじ人はこそしれ」とはいはれず、これ咏歎の明徵なり、されば、すべてこそにつぐもは、皆咏歎と知り給ふべし、もし指辭のもつく者として論ずる人ありとも、はのつかざるにて論は盡さぬべし、さるはもこそといふ辭はあれども、はこそといふ辭はあらざればなり、故に此のもこそは、咏歎のもなりと定めて會得すべし、かなしも うれしも其の餘こゝに擧げたる證は辭(ヲテニヲハ)の下につきたるをのみ、たま〳〵思ひ出されて、さやうには心得られたるなり、「かたまもよ」「ふくしもよ」萬「今もかもさき匂ふらむ」古「けふもかも」等の類、みな體言よりつゞく咏歎なり、されど今論ずる處はこれとは別にて、もこそはもこそと熟したる一つの辭なれば、此の論はこゝに要なき事なり、

玉の緒には、たゞ未然をおしはかりあやぶむとばかりいはれて、しかるゆゑをとかれざれば、いふにたらねど、橘守部翁の助辭本義は、よく解かれたりと覺ゆれば左に擧ぐ、

「ふりぬどてたもひもすでしから衣よそへてあやならうらみもぞ する
「ふる雨にぬれてたづねむやまざくら雲のかへしのあらしもぞ ふく
〔守部ノ解〕もは既にいへる如く、物を相兼る辭にて、常は大かた甲と乙と相兼ね、此と彼とを並べ比していふ類なるを、此もぞと、又下のもこそなどの時は、それとは異にて、今と今より後とを相兼ていへるが、やがてその指辭の相助けて行末を危ぶむ意とはなれる也、さればこゝの歌の「うらみもぞする」は今より後を兼て思ふに恨みぞするの意なり、又「あらしもぞふく」は明日をかねて按ずるにあらしぞふくと危ぶめる也、猶いづれにつけたるも、此意もて心得べきなり、

此の解、大かたよろしげなり、されど、押極めていふとの新發明によりて、これを引直さむに、

〔祐命今按〕もは物を相兼る辭にて、常は大かた甲と乙と相兼、此と彼と並べ比するを、此もぞ又下のもこそなどの時はその兼ざま少し異なり、さるは、

今の事に後を思ふ意を兼ね、ぞ、こそを以て其意をつよめておし定むる也、されば こゝの歌の「うらみもぞする」は今ニキット恨ミゾスル、「あらしもぞふく」は、今ニキットアラシガフクといふ意也、かく未然の事を已然言にいひ定むる時は、「うらみもやせん」「あらしやふかん」といふよりは、一際つよく聞ゆるもの也、

右に准らへて、「色にはいでじ人もこそしれ」は色ニハ出スマイ人ガ今ニキットシル、「わたらば淺きせもこそは見れ」は渡ルナラバ淺キセヲ今ニキット見ル、かく釋して當らぬはなく、おだやかなるべし、それももに今ニ、こそにキットの意あるにはあらず、今と後とを兼るもに、それをつよむるこその添ひて、其意となる也、かくてこそ、ももこそもしれ見れも皆其本質を以て用を爲すには侍れ、かく思ひ定めて、祐命の心には、始めて一點の疑團も殘らずなりしは、かべすゝ兩大人の賜もの也、されど、黑川翁のもの字の解を難じたる所、御質し被下度候、

眞賴曰、もぞは指辭のもあり、咏歎のもあり、兩樣にてこそとは別なり、混じ給ふべからず、さるは、はぞとつづきもすればなり、はもも並につくものは咏歎と指辭といづれもつけば、よくせずばまがひぬべし、こそはまがはず、悉皆咏歎のもなればなり、

助辭本義一覽上卷云、もは既にいへるが如く、物二つを相比べ兼る辭也といへるは、もの意にはよく叶はず、もはあゆひ抄卷三云、もは俚に「ソレモ」「コレモ」などいふにかはらず、といへるぞいとよく叶ひたる、さればもは主ありて、その主をばいはずして、從をいひて主までをあらはす辭なりと心得給ふべし、たとへば、我もとひけりといへば、他の人が主にて、我は從なるがごとし、さるを、物二つを比べて兼る辭といへるはよく叶はず、「恨みもぞする」は、今より後を兼ねて思ふに「恨みぞする」の意なり云々、以下すべてかゝる解きざまは、其の歌に對していへるにて、辭を直解にせるにあらねば、直譯をせむには用ゐがたし、

もぞ もこそともに、本質を變ぜずして、古歌の解し得らるゝは、いとうれしき事也、大かた指辭は もぞやこその性質は、他に引れて轉ずる事なきやうなれど、活き詞は、上下のひゞきによりて、轉ずる事もあ

るべきが、「聞け」「越せ」「立て」「思へ」など、常は他にいふ詞にて、俗に下知の詞なるを、こその結びにては自らのうへになれる、これも轉ずるなり、

眞賴曰、これらは、已然言といふものにはあらず、性質異なるものなり、こその結びは已然言なり、同日の論にはあらぬを、轉じたるものといへるはいかにぞや、

てし にし等は、已然言なるを、がな(願ふ意)につゞく時は、未然言に轉ず、此類猶あらんか、

眞賴曰、てし にしのて には連用辭なるを、已然言とはいかにぞや、伊東氏は何を目的にてかゝることをいはるゝにか、もししは過去の意なりと認めて、已然言といはるゝにか、さてはいとあぢきなし、此のしは過去のしにはあらず、

又曰、がなにつゞく云々てしがな にしがなは、熟したる一つの辭にて、離るべきものにはあらず、ともに將然辭といふべし、轉じたるものにはあらず、熟して一つの意をなす辭なり、

蔭光曰、伊東氏ノ問ヒニ、てし にし等は已然言ナルヲガナニツヅク時ハ未然言ニ轉ズ云々、トアル意ヲ推考スルニ、コハ紐鏡第四段五段ニ擧グタル、三轉ノにき にし にしか てき てし てしか ノにし てし ニがな ノ添ヒテにしがな てしがなトイヘル詞ニナレルモノト、思ヒタガヘラレシナルベシ、又三轉ノにし てしハ過去ノ辭ナレバ、ソレヲ已然言トイフモノト、コレモマタ心得違ヘテカクハイハレシナラム、サテにしがな てしがな ノにし てしハ、三轉ナルコトハ異ニテ、細カニ分解シテイハバ、にてハ連用辭しハ玉ノ緒ナドニヤヌメ辭ト號グタル「花をしみれば」「人しなければ」ナドイヘルしニ同ジク、がなハ願フ意ナリ、此ノ三ツ熟シテにしがな てしがなトイヘル一ツノ辭トナレルモノナリ、シカ一ツノ熟語トナリタル上ハ、離ルベキモノニハアラズ、

序ニ云、已然言トハ、將然言ニ對セル名目ニテ、ソハ將然、連用、終止、連體、已然ト五階ニ活クトキノ名目ナルヲ、過去ノ辭ヲ已然言ト心得ルハ、字面ニ泥ミタル誤ナリ、

おのれ、今日までは、もぞする もこそすれも此の類にて、もこその勢びにて、すれの已然言を轉じて未然

言とするにて、ぞこそ|その方に變りのあるにはあらじと思ひて侍りし、上下共に本質を轉せぬにまさる事はなけれど、上にいへる類に轉ずる事もあるにや、外に理のあるにや、うけたまはらまほし、

眞賴曰、轉ずるとあるは、皆轉ずるにはあらず、能く味はば、聞きわき給ふべし、

外に理のあるにはあらず、たゞ轉ずると見給ふがゆゑに、あやしみ思はるゝにぞあらむ、轉ずるとは、たとへば「行(ゆく)」といふ言のゆかむ ゆき ゆく ゆけとやうに轉ずるをいふ、外に轉ずるといふ事はなき事なり、轉ずるとはいはゆる活用なり、

又曰、あめ(天)をあまといひ、さけ(酒)をさかといふは體言の轉ずるなり、

餘論二　三田葆光述

おほよそ、歌にもあれ、文章にもあれ、そを解釋するに意譯と直譯との差別あり、(こは歌文章に限らず、詩漢文はさらなり、梵語洋語を解くも同じ、殊に洋文など意譯と直譯とは文脈大に相違し、直譯は洋文を解せぬ人には、意味甚了解し難きものなり、されば今世に行はるゝ翻譯書類は、皆意譯の文體なり、これらの事は用なき贅辨に似たれども、意譯と直譯との差別を說く因にいふのみ、以下は歌の事にのみかけていふ、)意譯とは、もはら一ト歌の意の大要をとき明かして、早く其の意をさとらしめむがために、詞の上には顯はれずして、おのづから內に含蓄せる意味餘韻餘情を、譯者の意を以てさま〳〵に詞を設け、添加して、其の意のある所を論ずるものにて、いはば一歌の意を咄しにするなり、直譯とは、一首の上の詞の限り、一言一句も加へず省かず、ヒタヒタと譯語を押當てたるにて、別に詞を設け添へ、含蓄の意味餘韻餘情等までは、解き及ぼさゞるものなり、されば意譯は一首の意了解し易きが如くなれど、辭の上をとくことかへりて粗にして、譯者の意を以て、歌の上にもなき詞をも設け添へて解くが故に、或は誤解してあらぬかたに解きひがむる事もまたなしといふべからず、直譯は詞のあるまゝを譯したるのみにて、下の心までには解き及ざれば、一歌の意を解するは、粗なるがごとくなれど、そは粗なるにはあらず、直譯の辭の內に、おのづから其の含蓄せる意味餘情等は、しらるべきものなればなり、さるからに、意譯は言葉の道深くたどらぬなべての人、或は初學びのまだ歌の意をもえしらぬほどの人のために用ゐるべく、直譯はやう〳〵其の道に入りたちて、大かたの事は心得たらむ人にとゝのべき者とすべし、(古より佛學者流には講釋と談義說法との差別判然とわかれて、徒弟の爲に文義等を詳細に講ずるを講釋といひ、普く衆生のために經文の大意を說くを、談義ともいふなり、和漢學には此の區別佛學者の如く判然たらず、)しかるに、昔より世に行はるゝ所の、古歌を注釋せるもの、此の差別なく、詞の解と大意の解と、打混じたる中に、意釋のかたを專にして、(蛇に足を添へたらむがごとき牽强附會の說など往々あり、)辭をばおろそかに說きたるが多かるゆゑに、今も歌をとくには、大かたそれも皆この定によりたるさまなり、(詞の活き辭を俚言に譯して解くなどは古なき事なり、)今黑川大人の說かるゝ「もマア キット スルガ マア」の類は、即直譯なり、これに含蓄の意を添へて見れば、一首の意紛るゝ方なく、たしかにその意聞ゆるなり、橘守部の說、伊東祐命ぬしの今按どもは、皆いはゆる意譯なるがゆゑに、守部は「恨みもぞする」は今ヨリ後ヲ兼テ思フニ恨ミゾスルの意、「あらしもぞふく」は「明日ヲ兼テ按ズルニアラシゾフクト危ブミタル意ナリ」と解き、祐命ぬしは、「今ニキット恨ミゾスル」「今ニキットアラシガフク」といふ意也と解せられたり、これら、皆詞の上に顯はれぬ事をおもひやり、設け添へたる意味なれば、おのがじし、心に感ずるまゝに、或は今ヨリ後ヲ思フといひ、明日ヲ兼ルといひ、今ニといふ一ツ辭(てにを)のとく人の心々にてさまざまかはりもてゆけば、そをきく人も亦おのが心のひきゝ〳〵に、彼の說をすて、此の說をとるのみにて、まことにさるべき理なり、といふ證據をふまへたる慥なる定めにはあらぬなるべし、

さて、守部の說に、もは今と今より後とを相兼ていへるが、やがてその指辭の相助けて行末を危ぶむ意となれる也云々、などすべて風を逐ひ影を捉ふといへるが如き空論にて、いと覺束なく慥ならぬ解說なるを、祐命ぬしさへ、其の影をとらへむとせられたる、今按の辨も猶捉へどころなき空論たるをまぬかれず、さるはもこそを今ニ キットと譯して、當らぬはなくおだやかなりといはれたれど、しかきゝなさる

る歌もあり、さは聞えぬもあるなり、そは前に擧げたる歌どもの中にも、

ぞよひこむ人にはあはじたなばたの久しきほどにまちもこそすれ

おもふことといはてやみなむはるがすみ山路もちかし立ちもこそきけ

みかりするかた野のみ野にふるあられあなかまはだき鳥もこそたて

玉ぼこのとほみちもこそ人はゆけなど時のまも見ねば戀しき

月夜にはこぬだにもこそまつときけくるをもかへすものにざりける

これらのもこそには、今ニキットの譯あたるべくもあらず、すべてその歌に對して、其の意を推し量らむには、今ニもあるべく、明日もあるべく、明年もあるべく、又過去なるもあるべし、そは歌ごとに異なる意ありとも、もこその辭には、いさゝかも異なる事なし、さるは、今ニも明日も明年も過去も皆含蓄の内にこもりてあるにて、もぞ、もこその辭にあるにあらざればなり、然るに押なべて、もは今ヨリ後ヲ兼ル」明日ヲ兼ル」今ニといふに當るなどいふは、畢竟かの盲人が、各々大象の體を探りて、足にさぐりあたれる一人は、象のかたちは漆柚のごときものなりといひ、尾にさぐりあたれる一人は、箒のごときものなりといひしといへる比喩のたぐひなるべし、今、黒川大人の解かるゝ直譯によれば、もぞもこその辭を用ゐたる歌、何十首もあれ、譯語はたゞ一ッにて、いづれの歌も、其の意明瞭に聞ゆるなり、こはもぞ、もこそのみならず、あらゆる辭のかぎり皆しかぞありける、扨こそ數々の辭、一ツ毎に必さるべき理おごそかにて、彼是まがふべきものにあらざる事も、言靈のいともいともくしびなる事も、日月の光のごとく明らかに見えわかれて、いよ〳〵尊くも、うれしくも、覺え侍るなれ、あなかしこや、

明治十三年八月

追考

再考 ふるに、もこそと係りてあれ すれなどと結べるれはらめの約まりたるにて、あらめ すらめといへるにおなじとぞおぼゆる、さては、多く詞を發すまでもなくて、いづれの歌も、そのこゝろ明らかに聞

ゆるなり、

「花見れば心さへにぞうつりけるいろにはいでじひともこそしれ

「おもふことといはでやみなむ春霞山路もちかしたちもこそきけ

「さみだれにぬれ〳〵ひかむあやめ草沼の岩がき浪もこそこせ

「みかりするかた野のみ野にふるあられあなかまはだき鳥もこそたて

「かくばかりうきをしのびてながらへばこれよりまさるものをこそおもへ

右のごとくなれば、もこそといへるに、未然をおしはかる意ある、又未然をおし極むるなどはいふべくもあらで、もとより何々もこそ あらめといへるとおなじき將然の辭なるべし、

眞賴曰、もこそ あれはもこそ あらめの約言といへるは、一わたりはさることのやうにはきこゆれど、ひがごとなり、おのれもさきにはしかおもひしかど、ひがごとなることのしられたれば、さはいはざるなり、さるは、もこそ あれはもこそ あらめの約言とするときは、なべてにわたらず、またその例にならひには、もぞ あるもぞ あらむの約言なりといはざるをえず、これによりておもへば、しひてしかときなすのみにて、いはゆるわたくしわざなり、もこそ あれは「マアキットアルガマア」と解して、未然のことを豫ねて今察見する意なりと解かむかた、穩當なるべし、未然のことをはやくより察見するぞ已然の意なる、これらの已然言は、かねてよりこゝろみためし見たるこゝろの已然言なりかし、

又曰、未然のことも、已然にはかりしりていふと、こゝろえば、よく心えらるべし、

詞の八衢講義

詞のはたらきは、いかにともいひしらず、いどもいとをくすしくたへなるものにして、ひとつ詞も、そのつかひざまによりて事かはり、はたらきにしたがひつゝ意もことにきこえなどして、ちゞのことをいひわかち、よろづのさまをかたりわかつに、いさゝかまぎるゝことなく、

「ひとつ詞も、そのつかひざまによりて事かはり」

とは、たとへば、「いはむ」といへば、「いはう」とする事、「いひ」といへば、いひ出てし事、「いふ」といへば、今いふ事、「いへば」といへば、かう〳〵といひ以て來たる事となるがごとき類をいふ、

「はたらきにしたがひつゝ、意もことにきこえなどして、」

とは、たとへば「見る」といふ詞は、見ひ、見る、見れ、と活くを本として、見せ、見する、見すれ、といへば、他に物を見すること、なり、見られ、見らる、見らるゝ、見らるれ、といへば、他に我が見らるゝことゝなる類をいふ、

又見るもの聞もの人の心におしこめたるおもひのくまく〳〵、すべて世中にありとしあるをいく千萬のことなりともいひ盡しまねびやらむに、たらはぬこゝなくあかぬことなきも此活によるわざになむありける、

「此活によるわざになむありける、」

とは、四種の活をいへり、其の四種とは、四段の活、一段の活、中二段の活、下二段の活をいへり、

さるは、神代よりおのづからさだまりありて、今の世にいたるまで、うつりかはることなく、いさゝかもたがひあやまるときは、其ことわからず、そのこゝろきこえがたきものにしあれば、一文字といへども、みだりにはぶき、みだりにくはへなど、すべておほろかにおもひなすべきわざにはあらずなん、

「一文字といへども、」

とあるは誤なり、こは「一文字といふとも」とあるべし、

かくて、古の人は、おのづからわきまへて、用ひたがふることはなかりつるを、後の世となりては、やうやうにみだれゆきつゝ、誤ることのみおほくなりぬるを、世に見とがむる人もなく、とかくあげつらふ書も見えぬまゝに、いよ〳〵みだれあやまることのみぞおほくなりきにける、

「用ひたがふることはなかりつるを」

とある「用ひ」は、古き格に從ひて「用ゐ」とあるべし、「用ひ」といふは、「ゐ」の「ひ」に往來せるものにて、後の格なり、中古に至り「ゐ」を「ひ」といひ、「ひ」を「ゐ」といふことあり、かゝる類は、改めて古き方に從ふべきものぞ、

かゝれば、ものまなばむ人は、古のたゞしくうるはしきをよくかむがへ、ふかくならひてこそ、ものすべきなるを、いかにともおもひたどらず、なほざりにのみ思ひ過して、猶あやまることおほきはいかにぞや、

「ものまなばむ人は、古へのたゞしくうるはしきをよくかむがへ、ふかくならひて、」

とは、學問せむ人は、古の正しくうるはしき格を能く考へて、深く習へといふなり、此の教によりても、「用ゐ」などは「用ひ」とはいふまじきことなるを、是は其のしらべの未能く至らざりければ、「用ひ」を古く正しとおもひてありしなるべし、

されど、歌よくよみ文章よくつくれる人は、おのれよく心得とはなけれど、おのづからのものにしあれば、おのづからかなひてたがふることはをさ〳〵なかめるを、うひまなびのともがらは、いとたど〳〵しく、まぎらはしげにて、あやまることいとおほければ、今その人々にさとらしめむとて、いにしへのそのさだまりをこれかれあげて、くはしくわかちしるしつ、

「されど、歌よくよみ文章よくつくれる人は、」

とある、「つくれる人」は「つくる人」とあるべし、然るを活語雜話二篇にいはく、八衢上文章よくつくれる人は、とあるを、つくる人はとあるべき所なるにと評むる人あれど、さにはあらじかし、こは次なるなけれど杯に應じて、なほあしからぬほど考ふべし○以上文とあるは、義門法師が說ともおぼえぬひがごとなり、歌よむよみと打出てたらむには、文よくつくるといふぞ、世の常の詞遣ひにはある、此の歌よくよみ文よくつくれる人とあるが、何ぞ次なるなけれどといふまでに應ずることはあらむ、尙心得易くいはば、歌よくよみ文章よくつくる人とは、歌人文人といふことなり、

こを詞の八衢としも名づけたるは、おなじ言い葉もその活ざまによりて、いづ方へもおもむきゆくものの

にしあれば、道になぞらへて、かくはものしつるになむ、見む人よくたどりてふみまがふることなかれ、」

「ふみまがふることなかれ、」

とは「蹈まがはすること勿れ」といふにて、蹈まがふこと勿れといふとは意異なり、「ふみまがふる」は然爲る詞なり、「ふみまが ふ」は然爲る詞なり、然爲る詞は、意を用ゐて迷はじとして迷ふなり、故に「まちがはする」なり、「ふみまよふ」はうか〳〵と迷ふなり、故に「まちがふ」なり、斯る所は、「見む人よくたどりてふみまがふることなかれ」といひても、又「見む人よくたどりてふみまがふことなかれ」といひても聞ゆるなり、然れども、此の條は、まちがはするなとちからを入れて戒しるむ意なれば、「ふみまがふる」といふ方ぞよろしき、斯ることは、此に要なきことなれど、初學の輩の爲に、然る詞と然する詞との意味を知らしむるなり、

活は、すべていとおほくさまざまなる中に、四種の活此末下にもとも、そのたぐひさまざまひろくいとおほくして、これにならぶはたらき他にはなし、

「四種の活」

とは第一四段活用第二一段活用第三中二段活用第四下二段活用をいふ此四種の圖は下條見えたり、

「そのたぐひさまざまひろくいとおほくして」

とは四段活用に六行あり、「か、き、く、け」とはたらく詞と、「さ、し、す、せ」とはたらく詞と、「た、ち、つ、て」とはたらく詞と、「は、ひ、ふ、へ」とはたらく詞と、「ま、み、む、め」とはたらく詞と、「ら、り、る、れ」とはたらく詞と、すべて六行あり、一段活用に六行あり、「き、きる、きれ」と活く詞と、「に、にる、にれ」とはたらく詞と、「ひ、ひる、ひれ」とはたらく詞と、「み、みる、みれ」とはたらく詞と、「い、いる、いれ」とはたらく詞と、「ゐ、ゐる、ゐれ」とはたらく詞と、すべて六行あり、中二段活用に六行あり、「き、く、くる、くれ」とはたらく詞と、「ち、つ、つる、つれ」とはたらく詞と、「ひ、ふ、ふる、ふれ」とはたらく詞と、「み、む、むる、むれ」とはたらく詞と、「い、ゆ、ゆる、ゆれ」とはたらく詞と、「る、るる、るれ」とはたらく詞と、すべて六行あり、下二段活用に十行あり「え、う、うる、うれ」とはたらく詞と、「け、くる、くれ」とはたらく詞と、「せ、する、す

れ」とはたらく詞と、「て、つる、つれ」とはたらく詞と、「ね、ぬ、ぬる、ぬれ」とはたらく詞と、「へ、ふ、ふる、ふれ」とはたらく詞と、「め、む、むる、むれ」とはたらく詞と、「え、ゆ、ゆる、ゆれ」とはたらく詞と、「れ、る、るる、るれ」とはたらく詞と、「ゑ、う、うる、うれ」とはたらく詞と、すべて十行あり、四種をすべては二十八行ありこれをさまざまひろくいと多しとはいへるなり、

「これにならぶはたらき他にはなし」

といへる、他とは、加行變格といひて、「こ、き、く、くる、くれ」とはたらく詞の類、これは來るといふ一言のみの活用なり、又佐行變格といひて、「せ、し、す、する、すれ」とはたらく詞の類、これは爲、御坐、の二言のみの活用なり、又奈行變格といひて、「な、に、ぬ、ぬる、ぬれ」と此のごとくはたらく詞の類、これは往、死の二言のみの活用なり、又良行四段一格といひて「ら、り、るれ」とはたらく詞の類、是は有、居の二言のみの活用なり、又侍、坐有なども、此の活用なれど、有、居と同じ例には心得べからず、此一の事は委しくは良行四段一格の條下に至りていふべし、これを加行、佐行、奈行の三變格、良行四段一格といひて、四種の外の活用なれど、四種の活用のごとく多くの詞の活用するものにはあらで、僅に二言三言の活用するのみなるが故に、四種活用に並ぶ活用なしといへるなり、

次にはたど、し、しき、しく、又し、き、くとはたらく詞のみなり、

「し、しき、しく」

とは、形狀言の活用をいふなり、此にし、しき、しくとあるは、次第宜しからず、しく、し、しとあるべし、此は正しく、正し、正しきと活用する類なり、

「しき、く」

とは、これも亦形狀言の活用をいふなり、しき、くとあるは次第宜しからず、く、しきとあるべし、此は淺く、淺し、淺きと活用する類をいふ、此の二種の形狀言の活用は、或はくしき活用、しくしし活用ともいふ、形狀言といふ事の由は、以下に委しくいふべし、

その餘の活はこれにくらぶれば、いとせばく、詞もすくなし、

「いとせばく詞もすくなし」

とは活用の行も加行、佐行、奈行の變格、良行四段一格の四行にて狹く、詞も一行二言又は三言にて詞の數も亦少なしといふなり、（此の事は、既に上件にいへり、）

さてし　しき　しく　しき　くとはたらくは詞もいとおほけれど、こはたゞ（加）行のみの活にて、其餘の行にかくはたらくたぐひの詞なければ、猶せばさを、四種のはたらきは、（あ）（か）（さ）（た）（な）（は）（ま）（や）（ら）（わ）の行におしわたりてことごとくその活あるうへに、行毎に又四種三種あるひは二種などづゝの活も有ていとさまゝ〳〵ひろさにしたがひて、その詞もいとおほし、

「こはたゞ（加）行のみの活にて」

とはい　ひざまわろし　しく　し　しき　く　しきの活用は、何ぞ（加）行のみの活用ならむ、これを委しくいはば、麻行加行左行の合併して活用を成すものなれど、其の委しき事は茲にはいはず、（加）行のみならざる事は、しといふ活用も交りて（嬉し悲しといふ詞にても知るべし）あれば、加行のみにあらざることは瞭然たるをや、

「四種のはたらきは」

とは四段活用、一段活用、中二段活用、下二段活用の四種をいふ、

「（あ）（か）（さ）（た）（な）（は）（ま）（や）（ら）（わ）の行におしわたりて、ことごとくその活あるうへに」

とは五十音十行をいふ、次に圖を出して示すべし、

「四種」

とは加行、波行、麻行をいふ、加行は「かきくけ」と四段に活用き、又「き　きる　きれ」と一段に活用き、及「け　くる　くれ」と中二段に活用き、四種にわたるが故に斯くいへり、波行麻行も亦此の如し、

「三種」

とは多行、也行、良行をいふ、多行は「たちつて」と四段に活用き、「ち　つる　つれ」と中二段に活用き、「て　つ　つる　つれ」と下二段に活用きて、三種にわたるが故に斯くいへり、也行良行も亦此のごとし、

「二種」

とは左行、奈行、和行をいふ、左行は「さ　し　す　せ」と四段に活用き、「せ　す　する　すれ」と下二段に活用きて、二種にわたるが故に斯くいへり、奈行、和行も亦此のごとし、然れば、一行四種、一行三種、一行二種に活用くありと知るべし、唯、阿行は一行一種にて「え　う　うる　うれ」と下二段に活用くのみなり、委しくは、以下に示せる圖を見て了知せよ、

詞格指掌圖

下二段―（あ）（い）（う）（え）（お）

四段

一段　中二段　下二段

（こ）

四段　下二段

（そ）

四段　中二段　下二段

（と）

四段　一段　中二段　下二段

（な）（に）（ぬ）（ね）（の）

四段　一段　中二段　下二段

（ほ）

四段　一段　中二段　下二段

（も）

四段　一段　中二段　下二段

（よ）

四段　一段　中二段　下二段

（ろ）

四段　一段　中二段　下二段

（を）

右の圖は、予が父春村が作る所にて、詞格指掌圖といへり、予既に詞の栞打聽にも掲げおけるを、此に

亦取出てたるなり、但、加行の(こ)は變格にて、「こ
きく くる くれ」と活用けども、うちまかせて活
用くものにはあらねば、活用かぬ言の部に入るな
も、

右の圖に就きて心得べきは、作者春庭翁の四種活用の名稱の事なり、其の事を此にいふべし、抑、本邦人の詞の活用は、五十音の中に、括弧を施したる十四言は皆死言にて、活言にあづからず、これを大略に區分すれば、第五の音(お)(こ)(そ)(と)(の)(ほ)(も)(よ)(ろ)(を)は活用かぬ言なれば、此の二階は皆省きて四十音四階として、(此の四十音の中(あ)(い)(や)(わ)の四音は活用かず、)四種の名稱を定めて、其の四階に活用く言を四段といふ、伊緯(二階の言)の一階のみに活用く言を二段といひ、中の二階に活用くを中二段といひ、下の二階に活用くを下二段といふなり、春庭翁の四種の名稱を定められたる意は此のごとし、此の名稱は實に動くまじき名稱なるを、近時に至り、此の名稱を改むる者あるは、何の益もなきいたづらごとなり、かゝれば、先この四種のはたらきをさとさひとてく

だすくだりの圖などあらばし、次々にそのよしくはしく書しるしつ、その餘の種々の活は別にあらはすべし、

「その餘の種々の活」

とはくしきの活用、しくししきの活用をいへるなり、此の活用は、四種の活用とは、活用のさま異なれば、別にあらはすべしといふなり、

四種の活といふは、四段の活、一段の活、中二段の活、下二段の活、此四つなり、活のさまは次にいふべし、さて、これらの名もとよりあるにあらざれども、事をわかちいはむに、名目なくてはたよりあしければ、今かりにつけたるなり、下すべて此名をもていへり、

「事をわかちいはむに、名目なくては、たよりあしければ、今かりにつけたるなり、」

とは四種の活用、即四段活用、一段活用、中二段活用、下二段活用なり、名目なくては便ならざれば、假に名目をつけたりといふなり、此の名目は實に動くまじき名目なり、

四段の活とは、かきくけ、さしすせとやうに、第一の音より四の音まで次々四段に、あかんあきあくあけ、

おさんおしおすおせなど、はたらくをいふなり、此活詞かぎりなくいとおほし、

「此活詞かぎりなくいとおほし、」

とは「他」む「他」む「他」む「他」と活用く詞の類、此の他に甚多しといふなり、

一段の活とは、いいるいれ、ざるきれなど、第二の音一段のみにてはたらくをいふ、いるいれ、ざるきれのるれは言をそへて活をなせるにて、某行の音にはかゝはらざるなり、さて、此活すべて一音にていきといふより外なければ、此活詞いとすくなし、

「いるいれきるきれのるれは言をそへて活をなせるにて、某行の音にはかゝはらざるなり、」

とあるは、實にいはれたるがごとし、但いる きる と次第せられたるはわろし、ざる にる ひる みる いる ゐるとやうに、五十音の順序に隨ひて、次第を改むべし、其の故はいるは射るにて矢を射る、又水などを沃るなどなり、此のいるは此方のものを彼方へ遣るをいふ言なれば、也行のいなることを掲焉なればなり、尙次の活用圖の條下に至りていふを見るべし、

「此活詞いとすくなし、」

とは、此の一段に活用く詞は、四段の活用言下二段の活用言などのごとく、多くの言の活用かずして、一行一言或は二三言許より多きはなければいとすくなしといへるなり、此の事は、次下なる一段の活用言を擧げたる條下に至りて又いふべし、

中二段の活とは、きくくるくれ、ちつつるつれと、第二の音、三の音二段にて、おきおくおくるおくれと、ぢとづどづるとづれなどはたらくをいふなり、ぐるくれつるつれのるれは、一段の活の所にいへるがごとし、此活詞もおほからず、

「中二段の活とは云々」

中二段活用をきちひみいりゐの七行としてゐうるうれと、和行の一行を立てたるはわろし、此の和行の一行は省くべし、此の事は、下條なる中二段の活用言を擧げたるところに至りていふべし、

「此活詞もおほからず、」

とは、此の中二段に活用く詞は、四段及下二段の活用言などのごとく、一行に多くの言の活用かざる

が故に、斯くいへるなり、此の事は、次下なる中二段の活用言を擧げたる條下に至りて又いふべし、

下二段の活とは、くるくれけ、すするすれせと第三の音と四の音との二段にて、うくうくるうくれうけ、みすみするみすれみせなどはたらくをいへり、くるくれするすれのるれはこれも上にいへるにおなじ、此の活の詞は又いとおほし、

「下二段の活とはくるくれけすするすれせ」

といひてはいひざまわろし、是は活用の圖面のごとくに、けく｜くる｜くれ、せす｜する｜すれといふべし、凡べて、下二段の活用言は、三の音四の音と顚倒して活用くが例なれば、け｜く｜くる｜くれといふを穩當にはある、然るを強ひて、本書のごとき次第にとなへ習はむは、却りて逆なればわろし、然て此の下二段の活用は、すべて十行並に活用くなり、

「此活の詞は又いとおほし」

とは、此の下二段に活用く詞は、二段の活用、中二段の活用のごとくならず、一行毎に活用く詞の多ければ、斯くいへるなり、然のみならず、すべての詞の自他に分るゝも亦皆此の活用にあり、例へば見るといふ詞も、他に見せむとするときは、見せむといひ、又他に見らるゝときは見らるといふ、是皆此の下二段の佐行良行の活用なり、

又此四種の活の同じたぐひにて、いさゝか活ざまの異なるあり、そをかりに變格と名づけて、其の詞ある行の圖に出せり、そのよしは、其所々にいふべし、

「そをかりに變格と名づけて、其詞ある行の圖に出せり、」

とは、所謂三變格にて、加行變格、（來るといふ詞の活用）佐行變格、（爲るといふ詞の活用）奈行變格、（往ぬる死ぬるといふ詞の活用）あれば、加行、佐行、奈行の所々に添へて出せりといふなり、委しきことは、其の所々にいふべし、

○四種の活の圖　並受くるてにをは

四段	他	押	打
	か	さ	た
			じ
	き	し	ち
			ぢ
	く	す	つ
			づ
	け	せ	て
			で

活の住逢			
釣	ま	は	ぬ
ら	ま	は	ん
	ま	ば	ん
り	み	ひ	ぬ
	み	ひ	し
	み	ひ	か
	た	ち	つ
	り	り	る
	り	り	な
る	む	ふ	ぬ
	む	ふ	し
	む	ふ	か
	な	な	る
	と	な	り
れ	め	へ	ふ
	め	へ	ち
	め	へ	し
	ど	ど	を
	ど	ど	り
	ど	ど	な

此處四段の活と一段の活とは、切ると續くとを兼て一つなるを、中二段の活、下二段の活にては二にわかれたり、

「此處四段の活と一段の活とは、切ると續くとを兼て一つなる」

とは、此の（く）（す）（ぬ）（ふ）（む）（る）はきるゝ詞即終止言、つゞく詞即連體言を、一詞にて兼ねたりといふなり、此の說實に然り、然はあれども、初學の人は了解に苦しむが故に、予は此の圖を作り改めたり、且又「てにをは」も、餘れるあり足らぬあり、是も亦改めたり、其の改正圖は左のごとし、

四段活用

活用例	將然言	連用言	終止言	連體言	將然言
一	咲	か	ず	き	て
			く	らむ	く
					け
					ば

將然言といふは、然らむとする言、又然らむと思ふ言、又然あらずと思ふ言等の稱なり、然れば、これを未來言ともいふなり、語學の初步は先づ口にならすにあり、例へば、加行左行にて口ならさば、「あかむ」「あき」「あく」「あけ」「さかむ」「さき」「さく」「さけ」と、此の如く口ならすべし、

連用言とは、用言より用言に連る言なれば、しかいふ、例へば「さきにほふ」の類なり、然して此の連用言は、悉皆過去の言なり、過去とは物にても非にても、過ぎ去りしをいふ、然れば「さきにほふ」の如きは、「咲きて匂ふ」の類にて、「さき」は過去なり、花ならば、既に開きたるが今も匂ふなり、然れば連用言は過去言ともいふ、

終止言とは、いひ終り又いひ止む言なれば、然いふ、義門法師は截斷言と名づけたり、然れど截斷といふことは、截り斷つ意なれば、快からず、其の故は、此の言はおのづからに終り、おのづからに止む言にて、截り斷つにはあらねばなり、予は既に截斷の字を快からず思ひしかば、改めて斷止といへり、然れども尙快からぬが故に、又改めて終止言といふ、さくといふ詞は、花ならば今さくをいふなり、然れば終止言は現在言ともいふ、

連體言とは、用言より體言へ連る言なれば、しかいふ、例へば「さく花」の類なり、但、上にぞやかの何(かの何はいづれも重きかの何なり)の係辭ありて、係りとなりて結詞となる時は切るゝなり、然れども、其は結詞となりて切るゝなれば、一向に切るゝ言とはいはざるなり、此の事は能く心得おくべし、又心得おくべきことは、花といふべきを「さく花」と形容していふこともあれど、うちまかせては、花の今さくをいふなり、故に連體言をば、是も亦現在言ともいふ、

已然言とは、過去より現在に至る言なれば、然いふ、例へば「花さけば」「花さけど」の類なり、「花さけば」といへば、花の既に咲きたるが、現に今もあるをいふ、「花さけど」といふも同じ意なり、「さけ」といふ詞は、此のごとく過去より現在に至る意なるが故に、已然言といふ、又半過去言ともいふ、

以上述ぶる所は、將然言連用言終止言連體言已然言の大意なり、但、已然言の名は適當とは思はれねど、然りとて、適當の名稱を考へ得ねば、古人の命ぜしまゝに、然てあるなり、後人能く考ふべし、

活用の段	一段				
居	見	干	似	着	射
ゐ	み	ひ	に	き	い
ゐ	み	ひ	に	き	い
ゐる	みる	ひる	にる	きる	いる
ゐる	みる	ひる	にる	きる	いる
ゐれ	みれ	ひれ	にれ	きれ	いれ
ゐろ	みよ	ひよ	によ	きよ	いよ

これを一段活用といふことは、既にいへるがごとし、但、此の圖は配列の次第よろしからず、其の故は、射るといふ詞は阿行と見られて、此の段の初に出されたれど、射るは、阿行にはあらず、也行なり、然れば、其の序を改めて(き)(に)(ひ)(み)(い)(ゐ)とし、且、毎階の「てにをは」をも加減せり、其の改正圖は左のごとし、

一段活用

活用例	將然言	連用言	終止言	連體言	已然言
射	き	て	き	き	きば
着	に	に	に	に	にば
似	ず	て	ぬ	ぬる	ぬれど
干	む	ひ	ぬ	ぬる	ぬれど
見	みなむ	み	みなり	みなり	みれども
居	ばし	ゐ	ゐなむ	ゐなり	ゐれども
射	いなむ	い	いなむ	いなり	いれども
見	みらむ	み	みらむ	みるかな	みれども
居	ゐらむ	ゐ	ゐらむ	ゐるかな	ゐれども

「見るべし」といはずして「見べし」といひ、「見ると」といはずして「見と」といへること多し、故に古言の格を知らしめむが爲に、此にこの助辭を加へたり、見む人然心得てよ、(但「見らむ」は「見るらむ」、「見べし」は「見るべし」、「見と」は「見ると」の意也)

一段活用の將然言と連用言とは同じ音なれど、其の受くる助辭に據りて、判然とわかれたり、例へば「きず」といへば將然言、「きて」といへば連用言なり、又終止言と連體言とは同じ音なれど、是も亦受くる助辭に據りて、判然とわかれたり、例へば「きるらむ」といへば終止言、「きるかな」といへば連體言なりと心得べし、

終止言の「きると」といふ助辭は、切れたる言を受けて下へつゞくる助辭なり、然れば、とは先哲も終止言を受くる助辭といひしは實に然り、然れども、といふ助辭は、終止言を受くるに限れるにはあらず、連體言の「きる」をも受く、例へば「衣をぞきると」といへどなほ寒からむ」などのごとし、是は連體言なれども、係詞のぞに係りて切るゝが故に、と受けて下へ續くなり、又「日のうちにものをふた

たびおもふかなあけぬるとおそくくるゝと」、是も亦連體言なれども、徒の重格にて切るゝが故に、と受けて下へ續くるなり、但、是は例の少なきものなれば、先哲が、此の例をば措きて、とは終止の助辭と定めたるものなり、初學の徒必得べし、

中二段の活					
起き	落ち	戀ひ	試み	老い	率る
ず	て	け	ね	ば	ん
ず	て	け	ぬ	ば	む
き	て	け	ぬ	ば	む
く	つ	ふ	む	ゆ	る
くる	つる	ふる	むる	ゆる	るゝ
くれ	つれ	ふれ	むれ	ゆれ	るれ
くれ	つれ	ふれ	むれ	ゆれ	るれ

これを中二段活用といふことは、既にいへるがごとし、但、此の圖は「ゐうゐるうれ」の一行を刪去して可なり、斯くいふ故は、「率」といふ詞は、古くは率うる率うれなどは活用ける例を見ず、類聚名義抄に、帥ヒキヰル遵ヒキヰル率ヒキヰルなどこそは見えたれ、但繼體紀廿三年四月の條に、「所將士卒」とあるは後人の施したる訓にて、古版本にはなければ、古きを證するに足らざるなり、此の所將の字をひきうると訓を施したるは、恐らくは小寺清光にもやあらむ、然ればにやあらむ本居翁の活用抄には、「率」を和行一段に出せり、義門法師も友鋭には、此の書に倣ひて和行に中二段を置きて、率を和行中二段に出せれど、其の非を知れるにやあらむ、山口栞には、和行一段に改めむかとまていへり、義門法師が和行一段と和行中二段といづれにかと迷へるは、崇神紀の「急居此曰菟岐于」とあるを見て、半信半疑を生じたるなり、類聚名義抄をば、迷ふべきことはあらじものを、口をし、然れば、此の急居も亦和行一段の活用なり、然るを崇神紀に菟岐宇とあるが故に、後世の人或は、爲に和行中二段を置かむといふ致說も出て來しなり、居を居といふことは居を約めていふのみ、別に子細あるにあらず、但此のうは、連用言連體言の「ゐる」を約めたるもの也、然して斯くのごとく、連用言連體言並に約めて用ゐることは、二音の詞に限れるものにて、是上古の一格なり、例へば、射をゆと約め、見をむと約め、乾をふと約め、居をうと約むるが如し、然れば、「ひきゐる」を「ひきう」、「つきゐる」を「つきう」とあるを見て、「ひきうる」「ひきうれ」「つきうる」「つきうれ」と活用くものならむと思ふは、ひが事也、唯、約めて用ゐるのみのことぞよ、故に予はこれを改む、其の改めたる圖は左のごとし、

中二段活用

活用例	中二段の活					
將然言	起き	落ち	戀ひ	恨み	老い	舊り
連用言	ず	て	け	む	な	ば
終止言	き	て	け	む	な	ば
連體言	く	つ	ふ	む	ゆ	る
已然言	くる	つる	ふる	むる	ゆる	るゝ
	くれ	つれ	ふれ	むれ	ゆれ	るれ
	くれ	つれ	ふれ	むれ	ゆれ	るれ

中二段活用の將然言と、連用言とは同じ音なれど、其辭の受くる助辭に據りて、判然とわかれたり、例へば「おきず」といへば將然言、「おきて」といへば連用言なり、其の他はなずらへて知るべし、

下二段の活						
得え	受け	捨て	疲せ	兼ね	辨へ	墾め
ず	て	て	て	じ	ぬ	ん
ず	て	て	て	じ	ぬ	ん
う	つ	ぬ	す	つ	ぬ	む
うる	つる	ぬる	する	つる	ぬる	むる
うれ	つれ	ぬれ	すれ	つれ	ぬれ	むれ
うれ	つれ	ぬれ	すれ	つれ	ぬれ	むれ

下二段の活					
消え	枯れ	飢ゑ			
ず	ず	ず			
て	ず	ず			
ぬ	ず	ず			
ぬる	ぬる	ぬる			
ぬれ	ぬれ	ぬれ			
ぬれ	ぬれ	ぬれ			

これを下二段活用といふことは、既にいへるがごとし、然して、此の下二段活用の圖は、いふべき旨なし、但將然言と連用言とは、階を別にせざれば不便なるが故にこれを改む、これを改むれば左のごとし、

下二段活用

活用例	
將然言	得え
連用言	受け
終止言	捨て
連體言	疲せ
已然言	兼ね

下二段活								
得	受	痩	捨	兼	辨	擧	消	枯	飢
え（ず）	け（ず）	せ（む）	て（む）	ね（む）	へ（なむ）	め（なむ）	え	れ（ば）	ゑ（ば）
え（て）	け（て）	せ（て）	て（っ）	ね（てけり）	へ（けり）	め（なむ）	え	れ（し）	ゑ（し）
う（らむ）	く（らむ）	す（べし）	つ（めり）	ぬ（めり）	ふ（まじ）	む（なり）	ゆ（なむ）	る（と）	う（と）
うる（かか）	くる（かか）	する	つる（に）	ぬる（に）	ふる（を）	むる（を）	ゆる	る（なり）	うる（なり）
うれ（ば）	くれ（ば）	すれ	つれ	ぬれ（ども）	ふれ（ども）	むれ	ゆれ	るれ（ども）	うれ（ども）

此處將然言連用言一段の活中二段の活下二段の活は一つなるを、四段の活にては二つにわかれたり、

本書の圖の終なる、將然言と連用言との處に、此のごとくことわりたれど、今は圖を改めて見易からしめたれば、此のことわりは無用に屬せり、

凡て右の活詞（はたらきことば）より受るてにをは、猶いとおほかれど、ことごとくは出さず、その大抵をあげたるなり、「その大低をあげるたなり、」

とは、用言より受くる助辭の數は多ければ、悉く擧げむには、圖面狹くして能はぬが故に、大略を擧げたりといふなり、但これを省くに就きては、尤要用の助辭を擧げて、其の次なるを省くべきなり、然るに本圖は同類の重疊せるあり、又必用なるを省けるあり、其の事は下條に至りていふべし、

又や　なりなどの如く、ゆきや云々ゆくやなどゝ、さよりもくよりもうけ、またきこゆなりきこゆるなりなど、ゆゆるよりもうくるてにをはなどは、まぎらはしければこれものせざるなり、

「又や　なりなどのごとくゆきや云々ゆくや云々」とは例へば「往きや」とゝより受くるは、係辭のやにて、「往きやわぶらむ」などのやなり、「往くや」とゝより受くるはそれも亦同じ係辭のやにて、「往くやたれなる」などのやなり、是は共に同じ係辭にて、圖面に擧げたる助辭とは異なるものなれば、此に掲出したるは無用のことなり、初學の輩は惑ふべければ省くべし、

「またきこゆなりきこゆるなりなど、ゆゆるよりもうくるてにをはなどは、まぎらはしければこれものせざるなり、」

とは、例へば、「聞ゆなり」は終止言を受くるなりにて是はなりなるなれと活用さてならむとは活用かず、「聞ゆるなり」は連體言を受くるなりにて、是はならむ　なり　なれ　と活用　くなり也、然れば、此のなりは終止言を受くると、連體言を受くると二ッありて、各其の意の異なることを知らしむる事は、語學上最緊要なれば混はしといひて省きたるは失攷也、此の事は尙次下にいふべし、

四段の活は、あなやわの四行にはなし、第一の音かさたはまらは、そのまゝにて未ず語をなさず　たとへば、あかん、あかず、あかじ、かさん、かさず、かさじ、うたん、うたず、うたじなどを、あかかさうたとのみにては、語をなさゞるなり、その下に受くるてにをはのんずじにて語をなすなり、これは四段の活にかぎれる事にて、一段の活中二段の活下二段の活には、この語をなさゞる活なし、

四段活用の第一の音の言は、たとへば、俺くといふ詞の將然言は俺かなれば、其の語いまだ成らず、押すといふ詞の將然言は押さなれば、其の語いまだ成らず、然れば「未語をなさず」とはいへるなり、此のごとく、四段活用の第一の音を擧げてことわられたることは、然ることなれど、一段、中二段、下二段等の活用も、亦其の將然言の限りは同じ事にて、例へば、一段活用にて「着」といひ中二段活用にて「起き」といひ、下二段活用にて「得」といふも、其の語未成らざるなり、其の故は、「着」「起」「得」と云ひても將然の意は全からざれば也、然れば第一の音即將然言は、四段一段中二段下二段共に第一の音は、むの助辭を添へて、「俺かむ」「着む」「起きむ」「得む」とやうに心得て讀み習ふべし、斯く讀み習ふ時は將然言の意判然と了知せらるゝなり、

さて、此第一の音よりうくるてをには、ずてじぬんましなどなり、

「ずてじぬんまし」

と掲げたる中に、ずてじぬの四助辭は、皆「不」の活用けるものにて、ずはずぬねとはたらきて、三轉一具のものなり、

ではずての上略にて、用言へつゞく助辭にて、所謂連用言なり、

じはずの轉ぜるものなれども、「ず」とは異なるところあり、其の意も亦異にして、一の終止辭なり、ずは此のごとくすでじぬと別れたれども、元は「不」の一辭にて、それがさま〳〵に轉用せるものなれば、圖面にはずの一辭を擧げて、其の他は省略に從ふを便とす、又これを能く知らしめむとせば、ずぬねを一行とし、じでを各一行として、凡べては三行に掲ぐべきものなれども、然ては煩はしかるべし、故に予が圖は、ずの一辭を掲げて、其の他は省けり、

んまーと掲げたるも、亦煩はし、ましはんの轉じて一辭となりたるものなればなり、其の故は、んは「將」なり「まし」は「將」にて「む」の轉じたるものにて、むもましも各三轉の辭なり、其のむはむむめと一具し、ましはまし　まし　ましかと一具す、かくのごとく圖面に掲げば煩はしかるべければ、予が圖は、むの一辭を掲げて、其の他を省けり、見あはせて了るべし、

第二の音きしちひみりは、用言へつゞく詞なり、

第二の音は、例へば、「咲き」といふ詞にていはば、咲き句ふなどの如し、「押し」といふ詞にていはば、押し開くなどのごとし、然れば、咲き押しなどを連用言といふ、以下これに倣ふべし、

うくるてにをはは、てつゝけりきけんなばつるぬるししかなどなり、

「てつゝけりきけんなばつるぬる」

ては連用言を受くる助辭の中にて、殊に緊要なる連用辭なり、然れば用言が用言に連なるときは、必てを受くるなり、例へば咲き句ふは咲きて句ふなり、押し開くは押して開くなり、すべて、連用言は此のごとき定なれば、詞ごとにあぢはひて、其の意を了知すべし、是によりて、又心得べきことあり、用言の中に添言といふあり、それは、主とし用ゐる詞の上に添へていふ詞なり、例へば「打ち渡す」のごとし、此の「打ち」は、物を打ちたゝくなどの意にはあらずして、唯添へていふのみなれば、打ちてといふ意はなし、然れば、「打ち渡す」は打ちて渡すとやうには心得べからず、唯渡すといふ意也、故にてを加ふれば却りて聞えぬ事となる、然れば、同じ用言といへども、添言に用ゐたるか用ゐざるかは、

てを加減して味はふときは、判然と知らるゝなり、是添言を知る捷徑なれば、初學の爲に、此にわきまへおくなり、

つゝはつの重なりたるものなり、つは終止辭にてきるゝ辭なれども、つゝと重なるときは連用辭となる、然れば、つゝは連用辭なりといふことを知るべし、〈終止言の重なれば連用言になると同例なり〉「君がため春の野にいでてわかなつむわが衣手に雪は降りつつ」とあるを、古人はつゝとめなどいへれど、これは全く止りたるにはあらず、ありといふ詞をいひ殘してあるにて、委しくいはば、雪はふりつゝありの意なり、是にて其の連用辭たるを味ふべし、

けりはけるけり　けれとはたらきて三轉一具のものなり、

きはきししかと活きて、三轉一具のもの也、古人の說に、きはけりの約言なれば、けりといひてもきといひても同じとあるは、取るに足らぬ粗漏の說なり、用ゐるべからず、其の故は、けりは過去よりかけて現在に至るまでを顯はし、きは過去をあらはして現在には及ばず、以て別なるを知るべし、

けむはけむけむけめとはたらきて三轉一具のものなり、然して、此けむはきの轉じてけとなりたるに將然辭のむの連續して、一種の辭となりたるものなれば、きししかと同じく過去の辭なれど、其の異なるところは、過去の疑はしきを顯す辭なり、なばはなむのなに將然辭のばの添はりて、一つの辭となりたるものなり、

つるはつるつれとはたらきて三轉一具のもの也、此のつはつゝのつと同じ辭なれどつゝは連用辭にて、是と別なるものとなれり、委しくは上の條にいへるを見るべし、

ぬるはぬぬるぬれぬとはたらきて三轉一具のもの也、此のぬは、元は奈行變格の「往む」「往に」「往ぬ」「往ぬる」「往ぬれ」をはたらく言なるが、轉じて一種のぬとなれるものなり、上の條に掲げたるなども亦「往ば」なれば、別に掲ぐるに及ばざれば省畧してよろし、然して、又本圖に「なむ」を省きたるはいかゞ、なばを掲げばなむも亦掲ぐべし、な

むは往むにてなむ なむ なめと活きて三轉一具のもの也、古人これを「往むのなむ」といひて、將然辭のなむに別つ、將然辭のなむは、古人「誂のなむ」又「願のなむ」といへり、予が改めたる圖には、將然のばをも掲げたれば、見合せて了るべし、

第三の音、くすつふむるは、切るゝ詞と體言へ續く詞とをかねたり、

「切るゝ詞と體言へ續く詞とをかねたり」

とは、例へば、「切るゝ詞」とは「うめの花咲く」の類にて、此にて終止すればなり、「續く詞」とは所謂連體言にて、「花咲く春」の類にて、春といふ體言へつゞくが故也、本圖は此の意を以て見よといへるなれど、かへりて惑はし、予が改めたる圖は、別けて終止言連體言の二段とせり、

受るてにをはは、めり、らん、べき、らしと、ともめりは、めりめるめれとはたらきて、三轉一具のものなり、

らんは、らむらむらめとはたらきて、三轉一具のものなり、

べきはべし べき べけれとはたらきて、三轉一具のものなり、

らしはらし らし らしとはたらきて、三轉一具のものなり、

とは切れたるを受けて次へつゝくる接續辭なり、

ともはとの接續辭に、もの辭の添はりて、一の音となりたるものなり、

續く詞より受るてにをはは、かな、まで、に、を、よりなどなり、

「續く詞より受るてにをは」

とは例へば、「花の咲くかな」「花の咲くまで」の類なり、類推して知るべし、

かなは接續のかに咏嘆のなの添はりたるもの也、上古はかもといひてかなとはいはざりき、又かなといふべきを、唯かとのみもいへり、これは咏嘆を省けるものなれど、其の意はかなと同意なるものなり、

までは より に對へる辭なり、然れば、までを掲げむには、より までと二つ掲ぐべきなり、然ては煩はしければ、予が改めたる圖は、までを省けり

にはをに對へる辭なり、には其の場所を指し、をは其の物を指して、各分擔するおもむきあり、

をは既にいへるがごとし、

よりは既にいへるがごとし、

第四の音けせてへめれはこその結詞なり、

「第四の音けせてへめれ」

とは、已然言をいふ、例へば「咲けば」「押せば」の類なり、又唯に「咲け」「押せ」とのみいへば希求使令言となりて、上に對して希求むる言となり、下に對しては下知する詞となる、故に、古人は下知辭ともいへり、

受るてにをはは、ばどどもなどなり、

「ばどども」

ばは已然のはといふ、將然のばに混ずべからず、

どは已然のとといふ、終止言を受くると混ずべからず、

どもは已然のともといふ、終止言を受くるともと混ずべからず、

此のばどどもへ續くは、其の詞悉く已然言ならざればつゞかず、故に此の三辭を名づけて、已然辭のばどどもとはいふなり、

○編者曰、本篇は未成稿なれど、散逸せむことを惜しみて、此に收めたるなり、覽者これを諒とせよ、

字音問答案

別冊問目一則に付本學各教授の意見承知致度旨井上文部大臣より被申越候に付ては各位御論說書面に御認め本官まで御差越し相成度此段申進候也

但右は文部省公務上の諮詢には無之學問上の研究に係る儀に候間此段御含相成度候

明治廿七年五月十一日

文科大學長文學博士外山正一

黑川眞頼殿

〔問〕 我が國音國字の言靈の幸にかなへるは、外國にまさりて節便なるによるなり、況て文字は魚を得る爲の筌也といへり、故に教育は成るべきだけ、文

字の學びを簡便にする手段を取ることこそ必要なれ、我が國の假名は、一種の特性として、印度の悉曇、歐洲の「アルハベット」に遙かに優る所あり、そは彼の文字には、子音字母音字の二つありて、二字又は數字を組合せて一音をなす故に、生徒は字學の手始として、先づ反切法即ち綴字法を學ばざるべからず、此反切法を諳ずるために、少くも一年乃至三四個月を費すといへり、我が假名は一字一音をなす故に、反切法を學ぶの煩勞なきは、いかに外ッ國に秀でたるめでたき簡便の文字ならずや、然るに支那より來れる長音拗音、又は入聲を寫す爲には、此の簡便法もなかなかに難澁なることゞ出來ぬる、そは、彼の先覺の支那音に通ずる人の、字音假名遣といふことを論へるより、びたもの分け難きわざとなりて、漢字漢音に深き覺ある博士ならでは、其の道に迷はぬものなきことゝはなりぬ、

今、字音假名遣を普通教育に用ゐて、少年に其の栞を學はしむるの可否は、教育家の打ちすておくべきにあらざる問題なり、

〔御答〕其の栞を學ばしむるを可なりと思はる、委しくは下條に申すべし、

〔問〕何故に樣又は要用の漢字を「よう」「えう」又「やう」と假名にて書くか、其の易きに由るなり、さるを、樣ならば「ヤウ」とし、要ならば「エウ」用ならは「ヨウ」とすべしといはゞ、漢音漢字を知る人ならでは、わけがたき業なり、さる人は、初より樣又は要用の眞名を書くをこそ易しとすべけれ、假名に書くの必要はなし、況て要の字も、今の支那音は「ヤウ」にて、「エウ」にはあらず、音博士の古傳も強ちに信ひ難きをや、是一問なり、

〔御答〕「樣ならば「ヤウ」とし、要ならば「エウ」用ならば「ヨウ」とすべしといはゞ、漢音漢字を知る人ならてはわけがたきわざなり」樣の字は、佩文韻府に從るに、二十三漾の韻に屬する字なれば、障帳と同じく樣と書くべきを、「ヤウ」と書くは次音也「用」の字は、同書に從るに、二宋の韻に屬する字なれば、重供と同じく用と書くべきを、「ヨウ」と書くは是も亦次音なり、

要の字は、同書に從るに、二蕭の韻に屬する字なれば、朝喬と同じく要と書くべきを、「エウ」と書

は是も亦次音なり、（以上は韻府に從りて云ふ、）

然れば、樣用要は並に次音なり、然して樣用は漢の次音なり、要は吳の次音なり、

支那字には、いづれも一字につきて、漢音あり吳音あり、漢吳二音の他に異音のあるあり、然れば、一字に漢吳異の三音ありと心得ずばあるべからず、然して、其の漢吳異の三音に、各原音次音單音ありと心得ずばあるべからず、然るときは、字音に假字を施すことは、專門の學に入らずば、能はざることなり、例へば、

漢音　要は、古くは多く吳音の「エウ」を用ゐる、後世は多く異音の「ヨウ」を用ゐる、

吳音

異音

要の字の音は、上件に云へるがごとくなるを、此の要の字と同韻に、韻府に掲げたる「朝」「喬」の字は、

漢音　朝は、古くは吳音の「テウ」を用ゐる、

吳音

異音

漢音　喬は古くは多く吳音の「クウ」を用ゐる、

吳音

異音

斯のごとく漢吳同音なるからに、韻府には要も朝も喬も蕭の韻に收めて、畧韻にしたれど、韻鏡には要は外轉第二十六合の去聲の笑の韻に收め、朝喬は外轉第二十五開の上聲の宵の韻に收めて、其の類を別にせり、是古韻の區別なるべし、然るを、韻の數を減じたる故は、支那は代々を經るまゝに、音の轉じ來りて要も朝も喬も共に同韻に收めたるものならむ、後世の韻鏡は、支那音の改まるに從ひて、第廿五轉第廿六轉並に開音に改めたれば、既に掲げたるがごとくなれど、亨祿の韻鏡に據るときは、此のごとし、

漢音　要

吳音　異音

要の字を合音に呼べば斯く呼ばる、是古き音なりけり、然るを後世開音に呼ぶことゝなれゝば、前條

圖のごとき音となれるなるべし、斯の如くむづかしき事なれば、專門學にあらざれば能はず、然らば字音の假字遣は棄てゝ學ばざるべきか、如何、此の事は、次下に愚存を陳述すべし、

御下問の此の條に「要の字も今の支那音はヤウに、てエウにはあらず音博士の古傳も強ちに信ひ難きをや」とあるは、我が邦には要に「ヤウ」の音なければ、音博士の古傳も信じ難しとの意なるべけれど、此の一條はいかゞあらむ、要に「ヤウ」の音あることは、支那も日本も同じことなればこそ、本邦にて支那の韻書を用ゐたれ、然れども、要は多く吳音の「エウ」を古く用ゐ來たりて、漢音の「ヤウ」は用ること少きにこそあらめ、然るを、音博士の傳の信じ難きやうにのたまへるはいかゞあらむ、新撰字鏡卷三なる要の字の條に、伊妙反と見み、類聚名義抄卷二なる要の字の條に、於笑反と見えたり、

〔問〕「蝶」を「てふ」と書き、法を「はふ」と書くを、假名遣の法とするならば、何故に「ちよう」「はう」とは讀むか、漢字の爲に、我が假名の正音を曲ぐるは、假名の本色に背くもの也、我が國にはもと入聲なし、故に「てふ」「はふ」の音あるべきなし、支那音の拗曲なるを、我國の穩和なる平音に移したるは、即ち「ちやう」または「ほう」にぞある、さるを假名にて唐樣に引直さむとするはいかに、是二問なり、

（古今集には法師を「ほうし」と書けり、）

〔御答〕「蝶をテフと書き、法をハフと書くを、假名遣の法とするならば何故にチョウホウとは讀むか、漢字の爲に我が假名の正音を曲ぐるは假名の本色に背くものなり」蝶は、佩文韻府に從るに、十六葉の韻に屬せる字なれば、笈獵と同じく「チエフ」と書くべきを、「テフ」と書くは、次韻なり、法は、同書十七洽の韻に屬せる字なれば、挿夾と同じく「ヒヤフ」と書くべきを、「ハフ」と書くは次音なり、例へば、

漢音　蝶　チエフ　法　ヒヤフ

吳音　蝶　テフ　法　ホフ

斯のごとく葉の字と漢吳同音なるからに、笈も獵も蝶も葉の韻に收めたり、御下問に蝶を「チョウ」

とあるはいかゞ、「チョフ」なるべし、

漢音　法　ヒヤフ

吳音　法　ホフ

斯の如く洽の字と漢吳同音なるからに、法も挿も夾も洽の韻に收めたり、我が假字遣の法は、是に從りて蝶を「テフ」法を「ハフ」と書くなるべし、然るを法を「ホフ」と云ふは吳の次音也、又「ホウ」と書くは單音の「ホ」に「ウ」の挿音を加へて「ホウ」と云ふなり、挿音の「ウ」は本邦人の音便に加ふるものにて、女を女と云ふと同類にて和音なり、此のごとくなれば、蝶を「チョフ」と云ふは吳の原音、法を「ホウ」と云ふは和音なり、但、法を「ホウ」と云ふは、多く二字連聲のときに云へり、例へば法師のごとし、法師は單音にて云はゞ法師なるを、挿音を加へて法師と云ふ、女房を女房と云ふがごとし、然れば蝶を「チョフ」と云ふは、吳の原音にて、正音を曲ぐるにはあらざるべし、法を「ホウ」ト云ふは、和音の音便の一格なり、

「我が國にもと入聲なし、故に「テフ」「ハフ」の音あるべきなし」とあるは實に然るべし、支那人の呼ぶ入聲は、我が邦にては甘く學び得ること能はず、故に蝶法の如きも蝶法と云ひて彼が入聲を移せるなるべし、然れは、蝶法の如く「フ」を添ふるは和音なり、然るを「支那音の拗曲なるを我國の穩和なる平音に移したるは即ちチャウ又はホウにぞあるさるを假名にて唐樣に引直さむとするはいかに」とあるは、何なることにか、能く會得しがたし、其の故は、蝶は平水韻には葉の韻に屬し、韻鏡には帖の韻に屬したれば、「チャウ」の韻とあるは心得ず、法を「ホウ」とあるは御說の如く、和音なることは既に述べたるがごとし、然れば法を「ホウ」といふは、唐樣に引直したるにはあらずして、和樣と云はば云ふべし、

〔問〕支那の音を矯めて國音に附かしむる時は、國音のまゝに假名を遣ふこと、古人の用例なり、されば こと困ずをこうずるは書けども、こむずとは書かず、柑子をこうしとは書けどもかむしとは書かず、九郎判官をはうぐわむとは書けどもはむぐわむとは書か

ず、近世の字音假名遣の說は、此の用例と背けるはいかに、是三問なり、

〔御答〕「困ずをコウズとは書けどもコシズとは書かず」この困ずを「コウズ」と書くは、困は舌內聲なれば「コヌ」なるを、音便に「コウ」と云ふなるべし、柑子を「コウジ」と書くとあるは如何、柑は唇內聲なれば、柑子は「カムジ」なるを、音便に「カウジ」とこそいへ、但、柑は漢音なり、柑は吳音なり、然れども、吳音の「コウ」は用ゐざるやうにおぼゆ、然るを御下問に「柑子をコウジとは書けどもカンシは書かず」とは如何、和名鈔醫心方新撰字鏡等並に加牟之なるをや、又九郎判官をばハウグワンとは書けども、ハングワンとは書かず、近世の字音假名遣の說は、此の用例と背けるはいかに」とあるは、近世然る假字遣書のあるにやといふかしくおもはる、判官の判は舌內聲なれば「ハヌ」なるを、音便にハウと云ふは古實なり、然るをハングワンと敎へたる書あるに至りては、實に驚愕の至なり、

〔問〕「若し必漢字の正音に就くべしとならば、チョウ、テウ、テフ、ショウ、セウ、セフの類のみにあらずして、古の音博士のわざに習ひ、キとクキ、クとクエとをも書きわくべきも此は難きわざならずや」キをクキと云ふは、例へば、歸は本邦にては常には單音にキと云へど次音はクキなり、然れども今日に至りて次音のクキは用ゐるに及ばざらむか「グ」を「クエ」と云ふは、例へば華は本邦にては單音に「グ」と多く云へれど次音は「クエ」なり、然れども、是も亦今日用ゐるに及ばざらむとおぼゆ、

「音博士が紀長谷雄と發昭と同音とし、芭蕉をバセオと書きたるは、漢音をそのまゝ寫すためのわざなるも、今の世に用ゐるべくもあらず」紀長谷雄と發昭と同音、又芭蕉をバセヲと書くは、昭も蕉も共に外轉の唇內聲にて韻のウは知行の于なれば、轉して、古の音博士のわざに習ひ、キとクキ、クとクエをも書きわくべきも、此は難きわざならずや、又音博士が紀長谷雄と發昭と同音とし、芭蕉をバセオと書きたるは、漢音をそのまゝ寫すためのわざなるも、今の世に用ゐるべくもあらず、是四問なり、

〔御答〕「若し必漢字の正音に就くべしとならば、チョウ、テウ、テフ、ショウ、セウ、セフの類のみにあらずして、古の音博士のわざに習ひ、キとクキ、クとクエとをも書きわくべきも此は難きわざならずや」キをクキと云ふは、例へば、歸は本邦にては常には單音にキと云へど次音はクキなり、然れども今日に至りて次音のクキは用ゐるに及ばざらむか「グ」を「クエ」と云ふは、例へば華は本邦にては單音に「グ」と多く云へれど次音は「クエ」なり、然れども、是も亦今日用ゐるに及ばざらむとおぼゆ、

「音博士が紀長谷雄と發昭と同音とし、芭蕉をバセオと書きたるは、漢音をそのまゝ寫すためのわざなるも、今の世に用ゐるべくもあらず、紀長谷雄と發昭と同音、又芭蕉をバセヲと書くは、昭も蕉も共に外轉の唇內聲にて韻のウは知行の于なれば、轉じて昭蕉となるなり、御說のごとく、今の世には用ゐずして可ならむ、

〔問〕「侵はシムと假名し、安はアンと假名すべしといへる說は、いとも疑はし、現に支那音を學べる人の說に、支那にて南音北音ともにかゝる差別はなしといへり、支邦の今音の誤れるにて、古音は我國に遺れりなどゝの說あれども信ひ難し、是五問なり、

〔御答〕「侵はシムと假名し、安はアンと假名すべしといへる說はいとも疑はし」との御說は、其の疑はしとある故を知らず、侵は內轉の唇內聲の字なれば、シムと書かむこと當然なるべく、安は外轉舌內聲なればアヌと書かむこと當然なるべし、アンとかくはアヌを撥ねたるなり、

「支那音を學べる人の說に、支那にて南音北音ともにかゝる差別はなしといへり」とあるは、頗いぶかし、支那は古より今に至るまで、南北の音に差異あるべし、漢音吳音と云ふも即是なり、但、此に云ふ所は唇內舌內の別なれば、南北の音にはかゝはることなしとおぼゆ、

「支那の今音の誤れるにて、古音は我國に遺れりなどゝの說あれども信ひ難し」とあるは、一わたりは然るごとなりとも云ふべし、然れども、支那は度々の革命を經たれば、音の轉せることもまた多き理なり、本邦は革命の事なければ、其の傳へたる字音は支那の古音の眞なりとは云ひ難かるべきも、其の音韻の古き姿は今に傳はれりと云ひてよろしかるべくや、

〔問〕「余は普通敎育の爲に、久しきこのかた、此の問題を思ひ煩ひたり、諸君余が爲に八重の狹霧を拂ひ給ひなば、此の上の喜はあらじ、

さりながらジョウとデョウ、クワンとカン、クワウとコウ、ワウとオウとの別の如きは、發音の上に明かにけぢめあれば（或地方を除き）、假名を誤らざるべきは論なし、又我が固有の國音にはあらで一地方の訛音は（東京にてひとしとを混じ、東北にてゆとずとを混じ、南方のひとふとを混ずるがごとし）、其の誤れるがまゝにすべくもあらず、

〔御答〕「ジョウとデョウ、クワンとカン、クワウとコウ、ワウとオウとの別の如きは、發音の上に明かにけぢめあれば、假名を誤らざるべきは論なし」

とあるは、勿論のことなるべし、但、ジョウとヂョウの如きは、東國人は云ひ別くるに難ければ、學ばざれば誤るべし、クワンとカンは開合にて區別し來れり、例へば觀音の觀は合音なる故にカンと云ふ類なり、云ひ、寒中の寒は開音なる故にカンと云ふなり、此の如くなれば、學ばざれば能はずとは云ふなり、但、これは支那の用例にはあらず、本邦の用例也、然して、此の開合の別は加行の音に限りて、此の如く云音わくるを例とし、其の他の音は然らず、例へば、桓糊(共に次音なり)とは云へども、端滝とは云はずして端滝(共に原音なり)と云ふなり、然れば、開合にて、原音次音を云ひわくるは、獨加行の音のみと云ひてもよろしかるべくおぼゆ、但、前件に云へる蹄革の類は合音なるも、「キ」「ゲ」と定めたらむ方便利なるべくや、

次に「クワウ」と「コウ」とゝあるは穩ならず、「クワウ」と「カウ」と、又「クヮウ」と「コウ」とゝあるべきか、但、是も既に云へるがごとき本邦の用例なり、次にワウとオウとゝあるも穩ならず、ワウとヲウと、又アウとオウとゝあるべきか、然して是等の音は、御說のごとく發音の區別明瞭なれば、假字も亦明瞭ならずばあるべからず、

「東京にてひとしとを混じ、東北にてゆとずどを混じ、南方にてひとふとを混ずるがごときは、其の誤れるがまゝに任すべくもあらず」とあるは然るべくおぼゆ、

以上御下問の條々に從りて、愚案を述ぶること此のごとし、但、小生のこれを教授せむとするに就きて思ふ所は、小學校に於いては、字音の單語、大略二百許を作りて、例へば、東京、王子のごときを知らしむべし、是は幼稚の時より、文字に假字用格のあることを知らしめて、口に練さしめむが爲なり、然るを、又小學校に於いては、字音の假字遣は知らしむるに及ばずとせば、字音の單語を教ふるの設は無くても可なるべし、然れども、成人の後字音の假字を知れるを便宜なりとせば、先入主となるの諺もあれば、幼稚の中より早く知らしむるをよしとすべし、然るを、又或は字音の假字は法則無きものと教ふべしとする說も出來らむか、是は小生は取らざる所也、若し小學校にて教へざらむには、

唯放擲して措く方よろしかるべし、中學以上に至りては、世間尋常通用の字音假字は、教授して然るべしと思はる、然れども、是も亦教授に及ばずとする論多からば、敎へずともありなむ、

若し、小學校にて字音の假字を教授せむとならば、其の方法には、文字の漢音吳音異音と、其の各音の一方に偏せず、普通所用の音を取りて(漢吳の兩音を常に用ゐる字あらば、兩音を用ゐるべし)假字を定むべし、例へば、東は「トウ」を取りて「ツウ」を省き中は「ツウ」「トウ」をともに省きて、中略和音の「チウ」を取り、公は「コウ」を取りて「クウ」を省き、木は「ボク」「ムク」共に普通とせば、「ボク」「ムク」並に取るがごとくしては、いかゞ、

又恐は「キョウ」を取りて「キユウ」を省き、松は「ショウ」を取りて「シユウ」を省き、宗は「ソウ」「シユウ」を取りて「ショウ」「スウ」を省くがごとくしては、いかゞ、

又神は「シヌ」「ジヌ」並「シン」「ジン」とし、民は「ビヌ」「ミニ」を一つにして「ミン」とし、金は「キム」「コム」並に「キン」「コン」とし、心は「ソム」を省きて「シム」を取り、これを「シン」とせば、頗便利ならむ、此の舌內聲唇內聲の「ヌ」「ニ」「ム」の韻は、總べて「ン」として妨無かるべし、其の故は「ン」は喉舌唇の三內に通ずる字なればなり、

御下問の條々に對して、愚意を述ぶること此のごとし、終に臨みてくだ〳〵しけれど、又申す、小學校に於いて文字の假字遣無しと敎へむことは、かへすがへすもわろかるべし、若し、假字遣は要する所にあらずとせば、敎授せずして棄て措くやよろしからむ、

附錄

樣の字は、平水韻に從ひていはむに、陽の音に屬する所なれば、陽はやう、樣はやうと書くを常とす、養洋なども同じ事なり、

用の字は、冬の字に屬する字なれば、冬はとう、用はようと書くを常とす、庸容なども同じ事なり、

要の字は、豪の字に屬する字なれば、要の字に比例すれば豪にげうの字はあれど、がうと書くを常とし、要はえうと書くを常とす、幼遙なども同じ事なり、然

して、此の要効遙などの音は、呉音えう、漢音やうなれば、或はやうといひ或はえうといひて、其の人、其の處に隨ひて二やうにいひしを後世に至りては、大略、漢音のやうを常とすることゝなれり、

右に述ぶるがごとくなれば、今日に於いて、字音を假名を人民一般に知らしめむとするは、とてもなし得がたき事なり、字音を能く知りたる人は、假名に書くを容易の事とおもふべけれど、これを知る人は尠なく、知らざる人は多し、

御下問の條に、字音を假名に書くの必要はなしとあるは、金言なるべし、然れば、書かるゝ限は、文字にて書く事とせば便利ならむ、諸學校に於いて、此のごとく敎へたてなば、文字を知らざる人の漢語交りの言語も、自然減少するに至らむ、此の事に就きては、下條に至りて申すべき事あり、

御下問の條に、要の字も今の支那音はやうにてえうにはあらず、音博士の古傳も強ちに信ひ難きをや、是一問なり(○以上支)とあるは如何なる御說にかいぶかし、其の故は既にも述べたるがごとく、要は漢音やう呉音えうにて、本邦にも亦要の音あり、是音博士の傳授にて、今の支那音のやうと打あひたるを、本邦には要にやうの音なしとして、音博士の古傳も強ちに信ひ難しとあるはいぶかしかども、旨と敎へしは漢音なり、然して、其の呉音の世に尙滅ぜざるものは、呉音は先入の音なれば也、斯くいふ徵は、豪に屬せる拗の字にやうの音あり、字音集卷十二拗とあり、稶にあうの音あり、倭名類聚抄卷十二稶子阿平之とあり、草にさうの音あり、萬葉集卷十四に久草無良とあり、是等の字皆豪の音に屬せる字なるが拗稶草と阿緯の音を以て音とするは皆漢音にいひたる徵なり、此のごとくなれば、本邦に要の漢音なしといはれたるを、いぶかしとはいふなり、

黑川眞道　佐藤仁之助
文傳正興　伊藤平可良　校

黑川眞頼全集第六　終

明治四十四年十二月廿五日印刷
明治四十四年十二月三十日發行
（黑川眞頼全集第六奥附）
非賣品

編輯兼相續者　東京市淺草區小島町廿八番地　黑川眞道
發行者　東京市京橋區新榮町五丁目三番地　國書刊行會代表者　早川純三郎
印刷者　東京市神田區表神保町二番地　三島宇一郎
發行所　東京市京橋區新榮町五丁目三番地　國書刊行會